

2019 年度

博士学位論文

「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観の
コミュニケーション学視点からの考察

指導教授 宮原 哲

西南学院大学大学院

文学研究科 英文学専攻 コミュニケーション学専修

志岐 早苗

目次

序章

1. 研究の目的と意義.....	1
2. 本研究の概要.....	3

第1章 恋愛コミュニケーション研究

1. コミュニケーション学領域における恋愛研究.....	4
2. 恋愛関係の特徴.....	5

第2章 〈研究1〉恋愛関係を維持する動機

1. 常に変化する恋愛関係.....	7
1-1. 動的な人間関係.....	7
1-2. 「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を適用した研究.....	8
1-3. 動的な恋愛関係の維持.....	12
2. 研究.....	16
2-1. グラウンデッド・セオリー・アプローチの視点に基づく質的研究方法.....	16
2-2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの視点に基づく質的分析方法.....	19
2-3. 研究対象者.....	20
3. 調査結果.....	21
3-1. RQ1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか.....	22
3-1-1. 代替できない相手・関係.....	22
3-1-1-1. 相手に対する特別な想い・愛情.....	23
3-1-1-2. 相手は自分の理解者.....	23
3-1-1-3. 価値観の共有.....	23
3-1-2. 社会的・経済的動機.....	24
3-1-2-1. 結婚のメリット.....	24
3-1-2-2. 結婚の重み.....	25
3-1-3. 自己肯定.....	25
3-1-3-1. 自分の存在意義の確認.....	26

3-1-3-2. 相手への執着.....	26
3-1-4. 「RQ1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」のまとめ.....	26
3-1-4-1. 恋愛関係を通して確認する自分の存在意義.....	26
3-1-4-2. 恋愛と日本社会.....	29
3-2. RQ1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか.....	34
3-2-1. 代替できる相手・関係.....	35
3-2-1-1. 相手に対する失望.....	35
3-2-1-2. 相手に対する特別な想い・愛情の減少.....	36
3-2-1-3. 自分を貫けない.....	36
3-2-2. 将来的不安.....	36
3-2-2-1. 将来を共に描けない相手.....	37
3-2-2-2. 子供・家庭を守れない.....	37
3-2-3. 「RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか」のまとめ.....	37
3-2-3-1. 恋愛相手としての価値.....	38
3-2-3-2. ジェンダー・ロールと恋愛.....	40

第3章 〈研究2〉「過去」の経験がもたらす「現在」の恋愛関係 および恋愛観への影響と変化

1. 恋愛関係に影響を与える要因.....	43
1-1. 過去の恋愛と現在の恋愛.....	43
1-2. 恋愛関係に影響を与える要因.....	45
2. 研究.....	48
2-1. 研究方法・分析方法.....	48
2-2. 研究対象者.....	48
3. 調査結果.....	48
3-1. RQ2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか.....	48

3-1-1. 自分の過去の恋愛経験によって構築された恋愛観.....	49
3-1-1-1. 自分の恋愛経験からの理解・気付き.....	49
3-1-1-2. 相手とは共有しない（しづらい）独自の恋愛観.....	50
3-1-2. 育った環境・親の影響によって構築された恋愛観.....	50
3-1-2-1. 親の行動・態度を基軸とした恋愛観.....	50
3-1-2-2. 自分の恋愛に親の意見を取り入れる.....	51
3-1-3. 恋愛に対する認識の変化.....	51
3-1-3-1. 結婚の重み.....	52
3-1-3-2. 異なる過去と現在の恋愛観.....	53
3-1-3-3. 離婚と世間.....	53
3-1-3-4. 恋愛と老後.....	53
3-1-4. 「RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えてい ると認識されているのか」のまとめ.....	54
3-1-4-1. 育った環境や親からの影響を受ける恋愛観・家族観・夫婦観.....	54
3-1-4-2. 婚姻関係における「恋愛」.....	55
3-1-4-3. 日本における家族.....	56
3-1-4-4. 過去に対する認識.....	60
3-1-4-5. 過去の経験が現在の恋愛に与える影響.....	60
3-2. RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか...64	
3-2-1. 環境の変化.....	65
3-2-1-1. 子供の存在.....	65
3-2-1-2. 生活の変化.....	66
3-2-2. 相手の変化.....	66
3-2-2-1. 相手の変化.....	66
3-2-3. 「RQ 3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているの か」のまとめ.....	67
3-2-3-1. 恋愛関係の変化.....	67
3-2-3-2. 「変化させること」に対する認識.....	69

第4章 〈研究3〉現代日本人の自己観

1. 自己観と人間関係.....	74
2. 日本的視点に基づいたコミュニケーション理論.....	78
3. 研究.....	80
3-1. 研究方法・分析方法.....	80
3-2. 研究対象者.....	81
4. 調査結果.....	81
4-1. 自己観の分類.....	81
4-2. 4つの自己観.....	92
4-2-1. 相互依存的自己観.....	93
4-2-1-1. 33歳未婚女性 (f-13)	93
4-2-1-2. 31歳既婚女性 (f-17)	94
4-2-1-3. 相互依存的自己観の傾向が強い人々.....	95
4-2-2. 2文化型自己観.....	96
4-2-2-1. 36歳既婚男性・子有り (m-4)	96
4-2-2-2. 43歳既婚女性・子有り (f-22)	97
4-2-2-3. 2文化型自己観の傾向が強い人々.....	98
4-2-3. 周辺化型自己観.....	98
4-2-3-1. 37歳既婚男性・子有り (m-6)	98
4-2-3-2. 42歳独身男性 (m-19)	99
4-2-3-3. 周辺化型自己観の傾向が強い人々.....	99
4-2-4. 独立的自己観.....	101
4-2-4-1. 41歳未婚女性 (f-11)	101
4-2-4-2. 34歳既婚男性・子有り (m-5)	103
4-2-4-3. 独立的自己観の傾向が強い人々.....	104
4-2-5. 周囲から切り離せない自己.....	105
4-2-5-1. 41歳既婚男性・子有り (m-1)	106
4-2-5-2. 43歳未婚女性 (f-20)	107
4-2-5-3. 46歳既婚女性・子有り (f-23)	107
4-2-5-4. 35歳未婚女性 (f-21)	109

4-2-6. 周囲から切り離せない自己を持つ人々.....	112
4-2-6-1. 4つの自己観以外の自己観.....	113
4-2-7. 分離型自己観.....	114
4-2-7-1. 34歳既婚男性・子有り (m-14)	114

第5章 〈研究4〉「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の 日本人への適用

1. 欧米のコミュニケーション理論の異文化への適用.....	117
2. 欧米のコミュニケーション理論の異文化への適用の例：「Relational turbulence model/ 関係乱気流モデル」.....	118
3. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」.....	123
4. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の日本人への適用.....	125
5. 研究.....	126
5-1. 研究方法・分析方法.....	126
5-2. 研究対象者.....	126
6. 調査結果.....	127
6-1. 相手の「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」.....	127
6-2. 自分の「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」.....	131

第6章 考察

1. 本研究からの知見.....	136
2. 日本社会における「個（子）」と「親」.....	137
3. 日本社会の「型」と恋愛.....	141
4. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」と自己観から考察する日本人の恋愛コミュニ ケーション理論.....	146
4-1. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に対する日本人独自の認識.....	146
4-2. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」と自己観から考察する日本人の「個」	148

第7章 研究課題と今後の展望

1. 研究課題.....	152
2. 今後の展望.....	154

引用文献.....	157
-----------	-----

「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観の コミュニケーション学視点からの考察

序章

1. 研究の目的と意義

昨今の日本において、生涯未婚率の上昇、晩婚化の増加、若者の恋愛離れなど、恋愛に関連する事象が社会問題化している。またストーキング、リベンジポルノ、デートDVなどの犯罪は後を絶たず、これらの事象の発端のひとつが恋愛であると考えられる。さらに、恋愛に対する考え方や恋愛形態の多様化が進みつつある一方、社会が求めそして暗黙の了解のうちに当たり前だと見なされているある一定の「型」に入りきれなかった、またはその「型」から外れてしまった人々が「普通ではない人」、「問題がある人」として扱われていることもまた事実ではないだろうか。良くも悪くも「異」という表面的なことだけが注目され、話題になる現代日本において、特定のコンテキストにいる人々が実際にどのようなコミュニケーションを行い、そしてどのような関係性、視点、価値観を生み出しているかなどについて明らかになっていることは多いとは言えない。

日本人の恋愛を対象とした研究は心理学の領域を中心に存在しているが（例：高坂、2016；立脇・松井・比嘉、2005）、人間関係に基軸を置くコミュニケーション学視点からの研究はあまり多くない（例：多川・吉田、2006；和田、2000）。さらにコミュニケーション学領域では、欧米の研究者を中心に欧米の文化に則した理論や概念の構築が行われてきた歴史がある（Kim, 2002; Theiss & Nagy, 2012; 2013; 浜口、1982; 1996）。それらの理論を用いて、「欧米以外の文化での人間関係やコミュニケーションを十分に説明することはできない」という点は、多くの研究者たちから既に指摘されている（例：Kim, 2002; 中西、2011; 浜口、1996）。現時点において、日本国内で行われている日本人を対象とする恋愛研究にも欧米の理論が多用されている（例：石本・今川、2001; 2003; 多川・吉田、2006; 牧野、2013; 和田、2000）。これは日本人のコミュニケーションを説明する場合でも、その多くを欧米の理論に頼らざるを得ない、つまり日本人のコミュニケーションを説明するための理論構築が盛んに行われておらず、かつ、恋愛コミュニケーションに関する独自の知見が、日本国内で十分に蓄積されないということを示しているのではないだろうか。

本研究は、欧米で構築された理論・概念を敢えて文化や社会的価値観の異なる日本のコミュニケーションに適用することで、欧米で発展してきた理論や概念が、日本社会や文化において適用できる部分とできない部分をあぶり出し、欧米以外の研究者による、欧米以外のコミュニケーションを説明する理論構築の一端を担う貢献ができるものと考えられる。そこで本研究では、アメリカ人研究者によって創出された「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)を日本人に適用することを試みる。人間関係の発展、維持、変化、そして衰退などのプロセスを説明する理論は、「社会的浸透理論/Social penetration theory」(Altman & Taylor, 1973)や「不確実性減少理論/Uncertainty reduction theory」(Berger & Calabrese, 1975)などさまざま存在するが、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を日本人の恋愛に適用することで、日本でのコミュニケーションの独自性が顕著に表れると考えている。

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」は、個人の性格や特質、現在の人間関係、そして個人が持つ過去などを指す(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)。そして Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) や Frisby, Sidelinger, & Booth-Butterfield (2015) は、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」が恋愛関係においてどのように認識され、どのような影響を二人に与えているかを説明している。この概念は、アメリカ社会およびその文化を背景に生み出されたものであるが、文化や社会が違っても「人は誰もがそれぞれの性格や特質を持っている」、「過去を経て現在を生きている」、そして「過去の経験が現在の自分に何らかの影響を与えている」などは共通していると考えられる。

一方、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」をどのように捉え、どのようなコミュニケーションを行うかは、日本とアメリカでは共通する部分もあると考えられるが、相違点があることも予想される。その相違点に影響を与えられようとする要因のひとつに「自己観」が挙げられる。欧米では、個人と周囲の境界が明確であり、人は自らを他者から切り離した独自の存在であると考えている。それに対して日本では、自己と周囲の境界が曖昧で、自分の存在を周囲の人間関係の一部であると捉える傾向が強い(Kitayama, 2000; Markus & Kitayama, 1991; 浜口, 1982)。この自己観に基づいて考えると、日本では「荷物」が自分の所有物ではないとしても、相手が荷物を持っており、さらにその荷物が二人の関係に持ち込まれることで、「自分の荷物である」、「二人が共有する荷物である」と認識することがあるかもしれない。この概念の適用を通じて、日本人の人間関係に対する独自性が見られるのではないかと考えている。

2. 本研究の概要

本研究は、欧米で構築された理論や概念を日本でのコミュニケーションに当てはめることで、それらが日本で適用できる部分とできない部分を明らかにし、日本でのコミュニケーションを説明するための理論構築の一端を担う貢献を果たしたいと考えている。

欧米の理論や概念には、文化や社会を問わず人間に共通し一般化されていることを示すものもあれば、欧米の文化や社会的背景を持つ特定の人々だけを説明しているものもあると考えられる。本研究では、欧米の理論や概念のどのような点が日本文化や社会に適用できるのか、もしくはできないのか、そしてどのような視点に基づけば、日本でのコミュニケーションを説明できるのかなどに関する議論や問題提起を行う。また本研究では、「日本人」、「アメリカ人」などの記述をしている箇所がある。これは、「日本（アメリカ）社会で育ち、その文化および社会的影響を受けている人」を意味しており、国籍、民族、人種的背景に基づくものではない。本研究の概要は以下の通りである。

第1章では、「恋愛コミュニケーション」に関して、これまでどのような点が注目され、どのような研究が行われてきたのか、そしてそこから導かれた恋愛関係の特徴、さらに現代社会における恋愛コミュニケーション研究の必要性などについて述べる。第2章では、「恋愛関係の流動性」に注目し、恋愛関係を維持する動機となる要因、また維持する動機を失わせる要因についてインタビュー調査、データ分類・分析を行う（研究1）。第3章では、恋愛を含む個人の過去の経験が、現在の恋愛や恋愛観に与える影響について注目し、「過去の経験」と「現在の恋愛」がどのように関連し合っているのか、また過去がどのように個人の「恋愛観」を形成していくのかなどについて、インタビュー調査、データ分類・分析を行う（研究2）。第4章では、インタビュー調査における研究参加者の発言には、日本人の傾向を表すとされている「相互依存的自己観」（Markus & Kitayama, 1991）に関連するものだけではなく、「独立的自己観」の特徴を示すものも多く存在していた。この点に注目し、追加で「自己観」に関する質問票調査を実施した。さらに、自己観を「文化的」レベルのみならず、「個人的」レベルからも考察することにより、同一文化内の「個」の視点と恋愛を関連付けながら、「日本人の恋愛」を追究していく（研究3）。第5章では、アメリカで創出された「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」（Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009）を日本人の恋愛コミュニケーションに適用する。そして、欧米の恋愛理論が日本人に適用できるのか、もしできないのであればどのような点なのかについて議論し、日本人独自の恋愛コミュニケーションや恋愛観に関する考察を行う（研究4）。第6章では、本研究で得た日本人の恋愛コミュニケー

ションの特徴や恋愛観についての知見を述べ、その考察を行う。そしてそれらを基に、欧米の理論とは異なる「日本人のコミュニケーションを説明するための理論」を構築するにあたり、必要な視点を提起する。第7章では、本研究を振り返り、研究課題および今後の恋愛研究の展望について述べていく。

第1章 恋愛コミュニケーション研究

1. コミュニケーション学領域における恋愛研究

これまでコミュニケーション研究の多くが欧米を中心とした研究者によって行われてきた (Kim, 2002; Theiss & Nagy, 2012; 2013; 浜口, 1982; 1996)。そして Littlejohn & Foss (2008, p.48) は、「コミュニケーション研究者は、文化や社会に関係なく人間の経験の中心に存在するのがコミュニケーションであるという視点を持っている」と主張している。また Vander Voort & Duck (2000) は、人間の感情や考え方は時の経過や周囲の要求などにより変化し、人間関係は固定されていない。さらに、「経験したこと」と「人間関係」は一致しているため、研究者に求められているのは、コミュニケーションを行っている者の「人間関係」について説明することであると主張している。つまり、コミュニケーション研究の対象が「誰」であっても、そしてその研究を「誰」が「いつ」、「どこ」で行ったとしても、「人間関係」と「コミュニケーション」が研究の核であるというのが、これまでの欧米研究者による定説である。そして、恋愛を含めたコミュニケーション研究は、これまでアメリカを中心とした欧米諸国で盛んに行われてきたが、それらの多くは当然、欧米文化の価値観に基づいている。どのようなコンテキストであったとしても、その研究が欧米の研究者によって欧米で行われたのか、それとも日本の研究者によって日本で行われたのかによって、それぞれの研究が注目する点や得られる内容は異なると考えられる。

一方、日本における対人関係研究の多くは、心理学、社会学、精神医学などの領域にとどまり、メッセージの交換を通して関係を構築、維持、発展、崩壊、さらには解消という「人間関係」を軸としたコミュニケーション学視点からの研究はあまり行われていない。これは、「恋愛コミュニケーション研究」についても同じことが言え、多川・吉田 (2006) の「日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響」、和田 (2000) の

「恋愛関係の崩壊時のコミュニケーション」などが存在するが、それ以外に多くの研究は見当たらない。

そして、これまで日本で「恋愛」が研究の対象になることが少なかった理由のひとつとして、日本独自の「恋愛のあり方」が関連しているのかもしれない。日本と欧米では、対人コミュニケーションの特徴や人間関係に対する考え方などが異なるだけでなく (Kitayama, 2000; Markus & Kitayama, 1991; 宮原, 2006)、日本における恋愛のあり方やその位置付けなども欧米とは異なるからこそ、欧米では恋愛が研究の対象であったとしても、日本では研究対象として捉えられなかったのかもしれない。日本における恋愛のあり方や位置付けについても日本人の恋愛コミュニケーション同様、明らかにされていることは少ないと言える。

また昨今の日本において、デートDV、ストーキング、リベンジポルノなど恋愛に関連した犯罪が深刻化していることも事実である (朝日新聞デジタル, 2017年3月20日; 村上, 2009; 渡辺, 2015)。日本での恋愛のあり方や実際に行われている恋愛コミュニケーションに注目し、日本独自の恋愛を明らかにしていくことは、現代日本において求められていることであり意義があると考えられる。

2. 恋愛関係の特徴

これまで行われてきた恋愛研究から、恋愛や恋愛関係のさまざまな特徴が明らかになっている。人は恋愛をすると相手のことで頭も心もいっぱいになり、気分が極端に高揚したり落ち込んだりすることが繰り返され (ハットフィールド・フォース, 2017)、恋愛は人生で最も刺激的で楽しい経験であると言える (Bratslavsky, Baumeister, & Sommer, 1998)。そして、人間はひとりでは生きられない社会的動物であるため (ヘンドリック・ヘンドリック, 1998)、人は愛するパートナーに依存し、人間の基本的欲求を満たしている (Baumeister & Leary, 1995)。さらに恋愛は、誰かによって自分が高く評価されていると感じさせてくれるものである (ダック, 2000)。これらのことから、恋愛とは個人の日常や人生において重要な意味を持ち (ゴードン, 2017)、人生を目的と意義に満ちたものにしてくれると言える。そして、恋愛関係とは相互依存的な関係性であり (Baumeister & Leary, 1995; Cavallo, Murray, & Holmes, 2013; McDonald & Leary, 2005)、恋人同士である二人が、相互作用を繰り返すことで独自の関係をつくり上げた結果 (Mills & Clark, 2001)、それぞれが「自分」のことを「二人」と認識するようになる (Agnew, Van Lange, Rusbult & Langston, 1998)。

一方、恋愛には喜びや自尊心をもたらす以外の側面もある。恋愛関係は家族関係や友人関係などとは違い、二人以上の人間との関係を同時に進行していくことはほとんどない。従って、恋愛関係にいる者たちは、たったひとりの相手との関係を維持することになるため、互いが依存し合うだけではなく、時に片方がもう片方に対して過剰に愛情を求めたり、過度に依存することなども珍しいことではない。そして、恋愛関係の親密性や相互依存という特徴が、二人に痛みや苦しみをもたらすこともある (Duck, 2007; Weber, 1998)。恋人と親密になり依存し合うようになると、「相手が自分のことを受け入れてくれない」、「自分に応えてくれない」などの気持ちに陥りやすくなる。そして、関係が悪くなったりトラブルに直面すると、相手に否定的な感情を抱いたり、攻撃的な行動を起こすこともある (Duck, 2007)。しかも、二人の価値観や人生に対する考え方などは必ずしも一致するわけではないため、相違点や問題点が浮き彫りになることは頻繁に起こると考えられる。ハネムーンの時期が過ぎたら二人の関係は現実的なものとなり、関係の良い面だけではなく、悪い面もまたはっきり見えるようになるということなのだろう。

そして関係において、「別れ」が明確に存在することも恋愛関係の特徴として挙げられる。例えば日本において、人間関係が「自然消滅」することはよくあることだとしても、人は「絶交」、「絶縁」などという言葉を使ってまで、関係を能動的に断ち切るようなことはあまりしない。家族関係であれば、親から勘当されたり、親や兄弟姉妹と疎遠になったり、関係が悪化したり、また絶縁状態になることがあるかもしれない。だが人間関係に関して、誰かが亡くなる以外の状況において、明確な別離というものに遭遇したり、関係の終焉が表面化することはあまりない。だが恋愛関係では、複数の恋人との関係を同時進行している者を除いて、人はひとりの相手とひとつの関係を築き維持している。そしてその関係がうまくいかなくなったり、どちらかが「相手と別れたい」、「別の人を好きになった」などの状況に直面したとしても、二人揃って関係解消を望んだり、両者が円満に別れることはそう多くはない (Hill, Rubin, & Peplau, 1976; Weber, 1998)。

さらに、片方が関係から去りたいと考えていても、もう片方が関係解消を拒否し続ける場合、去っていく相手を執拗に追い回すなどのストーキング行為に及ぶ者もいる。ミューレン・パーセル・パテ (2003) によると、多くの場合、ストーキング行為が起こるのは、親密だった二人の関係が以前とは異なる方向へ変化し始めた時である。そして相手に自分の存在を拒絶されたり、関係を拒否されたり、また相手から別れる意志をはっきり告げられたことにより、ストーカーに豹変する者もいる。このように、別れや関係解消が明確に存在する関係性だからこそ、両者が別れることに同意していない、納得し

ていない場合、そこから大きな問題が引き起こされることが考えられる。そして、このミューレンら（2003）が述べているストーキング行為は、「恋愛」に端を発していることは日本と欧米で共通していたとしても、ストーキング行為に至った理由や背景は、両文化において必ずしも同じではないと考えられる。例えば、ストーキング行為に及ぶ理由が、「自己を否定された」、「自尊心を傷つけられた」など「自尊心」に基づくものであったり、「周囲に顔向けができない」、「面子が保てない」など「面子」に関するものかもしれない。さらに自らのストーキング行為を「正義」と捉えることもあれば、「復讐」と意味付けすることもあるだろう。日本と欧米では同じ事象であっても、それに対する認識や行動が一致しないこともあるため、これまでの欧米の恋愛研究で導かれた結果が、日本人の恋愛にすべて当てはまるわけではないと言える。仮に、「恋愛関係」という関係性が共通していても、それぞれの文化での「恋愛」や「関係」が持つ意味やその位置付けが異なることも十分に考えられる。

Bratslavsky ら（1998, p.307）は、「恋愛や恋愛関係を研究することは非常に難しいことであるにもかかわらず、この分野の研究は拡がりを見せている。恋愛研究者たちは、恋愛を理解することの重要性を世に示し続けている」と述べている。人々や社会から常に新しい視点が提起される「恋愛」や「恋愛関係」という対象に、研究者たちは引き続き注目していく必要があることに加え、本研究が追究する「日本人の恋愛」のように、文化的視点からの考察もまた重要であると言えるだろう。

第2章 〈研究1〉 恋愛関係を維持する動機

1. 常に変化する恋愛関係

1-1. 動的な人間関係

恋愛コミュニケーションを含めた対人コミュニケーション研究で軸となるのが、「人間関係」である。人間関係は、メッセージの交換を通して構築、維持、発展、崩壊、そして解消などのさまざまな段階において常に変化し続けていると言える。Baxter & Montgomery（1996, p.72）の「Relational dialectics theory/動的な人間関係」によると、「人間関係とは求心力と遠心力がそれぞれせめぎあい、絶えず上向きに動いたり下向きに動いたり、くっついたり離れたりしながら常に変化し続ける」。互いが異なる考えを持ち、対立することは自然なことであり、それは必ずしも否定的な意味を持つのではない。人は相手との相互作用を繰り返し、そしてさまざまなプロセスを通して、自分の反対側に

あったものを認めるようになり、両者のバランスが取れるようになることもある。さらに、個人と個人の相違点も常に動き続けるため、二人にとって納得できる最善の立場や状況をつくりあげていくこともできる。「動的な人間関係」という視点に立つと、両者が不一致や違いに直面し、それに対してもがくことは自然なことなのである。これらが「Relational dialectics theory/動的な人間関係」(Baxter & Montgomery, 1996)の主な考え方である。

そして、「Relational dialectics theory/動的な人間関係」の視点からコミュニケーションを考察すると、「コミュニケーションとはシンボリックである」と捉えることができる。宮原(2006)によると、人間のコミュニケーションはシンボル活動であり、シンボルそのものが意味を備えているわけではなく、それを使う人間が恣意的に意味を当てはめ、相手と交換し、共有する道具である。そしてBaxter & Montgomery(1996)もまた、コミュニケーションとは人間が意味付けしているシンボルで成り立っており、コミュニケーションを行う者がどのようなコミュニケーションを選択するか、どのようなコミュニケーションを行うかによって、それぞれの関係性は変化し、独自性を生み出すと述べている。宮原(2006)やBaxter & Montgomery(1996)が主張するように、人間はシンボルを使い意味を創造し、人間関係を構築、発展、維持させ、そして場合によっては崩壊、解消に導くなどのコミュニケーションを行っている。人間は変化し続ける。そしてそのような人間によって創造される人間関係もまた変化し続けている。本研究が追究する恋愛コミュニケーションも常に変化し続けるものである、という点を理解した上で考察を行っていく。

1-2. 「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を適用した研究

人間関係は、構築、発展、維持、崩壊、そして解消などの局面を含んでいる。そして関係がどのような状態であったとしても、人間関係は一定の方向にだけ進んでいるのではなく、さまざまな方向に動き続けている。さらに人間関係には、「義務からの解放」と「関係における義務」のような相反する欲望が存在し、人は相手から対立する圧力を受けている(Baxter & Montgomery, 1996)。そして恋愛関係に関して、人は恋に落ち相手に惹かれるようになると、親密さを求め相手との関係を深めていく。それと同時に、人は誰もが異なる人間であり、自立した存在であるため、「相手とのつながり」と「自立」という異なる2つの間で引っ張られ合う状態に置かれることがある。また、相手に自己を開示すること、そして自分の中に留めておきたいプライバシーを持っていることが共

存することもある。恋人に対して、誰もが自分のすべてを話したり、あらゆることを共有したいと思っているわけではないだろう。「開示」と「プライバシー」という対立もまた、関係において多くの人が経験している (Baxter & Montgomery, 1996)。さらに Baxter & Montgomery (2000) は、関係の変化と安定という2つの相反する要素について次のように述べている。変化や目新しさは関係に面白さや興味深さを与えてくれる。一方、安定は二人で過ごした時間や経験を基に生み出されるものである。「変化」と「安定」という2つの異なる要素もまた、関係には必要だと考えられているのである。

Baxter & Montgomery (1996; 2000) の主張によると、異なる価値観や考え方などを持つ者同士は、コミュニケーションを通じて状況や関係をより良いものにしたたり、二人独自の接点や解決方法を見つけたり、さらには新しい価値観さえ見出すこともできる。そしてどのような状態、どのような関係をつくり出すかは、両者のコミュニケーションの結果によると言える。そしてこの「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を人々のコミュニケーションに当てはめた研究が、「コミュニケーション」と「人間関係」の関連性を示している。

Goldsmith (1990) は「Relational dialectics theory/動的な人間関係」の視点に基づき、人間の「自立」と「つながり」という2つの要素が、二人の恋愛関係の「質」をどのように変化させたのかについて調査を行った。その結果、自立は「自己肯定」や「自己責任」に、そしてつながりは「共依存」や「関係の中に自己を位置付けていること」に、それぞれ関連があることが分かった。さらにこの自立とつながりは、互いに依存し合っており、それぞれ単独では存在できないことを示した。相反するように見える自立とつながりは、それぞれのカップルの「独自の関係性」や「二人でいることの意味」を生み出し、かつ、関係の質を向上させることに影響を与えていた。

また、Moore, Kienzle, & Flood-Grady (2015) は、「婚前同棲」を「非伝統的」、そして「プロポーズ」を「伝統的」と位置付け、この2つを対比させながら恋人同士のコミュニケーションに注目した。その結果、婚前同棲は必ずしも非伝統的要素だけを含むのではなく、事前に相手のことをよく知り、将来起こり得る離婚のリスクを避けることを可能にしていた。通常は非伝統的だと考えられている婚前同棲であるが、「ひとりのパートナーと一生添い遂げる」という伝統的価値観に関連が深い行為であることが分かった。一方プロポーズは、念入りに準備をして男性から女性へ行われる儀式であると欧米では一般的に考えられている。だが Moore ら (2015) の調査によると、プロポーズは男性が膝をついて行うのではなく、女性から行った、また念入りに準備することもなく会話の

流れで、または勢いにまかせて相手にプロポーズしたなど、プロポーズの形式はこれまで考えられていたものとは異なっていた。このように、一般的な欧米の通説とは違い、「婚前同棲」は「伝統的」価値観に関連し、「プロポーズ」は「非伝統的」な形式で行われていることが明らかになった。この Moore ら (2015) の研究は、ある一定の文化のおよび伝統的な「型」があると想定されていることに対し、カップルが行ったコミュニケーションは、その型にはまらない二人独自の結果や意味を創造することを導いた。これは、「コミュニケーションはシンボリックである」という Baxter & Montgomery (1996) の「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を立証する結果だったと言える。

さらに Wilder (2012) は再婚同士の夫婦を対象に調査を行い、再婚がもたらした「葛藤」に、どのようなコミュニケーションを行ったかという点に注目した。調査によると、ある男性は再婚後も元妻との子供と頻繁に会っていたが、その事を現在の妻に話すことを躊躇していた。なぜなら、子供と会ったことを話すことで、そこから元妻や前の結婚に関する話題になるかもしれない、「目の前にいる今の妻を傷つけるかもしれない」と考えていたからである。その男性は、「現在の結婚」と「過去の結婚」の間で揺れ動いていたが、最終的に「現在の妻の前では過去の話をしなさい」ということで、自分の中で折り合いをつけていた。この Wilder (2012) の研究は、関係の中には葛藤があり、相反する2つの状態に挟まれていたとしても、人はその葛藤に向き合い、問題点を確認しながら独自の解決方法を生み出し、そして関係を強固なものにしていくことが可能であることを示していた。

「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を適用した先行研究では (Goldsmith, 1990; Moore et al., 2015; Wilder, 2012)、困難な状況に遭遇したり、予期せぬことが起こったとしても、現実に対する解釈を変えたり、関係をうまくいかせる方法を生み出すことにより、互いが納得いく結果を導いていた。そして、それぞれの結果に至るプロセスにおいてコミュニケーションが重要な役割を果たしていた。Baxter & Montgomery (2000) は、人は異なる考え方や新しい環境を拒絶していても、それらに対処したり適応する能力を持っている。そして不明瞭で理解し難い事柄であっても、コミュニケーションを行うことにより、問題のあり方や状況を変化させ、互いが納得できる結論を導くことができると述べている。

「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を適用したこれらの先行研究は、すべてアメリカ人を対象に行われている。「人間は動的である」という共通点はあるにせよ、同じような研究結果が日本で導かれるかどうかは分からない。例えば、「現在の結婚」

と「過去の結婚」の間で葛藤していた男性は、前の結婚や子供についての話題を現在の妻の前ではしないことで、自分が置かれている状況や葛藤に折り合いをつけていた。だがこれは、結婚とは「自分」と「妻」だけの関係であるという前提があった上での行動だったのではないだろうか。前の結婚は「自分」と「元妻」の関係であり、今の結婚は「自分」と「現在の妻」の関係である。そう考えると、「自分」と「現在の妻」の間に起こる問題であれば、彼が向き合いそしてコミュニケーションをする相手は「現在の妻」ということになる。

これに対して、周囲の人間と自己の境界が曖昧で、自分の存在を周囲の人間関係の一部であると捉える日本では (Markus & Kitayama, 1991)、結婚は、「自分」と「相手」だけの関係ではなく、「自分」と「相手」、そして「互いの家族」や「周囲の人々」までを含めた関係と認識されることの方が多いかもしれない。そう考えると、この先行研究と同じコンテキストを日本人に当てはめて調査をすると、異なる結果が導かれる可能性もある。さらに「結婚」や「再婚」に対する認識も、それぞれの文化や社会によって異なると考えられるため、その点も調査結果に影響を与えることが十分に考えられる。

「Relational dialectics theory/動的な人間関係」の視点から追究した前述のアメリカでの先行研究は、Baxter & Montgomery (1996; 2000) が主張しているように、人間関係やコミュニケーションが「動的」であるということを示したことに加え、Littlejohn & Foss (2008) の「人間の経験の中心に存在するのがコミュニケーションである」、Vander Voort & Duck (2000) の「人間の経験と人間関係は一致している」などの主張を実証した結果だったと言えるだろう。一方、人間関係において相互依存的傾向が強いとされている日本では (Markus & Kitayama, 1991)、関係に対する考え方や関係におけるさまざまな事象をどのように位置付けるか、さらに同じコンテキストであっても、行われるコミュニケーションは欧米とは異なると考えられることから、この「Relational dialectics theory/動的な人間関係」を日本人に当てはめたとしても、これまでの欧米主導での先行研究とは異なる結果が導かれるかもしれない。さらにアメリカで発展したこの理論が、日本社会で育ち、その影響を受けている人々のコミュニケーションを説明できるかどうかについて、文化的側面からの十分な検証が行われているわけではないと考えられる。この「Relational dialectics theory/動的な人間関係」が日本社会における人々の恋愛を含めたコミュニケーションに適用できるのかについて、今後さらに追究していく必要があるだろう。

1-3. 動的な恋愛関係の維持

人間関係は動的であり (Baxter & Montgomery, 1996; 2000)、恋愛関係もまた動的であるからこそ、一度築いた関係であってもそれを維持することは容易なことではない。恋愛関係を維持することの難しさについて、さまざまな視点から説明が行われている。

恋愛関係において、人は相手への情熱、独占欲、性的欲望、責任感などを持つが、そのような感情や情熱は長く続くものではなく、上がっていくものは落ちていくこともある (Griffin, 2009)。そして、恋に落ちる時と同じくらい、人は急速に恋から冷めてしまうこともあり (スタンバーグ・ヴァイス、2009)、恋に落ちるといふ激しい経験は一時的なもので、そのような感情はせいぜい数ヶ月程度しか続かない (ヘンドリック・ヘンドリック、2000)。さらに、Fletcher & Kerr (2013, p.307) によると、「長期間にわたり維持されてきた恋愛関係の多くが解消されていることから、恋愛に対して肯定的な考え方を持ち続け、その関係を持続させることは非常に難しい」。また Vangelisti (2011) は、現時点で相手のことを好きだとか愛していると思っていたとしても、数日後、数ヶ月後、そして数年後にはどうなっているのかについて、はっきりと予測することはできない。さらに、異なる二人の人間によって構築された人間関係を共有し維持するには、二人が自分のことだけではなく、相手の変化についても対応し続ける必要があると述べている。

また、自分が所有している物や人間関係などが自分にとって良い状態である時、それらについて、また自分とそれらとの関係について考えることはない。もし、「何かおかしい」と感じた対象が機械であれば、その原因をつきとめることはさほど難しいことではなく、さらに修理をすれば元の状態に戻すことも可能である。だが人間関係はそう簡単にはいかない (Duck, 1998)。相手との関係が「いつもと違う」、「何かおかしい」と感じたとしても、その原因が何であるかを突き止めることは容易なことではなく、原因が分からないこともあるかもしれない。仮に問題の原因が分かり、それに対して行動を起こしたとしても、どのような結果をもたらすかについて完璧に予測することは不可能である。だが、これまで維持できていた関係に何かが起こり、望まない方向へ進み始めている状態を放っておけば、その関係は停滞しそして崩壊する可能性もある。人は恋愛関係を構築し、相手と親密な関係になったとしても、その状態や関係を自然と保ち続けられるわけではないと言える。なぜなら Baxter & Montgomery (1996; 2000) が主張するように、人間関係とはある一定の状態とどまっているのではなく、常に動き続けているからである。

そして、両者の「相違点」もまた、関係を維持することを難しくさせると考えられる。恋愛関係を築いている二人は異なる人間である。二人には共通点や類似点もある一方、これまで歩んできた人生や経験などから生み出される相違点も多いと考えられる。過去の経験によって形成された独自の価値観や考え方を、それぞれが「関係」に持ち込むことで、関係に影響を与えたり、関係を揺るがせたり、そして二人の関係性をこれまでとは違うものへと変えていくこともあるかもしれない。人間関係を築いたとしても、その関係を「うまくいかせる」よりも「うまくいかせない」要素の方が多いのではないだろうか。さらに人間関係は「動的」である（Baxter & Montgomery, 1996; 2000）ということからも、関係を満足した状態で維持するためには、それぞれが関係に向き合う必要があると言えるだろう。

恋愛関係を維持させるためには、能動的に行動を起こすことの重要性がこれまでの研究によって示されている。Sternberg（1986）の「愛の三角理論」によると、恋愛関係は「情熱」、「親密性」、「コミットメント」の3つの要素で構成されており、これらは二人が困難な時を乗り越え、関係を継続していくためには欠かせないものであると考えられている。そして LaBelle & Myers（2016）は、恋愛関係を維持するためには日々のコミュニケーションが大きな役割を果たすと主張している。さらに宮原（2000、p.60）は、コミュニケーションと人間関係について、「コミュニケーションがあってこそ人間関係が生まれるわけで、あらかじめ人間関係があってそこで起こるひとつの現象がコミュニケーションであるというのは矛盾した考え方である。つまりコミュニケーションは人間関係の一部なのだ」と述べている。コミュニケーションを通し構築された恋愛関係は、その後さらにコミュニケーションを繰り返すことにより維持されていくと考えられる。

そして、Stafford & Canary（1991）は662名の既婚者と恋愛中の未婚者・独身者に調査を行い、恋愛関係を維持するには次の5つの行動が必要であると明らかにした。まず互いを受け入れ、明るい状態で両者がよく話をして、批判を避けるなどの「肯定性」。二人の関係について率直に話し合い、自分の要望を示し、透明性のあるコミュニケーションを行う「開放性」。相手に対する誠実さを示し、二人の将来や関係の永続性を確認し合う「保証行動」。互いの家族や友人と親交を深め、必要な時には相手に頼るなどの「ネットワーク」。そして家事などの仕事を分担して行い、二人が直面する課題を共有する「課題の共有」の5点である。このように、恋愛関係を維持するには互いが働き掛け合うこと、そしてコミュニケーションを行うことの重要性が先行研究から明らかになっている。

さらに Duck (2007) によると、人は「成功している関係」や「失敗した関係」という言葉を使い、他人の人間関係を判断する傾向があるという。成功している関係に必要なのは、関係の「継続期間の長さ」であり、ひとつの関係をどれだけ長く保っているか、ひとりの相手とどれだけ長い期間を過ごしてきたかが重要だとされている。一方、解消に至った関係は「失敗」と見なされる。ある個人が「関係を断つ」という決断をした場合、「関係を終わらせるのは早過ぎたのではないか」、「別れる以外の選択肢はなかったのか」などと周囲に言われ、さらにその別れに対する説明を求められる (Duck, 2007)。

関係の継続に関して日本にも似たような考え方がある。結婚生活を 25 年間継続すれば銀婚式を、50 年間継続すれば金婚式を祝う風習が日本には根付いている。結婚記念日を祝う風習は欧米由来とされているが (コトバンク、2018)、結婚生活の 25 年や 50 年がどのようなものであり、本人同士がどのように感じているかに関係なく、「長期にわたる関係の継続」は周囲の人々に祝福され称賛されるのである。Canary & Stafford (1994) によると、恋愛関係を築いている者の多くは、相手と長く付き合っていくことを望んでいるというが、世間や周囲という「他者」もまた、自分には直接かかわりのない「他者」の恋愛関係や婚姻関係であったとしても、その関係が継続されることを望んでいるということなのだろう。これまでの研究から、恋愛関係を維持するためには互いが働き掛けることやコミュニケーションが重要であること、さらに恋愛関係の継続は当人たちだけではなく、周囲や社会からも望まれていることなどが明らかになっている。

そして、「継続」という点に注目し、「仕事」を例にアメリカと日本を比較すると両者には大きな違いがある。アメリカでは 2-3 年くらいの期間で転職することはそう珍しいことではない。人は今よりも高い職位や給料を求め、そして自分の目標や将来のために転職する。これは、アメリカでは人々は自己尊重や自己実現を求めるという Kitayama, Markus, & Kurokawa (2000) の主張にも一致する。アメリカには、個人の成功のために「転職」という選択肢が身近にあり、社会もそれを受け入れている。日本でもこの欧米的な仕事や将来に対する考え方を持つ者は、以前に比べ増えていると言えるだろう。だが、日本では長きにわたり、人は組織に「終身雇用」されるものであり、「年功序列」の制度に従い社歴を重ねることで、職位も給料も上がっていくことが当たり前だとされてきた。だからこそ日本で転職をする場合、その理由が本人の強い希望や将来につながるもの、または劣悪な職場環境から逃れるのものであっても、その理由に関係なく「ひとつの場所にとどまれない人」、「職を転々としている人」などと揶揄されることは少なく

ない。仕事は、アメリカでは個人の成功や自己実現と関連している一方、日本では社会の慣習との結び付きが強いと考えられる。

さらに日本における「仕事」とは、「人間関係」との関連が強い。Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz (2000) によると、日本では人は周囲とうまくやっていくこと、義務を果たすこと、関係の一部になることが何より重要で、個人の意見、能力、特質など個人に関することは二の次とされてきた。つまり、日本では仕事を自己実現と関連付けるのではなく、人間関係の一部として位置付けることの方が自然であると考えられてきたと言える。そして人間関係について、日本ではあるひとつの場所で関係が築かれたら、その相手との関係をうまく保ち、さらに自らが関係の一部になることに重きを置くため、その関係が築かれたのが職場であっても恋愛であっても、「関係を維持すること」が何より重要なことだと捉えられているのだろう。

社会人類学者の中根千枝氏は 2019 年、著書「タテ社会と現代日本」の中で、日本における「転職」と「人間関係」について次のように述べている。最近、若者の転職が多いと言われているが、それは 50 年前から変わらない。しかも、転職する多くが入社 3 年以内の若者層に集中している。若者が転職をする理由のひとつに、「人脈」が十分に蓄積されていないことが挙げられる。同じ職場に長年勤めると帰属意識が高まり、その場を離れることは損失になる。しかも転職をすると、人間関係がすぐに築けるわけではない。だから日本では、「場」にいることに価値が置かれている。

確かに、個人がそれぞれの場所で時間を掛けて育てた「関係」には価値があるという視点に基づくと、中根 (2019) が主張するように、育て上げた人脈や築いてきた自分の場所を捨ててまで職を変えることは損失であるのかもしれない。この中根 (2019) の主張を「恋愛関係」に当てはめてみると、ひとりの恋人、ひとりの配偶者と共に時を過ごし、手に入れた二人だけの独自の「関係」には価値があるということになる。さらに、日本で自文化研究を行った社会学者の浜口恵俊氏も 1982 年、その著書「間人主義の社会 日本」の中で、日本人の対人関係について、日本では相互信頼の上に成り立つ関係自体に値打ちがあり、間柄の持続が無条件に望まれると述べている。中根 (2019) や浜口 (1982) が主張するように、日本人は人間関係を重視し、関係そのものに価値を置き、そしてそれを維持することが重要であると考えていると言える。

このような日本において、相手と共に育んできた「恋愛関係」を維持し続けることに対し異論を唱える者はいないということなのだろう。では日本において、人はなぜ恋愛関係を維持しようとするのだろうか。そしてどのようなことが恋愛関係維持の動機とな

るのだろうか。また、自分たちの恋愛関係を維持する動機を失うことがあるとすれば、それはどのようなことが関係しているのだろうか。さらに、これら日本における関係維持の動機および関係維持の動機を失わせるものと、これまで恋愛研究が盛んに行われてきた欧米との違いはあるのだろうか。これらについて、恋愛コミュニケーション研究があまり行われてこなかった日本において、日本人が置き置き、かつ、恋愛関係にいる者を含めた多くの人々が望む「関係維持」という恋愛プロセスのひとつに注目し、追究していくことには意義があると考えられる。

RQ 1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか

RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか

2. 研究

2-1. グラウンデッド・セオリー・アプローチの視点に基づく質的研究方法

本章では、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか」について明らかにしていく。そのための研究方法は次の通りである。

まず本研究では、「質的研究」を行う。Silverman & Marvasti (2008) は研究方法について、「研究者」は「研究者」として、自分自身が持つ疑問を明らかにするために、最も適した方法を選定すべきだと主張している。本研究において、筆者はコミュニケーション学視点から調査データに忠実に基づいた上で、日本人のコミュニケーションを説明するための理論構築の一端を担う貢献をしたいと考えている。そして、研究対象者の恋愛を理解するにあたり、それぞれが持つ過去の経験や人生観、恋愛観に関する「主観的意味」を明らかにし、数値から読み取れる傾向や仮説を検証するのではなく、研究対象者それぞれの「言葉」に込められた「意味」を読み取っていくことが重要であると考えている。パンチ (2005, p.83) によると、「量的データは世界を『数』で表した情報であるのに対し、質的データは世界を『言葉』で表した情報である」。そして質的研究は、研究対象者に関する理解や知識の構築を目的として行われ (抱井、2011)、個人の人生

や日々の行動を明らかにすることに適している (Silverman & Marvasti, 2008)。以上のことより、本研究には「質的研究」が最適であると考えている。

さらに、本研究では「インタビュー調査」を行う。インタビューは、起こった出来事や事実（外的要素）と感情や本人にとっての意味（内的要素）を記述するアプローチであり (Silverman & Marvasti, 2008)、人々の知覚、意味、状況の定義、現実の構成に接近するための最も強力な方法のひとつである (パンチ、2005)。さらに Lindlof & Taylor (2019) によると、インタビューとは研究対象者が持つ特定の状況や出来事の記憶を呼び起こし、その出来事に対する研究対象者の独自の見解や洞察など、「観察」だけでは見出せないことを明らかにする。またインタビューは、「研究対象者」と「研究者」の信頼感を育みながら行われることから、「恋愛」や「過去の経験」という個人的なテーマに関するデータを収集する本研究に最適な調査方法であると考えられる。さらにインタビュー調査方法の中でも質問項目を緩やかに設定し、研究対象者の回想や語りのペースに応じてその場で柔軟に対応する「半構造化インタビュー」(猿橋、2011)を採用する。この半構造化インタビューを通して、研究対象者の言葉に込められた詳細な側面を引き出すことが可能である。

本研究では質的研究およびインタビュー調査を行っていくが、その軸となるのが「グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA)」である。GTA は、社会現象を説明するための明確な理論をつくることを重視しており、データを文章化した後の分析方法を提示しようと試みている点に特徴がある。さらに GTA はデータを得た後、データに立脚し仮説や理論を構築することを目指している。これは個人的印象や直感ではなく、データに基づいた確信に近い結果を得ることを重要視する研究方法である (Strauss & Corbin, 1998; ストラウス・コービン、2009)。本研究では GTA を「理論構築を目指す質的研究方法」と位置付け、ストラウス・コービン (2009) の GTA の方法論を基に、研究、調査、およびテキスト・データのコード化とカテゴリー化を行い、分析結果を導く。

GTA は、社会現象においてデータ収集と分析を通し、データに根差した理論の生成を目指すことを主眼に置いている研究アプローチであり分析方法である。戈木 (2009) は、データから収集された事例の要約を提示するだけでは不十分であり、データから概念を抽出し、適切に関連付けることが重要であると主張している。また、ある現象の中で研究対象者も意識していなかった考えや行動を見出し、それらによって生じた現象を理解し、さらにその後、それらの現象がどのように変化するかを推測できるようになるまで、データを結び付けていくことが GTA に求められている。さらに戈木 (2009) は、GTA に

においてデータを分析することは、データの中に出てきた現象がどのようなメカニズムで生じているかを示す「理論」を産出しようとしていると主張している。本研究は、日本人を説明するための理論構築の一端を担う貢献を目指していることから、GTA は本研究に最適な研究方法および分析方法であると考えている。

そして灘光・浅井・小柳（2014）によると、GTA には3つの主な特徴がある。最初の特徴として、理論構築を目指すために必要な信憑性を高めるという点が挙げられる。GTA では、インタビューなどから収集した詳細なデータを適切な方法で分析し、導かれた理論を科学的に説明することができると考えられている。一方、質的研究において多数のデータを収集しそれらを分析する際、研究者の主観が入り恣意性が拭えないという理由から、分析から得た理論を一般化するには限界があると批判されることもある。GTA では分析方法および理論の根拠となるデータを適切に示すことにより、妥当性と信憑性を得ようとしている。さらに人々の考え方や行動に関して、どのような過程を経てそのような状態になったのか、そしてその後、どういう結果に至ったのかなどの「プロセス」を含んだデータを収集することが必要とされる。この作業もまた、研究者の主観的な解釈に基づく認識されることがあるため、解釈の基となった根拠を書き加え、信憑性を確認できるようにしておくことが重要であるとされている。

次の GTA の特徴は、データ分析の手順が明確に示されている点である。データを細分化し、カテゴリー化を繰り返し、そこから理論を導き出すための方法が具体的に示されている。分析手順を明確に具体化したことにより、誰にでも分析可能で、かつ、科学的手法に基づいた研究分析法であると言える。

そしてもうひとつの GTA の特徴として、人の内面を調査することに適している点が挙げられる。さまざまな事象を研究対象者がどのように解釈しているのかについて、研究者が理解することに力点が置かれている。

本研究では、研究対象者に関するデータの分類およびコード化、カテゴリー化を通して、研究対象者の視点や行為の意味を深く探求した上で主観的世界を再構築する（平山、2011）。そして、研究対象者の目の前にある社会的現実やその行為の意味付けに対し、研究対象者の視点で探索し（末田、2011）、「研究対象者の主観的世界」を再構築し探索したいと考えている。そのためには、筆者の主観性をできる限り排除することが不可欠であると考えているが、実際にはそれが簡単ではないことを、ストラウス・コービン（2009）は次のように説明している。研究および分析の過程において、研究者は現象に関する新しい解釈を見出すために、これまでの個人的な知識や経験から離れることは必

要なことである。しかし、日々の生活において私たちは知識と経験に依拠しているため、研究者という人間もまた、完全に客観的立場にいることは不可能である。量的研究・質的研究にかかわらず、「主観」という要素が入り込んでいるのである。重要なことは、主観という問題が存在していることを認識し、それらが研究者たちの分析に入り込むことを最小限に抑える適切な方法を選ぶことである。そして研究対象者に自分の言葉で語ってもらうために、それぞれの話に研究者は耳を傾け、可能な限りそれらを正確に代弁する必要がある。また研究者の理解は時として自分自身の価値、文化、経験に基づいているため、それらは研究にそのまま持ち込まれることもある。「研究者の理解」と「研究対象者の理解」は、かなり異なっている可能性があることを頭に入れておく必要がある（ストラウス・コービン、2009）。

本研究では、このストラウス・コービン（2009）の指摘を受け、筆者の主観をできる限り排除し、研究対象者の主体的世界の再構築を実現させるべく、研究対象者から得たデータに忠実に基づき、研究および分析を進めていく。

2-2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの視点に基づく質的分析方法

グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）では、集めたデータを基にそこから導き出されそうな暫定的理論が本当に妥当であるのかという点を検証するために、再度新たなデータを収集し、「データ」と「理論」との繰り返しの往復が求められている。本研究では研究方法から分析方法にわたり、GTAの視点を参考にする。そしてストラウス・コービン（2009）およびストラウス版GTAを発展させた戈木（2008; 2009; 2014）の手順を基に、インタビュー結果の分類・分析を以下の通り行う。

- (1) インタビュー・データを読み込んだ後、データを単語や箇条書き程度になるように細かく分断する（コード1）。データを文脈から切り離す目的は、筆者の先入観や思い込みなどによる主観的な分析を避けるためでもある。
- (2) 分断したデータ同士をまとめ、上位概念となるコードをつくる作業を行い、これを何度か繰り返し、先につくったコード同士を関連付け、現象を表現する（コード2）。
- (3) 関連付けられたコード同士の持つ意味と現象をさらに関連付け合い、カテゴリーを導く（カテゴリー）。

本研究と同じく「恋愛」を対象とした研究を行った Jackl (2018) も、GTA を使用している。彼女は恋愛関係にいる人々の「二人の恋愛の始まりを、他者と共有することはなぜ難しいのか」という疑問を明らかにするため、18 名に対してインタビュー調査を行った。調査結果によると、犯罪が横行していることで有名なインターネットサイトを通じて恋愛が始まった者や、相手が刑務所に服役している時に結婚したなどの経験を持つ者もあり、一般的なカップルが経験している「よくある馴れ初めの話」から大きくかけ離れている自分たちの経験を、他者と共有することに対して躊躇する者も多かったという。

Jackl (2018) は、研究対象者の発言データからリサーチ・クエスチョンに対する答えを導いた。そして研究対象者が「自分たちの恋愛の始まりを、他者と共有することはなぜ難しいのか」についての意味を理解することを試みた。その後、リサーチ・クエスチョンに関するデータを分類・分析、コード化、そしてカテゴリー化した。その結果、研究対象者たちは、自分とパートナーの恋愛関係の始まりに関する話を第三者と共有するにあたり、その相手との今後の人間関係を考え、「相手にどこまで打ち明けるか」、「全く話さないのか」などについての判断を下していた。そして Jackl (2018) は、研究対象者が自分たちの恋愛の始まりを他者に話すことで、「自分の人格を否定的に判断されたくない」、「自分たちの関係を否定的に判断されたくない」、「自分に制裁を加える判断をされたくない」という 3 つを、リサーチ・クエスチョンの回答として導いた。

一方、本研究の要である「恋愛」や「過去」も個人的、かつ、デリケートなテーマであるが、この Jackl (2018) の研究と同じようにインタビュー調査を実施し、GTA の視点から理論構築を目指すことが可能であると考えている。本研究では GTA の研究方法を軸に、研究対象者を「行為者」として捉え、その視点に基づいた言葉を主眼に置き研究を行っていく。

2-3. 研究対象者

本研究対象者は 30-40 代の男女 26 名である。本研究では、個人が持つ恋愛経験を含む「過去」の経験が核となる。フリック (2011) は、研究対象の人物を選定する原則は「研究テーマとの関連性」であると主張していることから、本研究では、「ある程度の社会経験および恋愛経験があり、かつ、今後も新しい恋愛を経験し、恋愛関係をこれからは発展させていく可能性のある者」という条件を設定した。また、「個人の経験」

という観点から、青年期を経て、壮年期・中年期にいる 30-40 代が妥当であると考え、この年代を研究対象とした。

研究参加者を集めるにあたり、筆者の 30-40 代の知人を中心に研究への参加を依頼し、福岡市およびその近郊と横浜市に住む 26 名が本研究に参加した（女性 13 名、男性 13 名）。女性は 30-46 歳で平均年齢 37.6 歳、既婚 4 名（再婚者 1 名を含む）、独身 0 名、未婚 9 名。男性は 32-48 歳で平均年齢 37.7 歳、既婚 10 名（再婚者 1 名を含む）、独身 2 名（離婚経験者 2 名を含む）、未婚 1 名。全員が異性愛者であった。加えて、既婚者は全員が恋愛を経て結婚していた。

2019 年 8 月 1 日から 14 日の間、研究参加者の職場や喫茶店などで平均 65.1 分の 1 対 1 のインタビューを行った（うち 1 名は電話インタビューを実施）。インタビュー内容は研究参加者の了承を得てすべて録音した。さらに 26 名の研究参加者全員から研究への参加承諾（インフォームド・コンセント）を得ている。

3 名のインタビューを実施した後、インタビュー・データの分類・分析を行ったと同時に、質問項目の見直し、および回答とリサーチ・クエスチョンの関連性などの確認作業を行った。その後、修正版の質問項目を使用し次のインタビュー調査に進んだ。インタビュー調査と収集したデータの確認作業を繰り返し行った後、複数の研究参加者に共通した現象や事例だけではなく、少数派の状況も説明できる状態に達したと考え、女性 13 名、男性 13 名、合計 26 名でインタビュー調査を打ち切った。

3. 調査結果

本研究では 26 名にインタビュー調査を実施した。研究参加者の発言はイタリック体で記している。方言や表現が分かりづらい箇所については、一般的な言葉や表現に修正しているが、それ以外は研究参加者の発話をそのまま記載している。また本文中にあるイタリック体以外の研究参加者の発言例については、発言の核となる部分を抜き出しており、発言内容が伝わりづらい箇所については内容を一部補足したり、簡潔な表現に書き直しているものがある。また、各コードの特徴を表す発言を中心に掲載しているが、コードに対する発言がひとつしかなかった場合はそれを載せている。アルファベットの“f”は女性、“m”は男性を示し、番号はインタビューを行った順番を表している。さらに婚姻状況について、「未婚（過去から現在において婚姻の経験が一度もない者）」、「独身（過去に婚姻と離婚の経験があり、現在婚姻関係にない者）」、「既婚（現在婚姻関係に

ある者。離婚経験者も含む)」の3つに分け、さらに子供がいる場合は「子有り」と記載している。

3-1. RQ 1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか

インタビュー・データから得た回答を精査し、コード化およびカテゴリー化を行った結果、「RQ 1-a:どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」について64の回答があった。それらの回答を7つのコード、そして3つのカテゴリーに分類した。

〈表1〉 RQ 1-a:どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか

カテゴリー (回答数)	コード (回答数)
代替できない相手・関係 (52)	相手に対する特別な想い・愛情 (34) 相手は自分の理解者 (10) 価値観の共有 (8)
社会的・経済的動機 (6)	結婚のメリット (4) 結婚の重み (2)
自己肯定 (6)	自分の存在意義の確認 (3) 相手への執着 (3)

3-1-1. 代替できない相手・関係 (3コード・52回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「彼女には無償の愛があるからそれだけでいい」(m-9)や「一緒にいて安心。信頼できる」(m-4)などの発言は、他者にはない恋愛相手だけに対する特別な想いや感情を示している。これらを「相手に対する特別な想い・愛情」というコードにまとめた。

「奥さんは理解者であると思う」(m-1)や「束縛されるのが嫌。奥さんは自分がやりたいことをノーとは言わない」(m-4)などの発言は、相手が自分を理解していることを示している。これらを「相手は自分の理解者」というコードにまとめた。

「共通の趣味や定期的と一緒にできる話題がある」(m-2)や「子供の育て方や子供に色々と押し付けないところは両方同じ」(f-22)などの発言は、二人には共通点があり、

考え方や価値観を共有していることを示している。これらを「価値観の共有」というコードにまとめた。

これら3つのコードは、相手が自分にとって特別な存在であり、関係を築くにあたり自分が重要だと思っている要素を相手を持っていることを示している。よって、相手は他の誰かと代替することが難しく、さらに二人の関係もまた代替しづらいと考えられるため、「代替できない相手・関係」というカテゴリーにまとめた。

3-1-1-1. 相手に対する特別な想い・愛情 (34 回答)

彼は私がキュンキュンできる人。いつも刺激をもらえる人。外国人の彼は、いつも仕事であちこち飛び回っている。彼は話題も豊富。だから得るものがある。そんな彼だから一緒にいたいと思う。

(f-21・35 歳未婚女性)

今までの恋愛では、相手に対する好きとか嫌いはあったけど、今は結婚して子供がいて幸せ。純粹に「幸せだな」と思う。これまで感じたことのないような今の幸せを維持していきたい。

(m-6・37 歳既婚男性・子有り)

3-1-1-2. 相手は自分の理解者 (10 回答)

自分は、「ヒッチハイクに明日から行く」みたいな感じで、ノーマルではない。週に2-3日は家に帰らないこともあるが、それでも妻に問い詰められることはない。

(m-1・41 歳既婚男性・子有り)

僕は気分屋だから、自分が楽しい時は愉快にしているが、機嫌が悪いとそれが出る。気分のムラが激しい。奥さんの方が落ち着いている。僕が沈んでいる時は、奥さんは放っておいてくれる。いい奥さんだなと思う。

(m-15・41 歳既婚男性・子有り)

3-1-1-3. 価値観の共有 (8 回答)

互いが向き合っているわけではないけど、同じ方向を見ている。

(f-23・46 歳既婚女性・子有り)

旦那と私が唯一合っているのが「自分の家族が好き」ということ。誰かが亡くなったり病気になったら、すぐに駆け付ける。私は自分の家族（父・妹）をないがしろにされたら許せないと思う。旦那は結婚前、私の知らないところで私の母のお墓参りに行ったり、父を怒らせた時には一人で父に謝りに行っていたらしい。私は三姉妹の長女で、母も他界しているので、将来は私の実家で私の父と一緒に暮らそうと言ってくれている。

(f-22・43歳既婚女性・子有り)

3-1-2. 社会的・経済的動機 (2コード・6回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「生活、経済的に安定している」(f-23)や「結婚というツールは必要」(m-14)などの発言は、既婚者であることが社会的に受け入れられる、また経済的に安定した状態を維持できるなどの理由で婚姻生活が維持されていることを示している。これらを「結婚のメリット」というコードにまとめた。

「妻との関係は維持する。その後の残務処理の方が大変だから」(m-1)や「結婚は二人だけの話ではない」(m-7)などの発言は、婚姻関係や家族、そして周囲に対する責任を負い、その重みを認識していると言える。これらを「結婚の重み」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、結婚とは本人同士の意志や感情だけで成立するものではなく、社会的および経済的要因からも影響を受けており、それが二人の関係を維持させる動機になっていることを示している。これらを「社会的・経済的動機」というカテゴリーにまとめた。

3-1-2-1. 結婚のメリット (4回答)

社会の一員として認められるためには安心感が必要。だから独身や離婚は社会的には受け入れられない。社会でうまく生き残っていくには結婚というツールを活かしたいし、仕事で上を目指すには日本の慣例に従うことが必要だと思っている。本音と建前を使い分けるのが大人だと思う。

(m-14・34歳既婚男性・子有り)

今の生活が経済的に安定しているからこそ、夫との関係は維持しようと思っている。生活さえ安定していれば、夫は家事とかしなくていい。もし夫が私を捨てたくなるくらいの恋愛を別の女性としたら、私たちの関係は終わると思う。だけど私からは関係を終わらせるようなことはしない。

(f-23・46歳既婚女性・子有り)

3-1-2-2. 結婚の重み (2回答)

離婚するつもりはないし、関係を維持することが最重要。実際はきついこともあるし、妻に直してもらいたいこともある。だが結婚は二人だけの話ではない。大切にしている親のことも大事。家族を含めた関係。自分が、妻がどうしたいかではなく、全体的にうまくやることが周りのみんなの幸せ。何より子供は親の影響を避けられないので、きちんとしたものを子供に提供したい。

(m-7・38歳既婚男性・子有り)

今の妻とは関係を維持しようと思う。その後の残務処理の方が大変だと思うから。

(m-1・41歳既婚男性・子有り)

3-1-3. 自己肯定 (2コード・6回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「奥さんはメンタル的に弱い。誰かがいてくれなきゃ駄目なタイプ」(m-6)や「不幸そうな人を見ると好きになる。自分だからこの人を救えると思っている」(m-8)などの発言は、相手から依存されることや、自分が必要だと思われることで自分の存在意義を見出していると言える。これらを「自分の存在意義の確認」というコードにまとめた。

「『いつか戻ってくる』、『私じゃないと』と思っていた。だから離れられなかった」(f-3)や「相手が浮気していても問い詰めなかった。執着していたんだと思う」(f-3)などの発言は、相手や関係に対する執着を示している。これらを「相手への執着」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、恋愛関係や相手の存在を通して、自分の存在意義を見出すと共に、それが本人の自己肯定につながっていると考えられる。従ってこれらを「自己肯定」というカテゴリーにまとめた。

3-1-3-1. 自分の存在意義の確認 (3 回答)

自分は元々ネガティブ。子供の頃から「自分なんて」と思っていた。それにもかかわらず恋人ができることもあり、「こんな自分と付き合ってくれる」と思っていた。不幸そうな人でも「自分なら救ってあげられるかも」と思っていた。だから不幸そうな人を好きになる。相手との関係に自分の存在を見出している。自分だからこの相手を救えると思っている。

(m-8・33 歳独身男性)

彼女に浮気されて別れたけどその後も 1 年半、半同棲を続けた。「彼女は僕にしか甘えられない」と思っていた。浮気をされたから男としては駄目だったのかもしれないが、人として彼女を支えてあげられると思っていた。今も連絡を取っている。

(m-14・34 歳既婚男性・子有り)

3-1-3-2. 相手への執着 (3 回答)

元彼とは半同棲状態で、彼はどっかに行ってもちゃんと戻ってきた。別の女性の家に行っていたことは知っていたけど、問い詰めなかった。関係に執着していたんだと思う。

(f-3・45 歳既婚女性・子有り)

彼との恋愛で人生観が変わったと思う。それでも彼との将来を期待していた。

(f-3・45 歳既婚女性・子有り)

3-1-4. 「RQ 1-a:どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」のまとめ

「RQ 1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」について、以下のことが明らかになった。

3-1-4-1. 恋愛関係を通して確認する自分の存在意義

恋愛関係を維持させる動機として、「自分にとって相手は代替できない存在である」のように、相手そして二人の関係が唯一無二であるからこそ、関係を維持していきたい

という意見が聞かれた。それに加え、「自分の存在意義を関係に見出せる」ということも関係維持の動機となっていた。

33 歳独身男性 (m-8) は、「幼少時代、親の僕と兄に対する態度や扱い方が違っていた。それがきっかけで、『自分なんて』と思い、小学生の時は寝る前にひとりで反省会をしていた。社会に出て働き出してからがターニングポイント。努力し続けた。努力は負けないということが自信になった。そして恋愛に関しても『恋愛は楽しむもの』という意識を持つようになり、女性とも付き合った。だがそのような時でも、『こんな自分と付き合ってくれるなんて』という気持ちを持つこともあった。そして不幸そうな女性を見ると、『自分なら救ってあげられるかも』と思っていた。だから不幸そうな人をいつも好きになる。相手との関係に自分の存在を見出している。『自分だからこの相手を救える』と思っている」と話していた。この男性は自分では確認しづらい「自分の存在意義」を、「相手」そして「二人の関係」の中に見出していた。

また 45 歳既婚女性 (f-3・子有り) が 20 代の頃交際していたのは、浮気性の男性だった。彼女が恋人に浮気され続けても別れなかったのは、「彼はいつか戻ってくる」、「この人は私じゃないと駄目なはず」、「私だからこそ、この人を支えることができる」と思っていたからだという。

そして 34 歳既婚男性 (m-14・子有り) もまた、恋人との関係に自分の存在を見出していた。この男性は学生時代、恋人に浮気をされ関係を解消したが、その後も半同棲生活を続けていたという。彼は、『彼女は僕にしか甘えられない』と思っていた。浮気をされたから男としては駄目だったのかもしれないが、人として彼女を支えてあげられると思っていた」と話していた。さらにこの男性は、「普段から常に誰かとつながっていたい。男友達でもいい。僕はすぐにメールの返信をするから信用されるし、困った時に周囲は自分を頼ってくれる。仕事でも『僕がいれば安心』と言われることに自分の存在意義を感じている」と語っていた。この男性もまた、「関係」の中に「自分の存在意義」を感じていたと言える。

自分の存在意義というのは、目に見えるものでもなければ、はっきりとした定義もない。だからこそ、それを実感することは誰にとっても難しいはずだが、前述の 3 名は、自分の存在意義を相手や関係の中に見出していた。さらに、「自分の存在意義」に関連していたのが、関係における「役割」の存在である。「自分なら相手を支えられる」という発言が示すように、他者との関係の中に自分の役割を見つけ、そしてその役割を果たすことで、自分の存在意義を見出していたのではないだろうか。

Markus & Kitayama (1991) は、日本を含む相互依存的自己観の文化では、ある特定の状況での他者との関係こそが自己を定義すると述べている。さらに浜口 (1996, p.115) によると、「日本人にとって対人関係とは、自分と切り離せない身体の一部のようなものである。実際、『人』のことを『人間 (じんかん)』と書き表すのが常であり、『人と人』に自分の存在を位置付けて意識することが多い。『子の親としての自分』、『部下の上司としての自分』であって、関係性だけを取り出して操作しようなどとは、日本人は考えてみななかったに違いない」。このような Markus & Kitayama (1991) や浜口 (1996) の主張に基づくと、日本における「自己」とは、自分自身の置かれているコンテキストによって異なり、そして自己とは関係を通して認識されるため、特定のコンテキストを共有する他者の存在が必要となる。人は他者との関係の中で初めて「自分が何者なのか」ということを見出すのだろう。

実際に日本の家庭では、「お兄ちゃんになったんだから、もう我がまま言わないの」、「一家の大黒柱として家計を支える」、「姑の面倒を見る」などは聞き慣れた言葉であると同時に、そこには周囲からの期待や求められている役割が暗示されている。「兄となった今、これまでと同じ振る舞いではいけない」、「家族の生活を支えるのは家長としての当然の務めだ」、「年老いた姑の日常の面倒を見るのは嫁の仕事」などの意味が含まれており、さらにこれらは「家庭」というコンテキストの中で、他の家族メンバーではなく、自分が果たすべき役割なのである。そしてその役割を全うするからこそ、家族としての関係性が保たれる。

また日本の会社では名前ではなく「社長」、「部長」など、相手を役職で呼ぶことが多く、名刺にしても企業名、役職名、名前の順に記載されている。欧米系の企業であれば名刺には氏名が最初に、しかも目立つように書かれていることが多く、職場で相手を役職名で呼ぶことはあまりない。日本社会では「個人」として相手を認識するより、むしろ特定のコンテキストにおける「立場」、「役割」に基づき、相手と自分を関連付けているのだろう。

このような日本社会で生きてきた研究参加者たちが、自分の存在意義を「関係」の中に見出すことは、自然なことだと言えるだろう。そして、それが自分にとって大切に、しかも他とは代替しづらい唯一無二の恋愛関係であり、かつ、その中で自分の存在意義が感じ取れるのであれば、その関係を維持したいと願うこともまた、当然のことなのかもしれない。

3-1-4-2. 恋愛と日本社会

本研究参加者 26 名のうち 14 名が既婚者だった。彼女/彼らが現在の関係を維持する動機として、「結婚しているからこそ関係を維持する」と考えている既婚者は、「結婚には覚悟と責任が必要」、「結婚は二人だけではなく、全体的にうまくやることがみんなの幸せ」のように、自分には婚姻関係を維持する責任があると捉えていた。また、「離婚後の残務処理の方が大変そうだから、今の婚姻生活を続けた方がいい」ということも、婚姻関係を維持する動機につながっていた。今回の調査から、日本では結婚に対する独自の認識があることが明らかになった。

日本における結婚観について、2018 年に日本放送協会 (NHK) が実施した調査では、「人は結婚するのが当たり前」と答えたのは全体 (16 歳以上の男女) の 26.9% で、1993 年の 44.6% から減少している。そして、「必ずしも結婚する必要はない」は 1993 年の 50.5% から 2018 年は 67.5% に増えていた。日本における結婚への自由度は、数字の上では高くなっている。そして離婚に関して、平成 30 年 (2018) の「我が国の人口動態」によると、離婚数は増減を繰り返しており、2016 年の離婚件数は 21 万 6,798 組であった。

イギリスで行われた離婚に関する研究がある。Gardner & Oswald (2006) は離婚経験者に対し、「離婚前と離婚後のどちらにより幸せを感じていたか」について調査を行った。その結果、幸福感を感じていたのは「離婚後」であることが分かった。さらにこの調査によると、離婚が心的外傷になる期間はそう長くは続かず、離婚の 2 年前と 2 年後を比較したところ、離婚して 2 年経った時点で離婚する 2 年前の幸福度を超すことが分かった。さらに離婚後すぐに再婚する人と、離婚後に独身でいる人を比較しても、その幸福度に差はなかった。つまり、「離婚」という行為そのものだけが、個人の幸福度を上昇させたということになる。

仮に、日本でこのような離婚前後の幸福度に関する調査を行うとしたら、個人の幸福度に影響を与える要因として子供、周囲の人間、社会などが調査に組み込まれていたのではないだろうか。だがイギリスの調査にはこれらの要因は含まれていなかった。イギリスでは、離婚には「幸福度」や「心的外傷」が関連すると考えたとしても、「子供」、「周囲の人間」、「社会」などを関連付ける発想自体が存在しないのかもしれない。

一方、本研究では既婚者が配偶者と築く「恋愛関係」について、さまざまな意見が聞かれた。38 歳既婚男性 (m-7・子有り) は、「結婚」に対する責任を重く受け止めながらも、結婚前とは異なるかたちの「恋愛関係」を築いていた。この男性にとって結婚とは、

2億円の買い物をするようなものであり、その重みを理解した上で結婚を決めたという。彼は、「結婚は二人だけの話ではない。自分たちが大切にしている親や、家族を含めた関係が重要。自分が、妻が、どうしたいかではなく全体的にうまくやるのが周りの幸せ」というように、関係を維持するのは自分の両親や子供も含めた「家族の幸せのため」と考えていた。さらにこの男性は、「恋愛とはひとりの相手と向き合い、密な時間を過ごすこと。そして自分の知らないことを勉強させてもらうこと」、さらに結婚生活について、「価値観が違うのは当たり前。自分の感覚、人生観、価値観は今までの人生によってつくられたもの。他人同士がうまくいくためにはコミュニケーションをするしかない。自分と相手の『当たり前』は違うので、互いに譲りあうことが必要で、結婚生活では補完的な関係が一番望ましいと思っている。5対5のような単純な話ではない」と述べていた。さらに、「妻とは他人同士なので、埋めていく部分もある」と考えていた。特に「話し合う」というコミュニケーションを日常において意識的に行っており、その結果、「妻との関係の土台はしっかりしていると思う」と話していた。また、コミュニケーションを通して築き上げた二人の関係について、「関係を維持するには『ギブ&テイク』では駄目で、ボランティアじゃないけど『ギブ&ギブ』する気持ちでないといけない。もちろん誰にでもそのようにできるわけではないが、妻にはそうしている」と話していた。この男性は周囲との関係を大切にしながら、妻に対しても真摯に向き合っており、日々のコミュニケーションを欠かさない。さらに、「妻との関係の土台はしっかりしている」という発言からも、二人の関係は日々のコミュニケーションを重ねながら独自性が強く、そしてより強固になっているのではないだろうか。

また別の男性は、「恋愛関係」に対して結婚前と異なる視点を持っていた。36歳既婚男性（m-4・子有り）は、妻との関係を維持する動機として、「妻と唯一無二の関係を築き上げたから」と話しており、さらに妻との関係は「修行」であると考えていた。この男性によると、「妻のことを知れば知るほど、自分とは対極にいる人間だと感じる。それは彼女が女性だからということではなく、彼女は彼女自身のこれまでの経験によって今の彼女という人間が形成されている。だからこそ妻にしか持っていない特性がある」。さらに、「妻と一緒にいて正直楽しいわけではないが、誰よりも信用できるから一緒にいる」と話していた。

この男性たちは、妻をひとりの人間として尊重し、さらに時間の経過と共に以前とは違う関係性を築いていたと言える。さらに、「妻との関係の土台はしっかりしている」、「誰よりも信用できる」という言葉からも、妻に対して他の女性には抱けないような特

別な感情があると同時に、自分にとって特別な恋愛関係だからこそ、妻との関係を維持しようとしているのではないだろうか。

一方、婚姻生活を維持し続ける「メリット」について語っていた男性がいた。34歳既婚男性（m-14・子有り）は、「日本社会で成功し仕事で上を目指すには、家族が必要。自分の家族を持っていることは、日本社会で信頼される。『まともな人間』であることの証明になる。仕事で出世して、自分が目標とする地位を獲得するためのツールのひとつが結婚」と話しており、それが今の婚姻関係を維持する動機になっていた。さらにこの男性によると、彼が所属している業界では離婚をすることや、未婚・独身でいることは出世に不利なのだという。だからこそ、今の結婚している状態を手放すわけにはいかないと考えていた。この男性は、「自分」がどう考えるかではなく、「日本社会」や「職場」で自分がどう捉えられているかの方が重要であり、さらに日本社会に存在する一定の「型」の中に入ることを意識的に行っていたと言える。一方、その「型」に入っていない研究参加者もいた。

48歳未婚男性（m-10）は、「ある程度の年齢になって結婚していないと『欠陥人間』扱いされたりする。自分も実際に、親や身近な人に『結婚しないのか』と言われるのでプレッシャーを感じているし、世間体も気になっている」と語っていた。またこの男性以外にも、「この歳になると結婚を意識せざるを得ない」（36歳未婚女性・f-24）、「周りが結婚しているので焦っている」（35歳未婚女性・f-18）、「一応結婚しなくちゃいけないかなと思っている」（35歳未婚女性・f-21）などの発言があった。これらは同年代の多くが既に結婚していること、そして結婚は「するものである」という考えに基づいた発言であると同時に、結婚という「型」にはまることが重要だという認識を示しているのではないだろうか。本来、結婚することは個人の選択のひとつに過ぎない。しかし日本社会では、ある程度の年齢に達した未婚・独身者は新聞や雑誌の特集の対象になったり、テレビ番組で取り上げられるなど、「結婚していない」という個人の側面が過度に注目されていることも事実である。

2006年に放送された「結婚できない男」（主演 阿部寛）は、結婚に否定的な考えを持つ男性建築家のシングルライフを描いたコメディドラマである。主人公の40歳の未婚男性は、有名大学を卒業し自分の建築事務所を持ち、周囲からの仕事の評価も高い。少々偏屈な性格であるがルックスも悪くなく、高級マンションで気ままな生活を送り、料理や家事も完璧にこなす。「自分は結婚できないのではなく、結婚しないのだ」と主張し、「結婚は、『妻』と『子供』と『住宅ローン』の三大不良債権を背負わされる」、「結婚は

百害あって一利なし」という持論を自分に言い聞かせている。女性に全く興味がないわけではないが、強調性や社交性に乏しくなかなかうまくいかない。さらに 2019 年、このドラマの続編が「まだ結婚できない男」として放送された。50 歳を過ぎた主人公は未婚のままであった。

そして 2016 年に未婚女性を主人公にしたドラマ、「私、結婚できないんじゃないんです」（主演 中谷美紀）が放送された。都心の一等地に美容クリニックを持つ 39 歳の開業医。自他共に認める才色兼備で、女性からは羨望を集め、男性からは高値の花として扱われる人生を送ってきた。そのため、自分の容姿や社会的地位に対して相当な自信を持っており、自分がその気になれば、恋人も結婚相手もすぐに見つかる高を括り、充実したシングルライフを満喫していた。だが、同窓会で高校時代の同級生に再会した際、39 歳で未婚である自分が「世間」の感覚から「ズレている」ことに気付く。彼女が未婚であることを知ると、同級生から同情に満ちた目で見られ、励まされてしまう。さらにこのドラマには主人公の母親も登場する。自分の一人娘は、容姿端麗で仕事でも成功している。だが、「結婚」という誰もが手に入れられるはずの「人並み」の幸せに恵まれない事が不憫で仕方がない。自分が娘を何とかしようとして立ち上がり、「親同士の縁結び会」などに勝手に参加し、娘を混乱させる。

この 2 つのテレビドラマはフィクションであるが、日本人の中で「結婚」がいかにか「当たり前すぎる当たり前なこと」として内在化されているかを表している。現在は以前に比べ、結婚に対する価値観が多様化しているとはいえ、日本では今もなお結婚は人生の前提条件となっている。だからこそ、「結婚しない」という少数派が注目を浴びることになる。ある特定の社会の中で生きるということは、そこでの社会的慣習を習得することでもあり、そこで身に付けた価値観が自分の「当たり前」になっていく。「ある程度の年齢に達した者は、結婚し子供がいる」ということが今もなお、多くの人々にとっての「当たり前」である日本社会だからこそ、「当たり前ではない人」を目にすると、過敏に反応したり、珍しいものとして扱うという現象が繰り返されているのではないだろうか。

一方、1998 年から 2004 年までアメリカで放送されたテレビドラマ「セックス・アンド・ザ・シティ」（主演 サラ・ジェシカ・パーカー）は、ニューヨークで働く 30-40 代の未婚女性 4 名が主人公である（後に結婚する者もいる）。彼女たちはそれぞれが強烈な個性を持ち、恋に仕事に忙しい日々を送っている。このドラマでは、独自の恋愛観や恋愛模様、仕事、個々の生き方、ライフスタイル、ファッションなどに焦点が当てられ

ているが、日本での未婚者を描いたドラマでのような「30-40代で未婚」ということに対する悲観的な描写はない。彼女たちは、自分が未婚であることについて、親や親戚からのプレッシャーを時折感じることはあっても、周囲や世間の目を気にする様子は特にない。アメリカ社会において「30-40代で未婚」ということは大した意味を持つことでもなければ、そのことに対して周囲が過敏に反応することもないのだろう。日本とアメリカでは、「結婚」に対する社会的認識そのものが大きく異なると考えられる。

そして「離婚」もまた、本研究では世間や日本社会における「慣習」や「規範」との関連を示した。離婚を経験した33歳独身男性(m-8)は、社会とかかわっていくことの難しさを、離婚して数年経った今もなお感じているという。この男性は周囲に祝福されて結婚したが、その数年後に離婚した。彼は、「離婚という決断に対して今も後悔はない。でも世間では離婚は失敗を意味し、離婚をした自分を世間が必ずしも理解してくれるわけではない。離婚歴のある自分と世間の間にはギャップがある」と話していた。結婚は個人と個人の結び付きであると考えられている欧米での結婚観(ゴードン、2017)と比較し、日本における結婚そして離婚というのは、世間や社会、そしてそれらがつくり上げた暗黙の「規範」とは切り離せないものであると言えるだろう。

さらに本研究において、30-40代の研究参加者たちの「恋愛」と結び付きのあるものとして、「老後」が挙げられた。日本では昨今、「孤独死」や「独居老人」などが社会問題のひとつとなっている。高齢化社会に突入し、加えて生涯未婚率の上昇などの影響により、今後ひとりで生活することになる人は増加し続けると予測されている(厚生労働省、2016)。30-40代の研究参加者にとって、老後というのは捉えようによってはそう遠い話ではない。37歳未婚女性(f-16)は、30代半ばで恋人と別れたというが、彼女にとってショックだったのは恋人を失ったことではなく、「私、ひとりで死ぬんだ」という現実を突き付けられたことだったという。また42歳独身男性(m-19)は、年下の恋人との再婚を視野に入れているというが、再婚理由のひとつに「自分の老後の世話をしたい」というものがあるという。現段階では自分の恋人は「恋愛パートナー」であったとしても、それは後に互いの人生や生活を支え合う「生涯のパートナー」になることをこの年代の男女は見据えているだろう。日本における恋愛というのは「社会のあり方」とも密接に関連していると言える。

「どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか」についてインタビュー調査を行った。関係を維持する動機として、「相手が代替できない存在である」、「二人の独自の関係性」などがあり、これらは研究参加者たちの視点が「相手」、

「二人」、そして「関係」に向けられていたことによるものだったと考えられる。そして関係維持の別の動機として、「自分の存在意義を恋愛関係の中に見出せる」というものも挙げられた。研究参加者たちは、相手との恋愛関係の中に自分の「存在意義」を感じており、さらにその関係には自分にしか果たせない「役割」があることを認識していたと言える。だからこそ、その関係が自分にとって唯一無二のものであると同時に、維持する動機につながっていたのだろう。

また、本研究参加者の既婚者たちはすべて、恋愛が発展した後に結婚していた。恋人同士から夫婦になり、そして親になるなどの経験を通して、二人の関係や役割に対する重みを感じていた者、結婚前とは異なる関係性を構築していた者、そして日本社会や世間に認められるために今の婚姻関係を維持しようとする者などがいた。

恋愛関係を維持するという行動は共通していたとしても、その動機はさまざまであり、個々の経験や恋愛観もそれぞれ違っていた。さらに、日本社会の規範や文化的背景なども関係を維持する動機に影響を与えていた。恋愛関係を維持する動機は実にさまざまであったが、ほとんどの研究参加者にとって、「関係」という目には見えないものを重要なものとして捉えていたことは共通していたと言える。

3-2. RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか

インタビュー・データから得た回答を精査し、コード化およびカテゴリー化を行った結果、「RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか」について44の回答があった。それらの回答を5つのコード、そして2つのカテゴリーに分類した。

〈表2〉 RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか

カテゴリー (回答数)	コード (回答数)
代替できる相手・関係 (39)	相手に対する失望 (25)
	相手に対する特別な想い・愛情の減少 (11)
	自分を貫けない (3)
将来的不安 (5)	将来を共に描けない相手 (3)
	子供・家庭を守れない (2)

3-2-1. 代替できる相手・関係 (3 コード・39 回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「2 回目の浮気は駄目だと言ったのにまた浮気をした」(f-24) や「相手に才能がない」(f-11) などの発言は、相手に期待を裏切られた、相手に失望したことなどが関係を維持する動機を失わせていたことを示している。これらを「相手に対する失望」というコードにまとめた。

「別の女の子の方に魅力を感じてしまう」(m-14) や「相手に対する愛情がなくなってきた」(m-8) などの発言は、相手とは別の異性に惹かれるようになったり、相手に持っていたはずの気持ちや感情が薄れたことにより、関係を維持しようとしなくなったことを示している。これらを「相手に対する特別な想い・愛情の減少」というコードにまとめた。

「生活のリズムが合わない人」(f-26) や「女友達と仲が良いという元々のスタイルは変えたくない」(f-20) などの発言は、今の生活や大切にしていることを変えてまで、相手との関係を維持するつもりがないことを示している。これらを「自分を貫けない」というコードにまとめた。

これら3つのコードは、相手との関係を維持する動機を失わせている要因を表している。研究参加者たちには、「相手との関係を維持したい」という強い感情は見えず、さらにその相手でなければならないという理由も存在しない。また場合によっては自分のパートナーや二人の関係を手放し、別の相手との代替も可能であることを示していると言える。従ってこれらを「代替できる相手・関係」というカテゴリーにまとめた。

3-2-1-1. 相手に対する失望 (25 回答)

私にとって仕事は重要で、仕事に対するプライドが高い。だから、自分のパートナーの仕事に関する能力が低いと思った時、相手にがっかりするし、「ダサいな」と思ってしまう。私は尊敬できる男性が好きだから、仕事に関して駄目なところを目の当たりにすると、二人の関係を維持する価値がないと思ってしまう。

(f-3・45 歳既婚女性・子有り)

相手の生活スタイルを見ていて向上心がない人だと、「何かを新しく勉強し始めたい」みたいな話題もない。自分の知らないことを教えてくれるような人でないと、私が相手を支えるような気がして嫌になる。

(f-21・35歳未婚女性)

3-2-1-2. 相手に対する特別な想い・愛情の減少 (11 回答)

僕自身が利己的な人間だから、相手に求めるのは「純粋さ」。だから奥さんが持っている純粋さが無くなった時は、関係を続けていこうという気持ちはなくなるかもしれない。

(m-6・37歳既婚男性・子有り)

相手に対する恋愛感情を疑い始めた。

(f-26・36歳未婚女性)

3-2-1-3. 自分を貫けない (3 回答)

私は女友達とずっと仲が良い。私が持っている元々の生活スタイルを変えるのは嫌。

(f-20・43歳未婚女性)

生活のリズムが合わない人は駄目。相手が深夜の仕事とか。

(f-26・36歳未婚女性)

3-2-2. 将来的不安 (2 コード・5 回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「いつかは子供が欲しいし、ちゃんとしなくちゃと思っていた。この相手では駄目だと思った」(f-3)や「先の見通しもないのなら、このまま関係を続ける意味はないと思った」(m-8)などの発言は、今の相手とはこれからの将来を共に過ごすことはできないという気持ちを表している。これらを「将来を共に描けない相手」というコードにまとめた。

「子供や家庭に害を及ぼす場合」(f-22)や「今の生活ができなくなったら。経済的安定が保てなくなったら」(f-23)という発言は、自分の子供や家庭を守ることが重要であ

るという認識を示しており、これらを「子供・家庭を守れない」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、現在の状態からは二人の将来が想像できないという気持ちを表している。従ってこれらを「将来的不安」というカテゴリーにまとめた。

3-2-2-1. 将来を共に描けない相手 (3 回答)

いつかは子供も欲しいし、ちゃんとしなくちゃと思っていた。この相手では駄目だと思った

(f-23・45歳既婚女性・子有り)

嫌いじゃなかったけど、この生活を維持するのは無理だと思った。自分の転勤が決まった時、一緒に来るか、別居だけど子供をつくるかなどをしなければ、夫婦でいる意味がないという話をしたが、相手は「無理」と言った。もう別れた方がいいと思った。

(m-8・33歳独身男性)

3-2-2-2. 子供・家庭を守れない (2 回答)

子供や家庭に対して何らかの害を及ぼすことや、家族が生活できなくなるような事態を相手がつくった場合、結婚生活を続ける必要はない。自分が夫にイライラするのは構わない。そんな相手と結婚したのは自分自身だから。でも子供に辛い思いをさせたり、子供のためにならないようなことをした場合、旦那とは別れると思う。

(f-22・43歳既婚女性・子有り)

今の生活ができなくなったら、今の経済的安定が保てなくなったら、夫との関係は終わると思う。

(f-23・46歳既婚女性・子有り)

3-2-3. 「RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか」のまとめ

「RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか」について、以下のことが明らかになった。

3-2-3-1. 恋愛相手としての価値

「どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせているのか」というリサーチ・クエスチョンに対し、相手に失望したり、元々あったはずの相手に対する愛情がなくなったなど、ほぼすべての回答が「相手との関係を維持させるだけの価値を見出せない」ということに関連していた。

36歳未婚女性（f-24）が以前付き合っていた男性は、この女性との交際中に別の女性と一度浮気をしたことがあったという。彼女はその時は彼を許したが、「次に浮気をしたら別れる」と言ったにもかかわらず、彼はまた浮気をしたという。この女性によると、「彼は優しい人で八方美人。あちこちにいい顔して、その結果が浮気なのか」と浮気を繰り返す恋人に嫌気がさし、その後メールで別れを告げたという。

また35歳未婚女性（f-18）は、遠距離恋愛をしていた恋人から「会いに来られるのが重い」、「存在が重荷」、「もう要らない」と言われたという。そして、そのような言葉を発した理由についてその男性は、「自由でいたいしもっと遊びたい」と答えただけでなく、その時点で別の女性とも付き合っていたという。この女性は、「最初、彼は強くてカッコいいと思っていたけど、最後は何もかもがグレーだった。女々しい面が見えた。相手が開き直ったり、どんどん逃げ腰になったりして嫌になった」と話し、その後すぐに別れたという。恋人の言動に失望し、相手に価値が見出せなくなったことが、この女性の相手との関係を維持する動機を失わせていたと言える。

また、相手との関係維持の動機を失わせるものとして、「二人の将来が見えない」という理由も存在した。浮気を繰り返す男性と付き合っていたという45歳既婚女性（f-3・子有り）は、恋人が別の女性と会っていることを知っていたが、それを黙認し続けていた。なぜならこの女性は、将来その恋人と結婚することを望んでおり、いつかは自分の元に戻ってくると信じていたからだという。結局、彼が浮気をやめることはなかったが、それでも二人の関係は6年ほど続いたという。だがその後、彼女は「相手との将来は望めない」と感じ、その男性とは別れたと話していた。このように、相手に失望したり、相手との将来が描けないことが、関係維持の動機を失わせていた。研究参加者たちの関係解消の理由はさまざまだったが、前述の女性たちに共通していたのは、「二人の関係に対してある程度時間を掛け、そして情熱や労力を注いだ後に別れている」という点であった。

一方、恋人と別れたとしても、相手に使った時間や相手のために犠牲にしてきたものは取り返すことはできない。これを「Sunk cost/埋没費用（取り返すことのできない費

用) (Sutton, 1991) に基づき説明することができる。例えば、現在3年間交際している恋人がいるとする。付き合い始めの頃は楽しかったが、今は何となく関係を続けているだけである。そして、自分は今30歳で結婚願望が強い。これまで3年間という時間を恋人に費やしてきただけでなく、恋人との時間を優先させるために、趣味や女友達との付き合いを犠牲にしたこともあった。だが、このまま交際を続ければ今は結婚に意欲的ではない彼も、そのうち結婚を真剣に考えるようになるかもしれない。反対に、将来が不透明な今の関係と相手に見切りをつけたとしても、これまでの「時間」、「相手に費やした労力」、そして「犠牲にしてきたもの」などは取り返すことはできない。これらが「埋没費用」である。

この埋没費用と自身の恋愛を関連付けた発言をしていた女性がいた。35歳未婚女性(f-21)は、「損切り」という言葉を使い、「相手が自分のためにならないと感じるとすぐに別れる」と話していた。さらに彼女は、「私は人生において損切りが早い。『このままやめたらもったいない』とか『ここでやめたら成果がでないかもしれない』などと思うことはあまりない。むしろ相手と無駄な時間を過ごし続けることの方が結果的には損になる。それに損切りのタイミングを失ったら結局は損が膨らむだけ。自分にネガティブな要素しかないのであれば、すぐに関係を切る」と話していた。この女性は、早い段階で相手との関係や将来を見極めることで、埋没費用を最小に抑えようとしていた。

また41歳未婚女性(f-11)も、「自分に相当合うとか、相手に才能や何かないと関係は続かない。最初は連絡を密に取るけど、嫌になったら見限る」というように、自分独自の判断基準を満たさない相手については、できるだけ早く関係を終えるようにしていた。このような発言をしていたのは本研究では女性だけであり、男性には見られない傾向であった。さらに本研究参加者の女性の中で、「相手とのこれまでの時間を無駄にしたいくない」、「ここで別れたらもったいない」などが関係維持の動機になっている者はいなかった。

「関係維持の動機を失う」という点において、今回の女性研究参加者の行動に注目すると、2つの異なるプロセスが存在した。前者は、恋人と一定期間付き合った上で、相手を見極めようとする。そして、「相手に価値を見出せない」、「二人の将来が描けない」などと判断すると、相手と別れることを自ら決断していた。そして後者は、さほど時間を掛けることはせず、相手には価値が見出せないと判断すると、前者同様、関係を断ち切る行動を自分から起こしていた。時間を「掛ける」もしくは「掛けない」という違いはあったが、「『自分』が相手や関係を見極める」、「『自分から』別れる」という行為は

女性に共通していた。これは、恋愛対象を選び好みし (Kenrick, Sadalla, Groth, & Trost, 1990)、相手を用意深く観察し、関係をより現実的に捉える (Buss & Barnes, 1986) という恋愛関係における女性の特徴とも一致している。本研究では、女性は関係を客観的に判断し、その関係に将来性があるのかということまで見極めようとする傾向が強かった。

オランダの社会心理学者であるホフステード(1995)が、1980年代に約50カ国のIBMの社員を対象に行った国民文化に関する調査で、「男性らしさ」の項目において日本は1位で、2位のオーストリアを大きく引き離していた。男性らしさを特徴とする社会では、社会生活の上で男女のジェンダー・ロールがはっきりと分かれており、女性は謙虚で優しく、生活の質に関心を払うものだとされている。一方、男性は自己主張が強く、たくましく、物質的な成功を目指すものだと考えられている。日本では、男性は社会のさまざまな事柄において主導権を持ち、物事を冷静に判断すると考えられているのである。しかし、本研究参加者の女性たちが「相手」や「関係」を見極めるという状況では、伝統的なジェンダー・ロールに基づいた主張とは異なり、女性は冷静に、そして客観的に相手や関係を捉え、今後どうするかについて自分の意思に基づく決断を下していた。これは Miyahara & Imahori (1999) の研究結果とも一致する。

Miyahara & Imahori (1999) は、日本の大学生が「関係を終わらせる」という状況において、女性は相手と会って話し合うという行動を起こす一方、男性は相手と直接向き合おうとせず、その状況から立ち去る傾向にあったと述べている。今回の研究参加者の女性たちも、状況を冷静に見つめ、そして自分の恋愛関係を客観的に捉えていた。ジェンダー・ロールは、文化や社会と関連しながら、時代と共に変化すると考えられる。このジェンダー・ロールが「恋愛」とどのように関連しているかについて、次項で追究していく。

3-2-3-2. ジェンダー・ロールと恋愛

関係維持の動機を失わせるものには、関係維持の動機になるものと同じく「婚姻関係」に関するものが挙げられていた。そして既婚者の中で、自分の配偶者が子供に害を与えたり、経済的安定を揺るがす状況をもたらした場合、「相手との婚姻関係を維持する必要はない」と回答したのはすべて女性であり、男性の中でこのような発言をした者はいなかった。

46歳既婚女性(f-23・子有り)は、「今の経済的安定が保てなくなったら、夫との関係は終わると思う」と話していた。この女性はインタビュー中、「経済的安定と子供が一

番大切」ということを繰り返し口にしていた。そして 43 歳既婚女性 (f-22・子有り) は、「自分が夫にイライラするのは構わない。そんな相手と結婚したのは自分自身だから。でも夫が子供に辛い思いをさせたり、子供のためにならないようなことをした場合、夫とは別れる」と断言していた。またこの女性は、「夫は家のことは一切手伝ってくれない。ただいるだけの人。私はシングルマザーみたいなもの」と話し、さらに彼女は、食べ物好き嫌いが激しい夫のために、子供とは違う食事を毎回作っているという。この女性はフルタイムの職に就いており、仕事、家事、育児に追われる日々だと話していた。彼女のように、女性が中心となり家事や育児を行うという状況はこれからも続いていくのだろうか。

「平成 29 年版 男女共同参画白書」によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるか」という質問に、2016 年は「賛成」または「どちらかといえば賛成」と答えた女性は 37%、男性は 44.7%であった。その 14 年前の 2002 年に実施された同様の調査では、「夫が外で働き妻は家庭を守るべき」という考えに肯定的だった女性は 43.3%、男性は 51.3%だった。以前に比べ、「男性らしさを特徴とする社会」の傾向は弱くなっているが、今でも約 4 割の男女は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」と考えている。つまり現代日本に生きる人々は、約 40 年前にホフステードが行った調査結果とさほど変わらないジェンダー・ロールを、今もなお持ち続けているということになる。さらに、ジェンダー・ロールに関連して「平成 30 年度 男女共同参画社会の形成の状況」の「女性が職業を持つことに対する意識」に関する調査で、「女性は職業を持たない方がよい」、「結婚するまでは職業を持つ方がよい」、「子供ができるまでは職業を持つ方がよい」、「子供が大きくなったら再び職業を持つ方がよい」の回答の合計は女性 42.8%、男性は 42.5%だった。4 割以上の男女が、「女性は子供が大きくなるまで仕事を持たない方がいい」と考えていることになる。これらは日本では現在もなお、育児と子育てを主に行うのは「女性」であるという考えが支持されていることを示していると言えるだろう。

また、「平成 30 年度 男女共同参画社会の形成の状況」によると、男女雇用機会均等法に関する相談で最も多かったのが「セクシャル・ハラスメント (セクハラ)」に関するもので 6,808 件、それに次いで多かったのが「婚姻、妊娠、出産を理由とする不利益な取り扱い」の 4,434 件だったという。昨今、「マタニティ・ハラスメント (マタハラ)」という言葉をよく聞く。これは女性が妊娠や出産をきっかけに、職場で精神的および肉体的な嫌がらせを受けたり、妊娠・出産を理由とした解雇や雇い止めにより、不利益を

被ったりするなどの不当な扱いのことである（厚生労働省、2019；コトバンク、2019）。国や地方自治体は、働く女性の妊娠・出産に関する法律や条例を制定し、そして企業は子供がいる女性の職場環境の改善を進めている。さらに厚生労働省は2010年、男性の子育て参加や育児休暇取得の促進などを目的とした「イクメンプロジェクト」を立ち上げるなどの取り組みを始めている。それにもかかわらず、実際には子供を持つ女性が抱える悩みは解決されるに至っていない。

2016年、職場に復帰するため、子供を保育園に預けようとしていた母親が保育園の抽選に落ちた。この女性は、なかなか解決しない待機児童問題に対する怒りや理不尽さをインターネットに書き込んだ。インターネット上では同じ境遇の人たちから共感の声が相次ぎ、メディアそして国会でも取り上げられた。この出来事は、子供を産んだがその受け皿がないという現実を改めて日本社会に訴え掛けた。厚生労働省政策統括官のまとめによると、2018年の待機児童数は、前年比では4年ぶりに減少に転じたが、なお2万人近くの待機児童が存在する（朝日新聞デジタル、2018年11月19日）。

また、街で妊婦やベビーカーを使用している母親が、周囲の助けを必要としていると思われる場面において、その場に居合わせた他人が積極的に手を貸すという光景を頻繁に目にすることはあまりない。さらに、公共交通機関ではベビーカーの使用が制限されることもあり、日本には子育てをする快適な環境が整っているわけでもなければ、他人の子育てに対する理解も関心も十分であるとは言えない。

一方、ベビーカーに子供を乗せて地下鉄に乗ろうとしている母親がいたら、周囲の見知らぬ人々が駆け寄り、ベビーカーを持ち上げ乗車させる。そしてその母親が下車しようとするすると周囲の乗客はそれを手伝い、さらに子供を乗せたベビーカーを持ち上げ、階段を昇り、そして地上に出た母親はお礼の言葉を伝えその場を立ち去る。このような光景は、海外では頻繁に見られるというが、子連れの母親に積極的に手を貸すという「文化」、そしてそのようなことは、日常のひとつに過ぎない当たり前のことだと母親が感じられる「文化」は、現段階において日本に根付いているとは言えない。

「日本は『男性らしさ』を象徴する社会である」というホフステード（1995）の調査結果を後押しするような、1980年代とさほど変わらないジェンダー・ロールが日本には今もなお存在していると言える。事実、出産後の女性が以前と同じように仕事することを望み、そしてそれが社会に求められていたとしても、待機児童問題やマタハラが示すように、女性が職場復帰することは容易なことではない。さらに職場において短時間勤務制度があったとしても、それにはある一定の条件を満たすことが必要であり（厚

生労働省、2012)、さらに女性の中には周囲に気を遣い、働きづらいつと感じる者もいるかもしれない。この待機児童問題やマタハラのような新たな社会問題が加わったことで、結局のところ日本では今もなお、女性が育児や家事で家庭を支え、男性が外で働き家庭を経済的に支えるという構図が変わらないままなのかもしれない。

本研究に参加していた既婚女性たちは、「子供や家庭を支える」ということに強い責任感を持っており、さらに自分の家庭を壊す者が配偶者であれば、夫との関係を捨てるも構わないと考えていた。一方、前項で述べた通り、本研究に参加した女性たちの恋愛対象を見極める際の視点は、伝統的なジェンダー・ロールに基づいた主張とは異なり、冷静に、そして客観的に相手や関係を捉え、今後どうするかについて自分の意思に基づく決断を下していた。さらに前述の Miyahara & Imahori (1999) が行った調査では、日本の女子大学生の多くが「関係を終わらせる」という場面で、相手と会って話し合いをするという行動を自ら起こしていた。これらのことから、現代日本人女性が持つ考え方や行動の指針は、伝統的なジェンダー・ロールとは必ずしも一致するわけではなかった。だがそれと同時に、本研究参加者の既婚女性たちは、「子供や家庭を支える」という伝統的なジェンダー・ロールに基づく考えも持っていた。ジェンダー・ロールは、特定の社会や文化に合わせて存在するが、それは時を越えてそこで生きる人々に「適用できる部分」と「適用できない部分」の両面が存在することを本研究は示したと言えるだろう。また本研究は、「男女の相違に基づいた視点」からの研究という意図はなかったが、インタビュー内容を分類・分析した結果、男女の相違が顕著に見られる部分が多く存在した。もちろんこの結果が、すべての日本人男女に当てはまるということではないが、ジェンダー・ロールの変化やそれを取り巻く社会環境などがインタビュー・データに反映されていたと言える。

第3章 〈研究2〉「過去」の経験がもたらす「現在」の恋愛 関係および恋愛観への影響と変化

1. 恋愛関係に影響を与える要因

1-1. 過去の恋愛と現在の恋愛

恋愛関係にいる者の多くは、相手との関係をできるだけ長く維持したいと望んでいるが (Canary & Stafford, 1994)、その恋愛関係とは、異なる二人の人間によって築かれた

ものである。現段階において、二人が関係を築き、維持していたとしても、そこに至るまでに二人が経験してきたこと、そして歩んできた人生がそれぞれ異なることは言うまでもない。

Merolla, Weber, Myers, & Booth-Butterfield (2004) は、個人の「過去の経験」はその人間の「現在」に影響を与えていると述べており、それは過去の「恋愛経験」についても同じことが言える (Sorenson, Russell, Harkness, & Harvey, 1993)。そして過去の恋愛経験の中でも、特に関係の「崩壊」および「解消」という経験は、人に心理的な痛みを与え、その後の恋愛や恋愛関係、そして恋愛観の形成にも影響を与えることが分かっている。

Simpson (1987) によると、恋愛関係の崩壊そして解消とは、人生において最も耐え難い、辛く苦痛な経験のひとつであり、個人の記憶に長い間残り続ける。そして、恋愛中に相手からの気持ちや思いやりがなくなっていくことを経験した者は、関係が崩壊し、解消された後も、その当時の苦しみを長期にわたり引きずる傾向にある。さらに恋愛関係を失った結果、さまざまな種類の自己変化を経験する者は多く、自分自身の存在意義を見出せなくなり、自尊心を失う者も少なくない (Slotter, Gardner, & Finkel, 2010)。また相手との交際期間が長く、二人の関係性が親密で、かつ、この先新しい異性と交際する見込みが少ないと考えられる場合、男女問わず、関係解消後に落ち込むことが多い (Simpson, 1987)。

これらの研究はすべて欧米で行われたものだが、日本でも恋愛関係の崩壊や解消に関する研究が行われている。日本人大学生を対象とした研究によると、恋愛関係が崩壊または解消した場合、多くの者は落ち込み、自分を見失い、そして現実を受け入れられないという状態に陥る (石本・今川、2001; 2003; 和田、2000)。さらに、別れの理由を理解できていない者は、失恋後、「もう人を好きになれない」、「恋愛をしたくない」、「異性を信じられない」などの心理変化を経験する (石本・今川、2003)。そして和田・増田・柏尾 (2015) によると、相手から別れを告げられた側が経験する関係解消には、心理的苦痛に加え、その後の社会生活におけるさまざまな困難が含まれているという。たとえ相手が別れを切り出し、晴れやかな顔をしていたとしても、別れを突き付けられた側にとって、二人の関係というのはまだ過去のものになったわけではないだろう。それから時間を掛け、さまざまな経験を重ねるなどしながら、失った相手、そして関係が徐々に「過去」のものとなっていくのではないだろうか。「恋愛」というのは、喜びに満ちた瞬間、そして辛い時間なども含めた、非常に長いプロセスをたどる関係性であると言える。そしてひとつの恋愛が終わり、また新しい恋愛をしたとしても、相手も自分も状

況も関係性も以前とは異なる。同じ相手、同じ自分、同じ状況、同じ関係性というものは存在しないため、誰にとっても「同じ恋愛」というものを経験することはない。だからこそ、毎回新しい恋愛を経験し、人は恋愛関係という経験を重ねていくと言える。

恋愛関係の崩壊や解消を含んだ「恋愛」という経験は、個人の心に強く残り続けるからこそ、現在の恋愛や未来の恋愛だけではなく、その人間の人生にも影響を与えようと言えるだろう。さらに、過去に一度でも恋人がいた者が、新しい恋人と恋愛関係を築く場合、その新しい恋人、そして新しい恋愛関係の比較対象となり得るのは、過去の恋人であり、過去の恋愛関係であることが多いだろう。恋愛経験の数、そしてその内容は個人によってさまざまであると考えられるが、実際に自分自身が経験した恋愛だからこそ、その「過去」の恋愛は、「現在」の恋愛や恋愛観に影響を与える要因のひとつであり、「過去の恋愛」と「現在の恋愛」には密接した関係があると考えられる。

1-2. 恋愛関係に影響を与える要因

恋愛関係の崩壊や解消などを含む「過去の恋愛」が、現在の恋愛に影響を与えていることは前述の通りだが、それ以外にも現在の恋愛や恋愛関係に影響を与える要因が存在する。まず、「個人の資質」や「能力」が挙げられる。Merolla (2017) は、恋愛関係において、二人の相違点が浮き彫りになったり、相手と衝突したり、また困難に遭遇したとしても、問題を冷静に受け止め、二人のゴールに近づくような明確な道筋を立てたり、生産的な解決方法を見つけることができる人間がいるが、それは個人の資質や能力によると説明している。そして、そのような能力を誰もが持っているわけではないということも、Merolla (2017) は指摘している。

また「男女の違い」も恋愛関係に影響を与える。女性と男性は異なる社会で育ち、異なるジェンダー・ロールを持つ。さらに、両者が持つ自我や追い求めるゴールは異なることが多いため、恋愛関係においてもそれらは表面化しやすい。例えば、男性は自分自身に公正や正義を見出し、自分に口出しをする女性に対して競争心を持ちやすい (Kenrick et al., 1990)。さらに女性と比較して、恋愛パートナーに対する欲求が強く、かつ、失恋などの場面に遭遇すると感傷的になりやすい (Choo, Levine, & Hatfield, 1996)。一方、女性は恋愛対象を選び好みし (Kenrick et al., 1990)、相手を用心深く観察する (Buss & Barnes, 1986)。そして実際に交際が始まると、相手に積極的に関わろうとしたり、世話を焼くことに価値を見出す (Sagrestano, Heavey, & Christensen, 2006)。男女はそれぞれ

の習性、そして関係において大切にしているものなどが異なるため、両者が満足いく状態で関係を維持することは簡単ではないと考えられている。

また恋愛関係に影響を与える要因として、個人が持つ「恋愛観」が挙げられる。Knee, Patrick, & Lonsbary (2003) は、「恋愛は運命的なもの」と「恋愛は互いを成長させるもの」という2つの恋愛観を例に挙げ説明している。「恋愛は運命的なもの」と考えている者は、目の前に現れた異性が、自分がこれまで描き続けてきた理想や条件に近いと判断すると、その異性を自分の運命の相手であると認識する。そして、相手との関係を構築するために積極的に行動を起こし、エネルギーを注ぎ続ける。だが、相手が自分の理想とかけ離れていたり、自分にとって完璧な相手ではないと判断すると、その状況、そしてその相手から早々に立ち去るという (Weigel, Lalasz, & Weiser, 2016)。

一方、「恋愛は互いを成長させるもの」と考えている者は、関係において困難なことがあったとしても、その状況を克服するために立ち上がり、乗り越え、状況を変えようとする。このような考えを持つ者は、恋愛関係における障害に対して、その障害があるからこそ二人の関係が強くなり、かつ、それは二人が成長する機会であると捉えている (Knee et al., 2003)。これらのことから Knee ら (2003) は、異なる恋愛観を持つ者同士が恋愛関係を築いた場合、恋愛に関するゴールや関係を維持するモチベーションが異なるため、関係がうまくいくことは難しくなると結論付けている。

これらの先行研究において、恋愛に影響を与える要因として注目されていたのは、個人の能力・資質、恋愛観の違い、男女の違いなどであった。これらはすべて「個人」という視点に関連していたが、「周囲」や「社会」との関連性はほぼなかったと言える。そしてこれらの研究はすべて、恋愛関係が個人と個人の結び付きである (ゴードン、2017) と考えられている欧米で行われており、研究を行った研究者もすべて欧米出身であった。欧米では、恋愛は個人同士の結び付きであると考えられていたとしても、日本においてそのような考え方が浸透しているとは限らない。

日本人の人間関係について、原 (2012、p.218) が「日本人は、人と人の関係にどのような影響が及ぶかを物事の判断基準としてきた」と述べているように、日本において、人は周囲や世間からの影響を気にしながら、関係を構築したり維持していると考えられる。恋愛関係についても、日本人にとってそれは二人だけの関係ではなく、周囲も含めた関係であると考えられているのだろう。さらに、恋愛関係に影響を与える要因として、欧米では「周囲」、「社会」などに関するものが含まれていなかったことに注目すると、これまでの欧米での恋愛に関する研究結果は、日本人や日本社会に当てはまる部分もあ

ると考えられる一方、日本人を説明するには不十分な部分もあると言える。このことから、過去に欧米で行われてきた恋愛研究を、そのままのかたちで日本社会に適用できるか、日本人を説明できるかという点については疑問であり、日本人が持つ恋愛に対する認識について別途理解する必要があると言える。

さらに前述の欧米の先行研究で、個人の性質、価値観、恋愛観、ジェンダー・ロールなどが、恋愛に影響を与える要因とされていたが、これらはすべて「個人」に関するものであると同時に、これまでの人生において個々が「習得」してきたもの、つまり個人の「過去の経験」によって形成されていると考えることができる。Duck & Sants (1983) は、人間を理解するにはその人間の「過去の人間関係」を理解する必要があり、さらに Merolla ら (2004, p. 261) は、「人間関係とは動的であり、人は現在向き合っている事柄だけに影響を受けているのではなく、過去の経験からも影響を受けている」と述べている。これまで多くの恋愛研究が行われてきた欧米、そして本研究が対象としている日本では、文化的・社会的背景は異なるが、「誰もが過去を持っている」という点は共通している。従って、「個人の『過去』の経験は『現在』の恋愛関係や個人の恋愛観に影響を与えている」ということもまた、欧米と日本で共通しているのではないだろうか。そして、その過去に影響を受けながら存在している現在の恋愛関係は、Baxter & Montgomery (1996; 2000) や Merolla ら (2004) が主張する「動的である」という視点に立つと、恋愛関係とはどのように「変化」しているのだろうか。恋愛研究が盛んに行われてこなかった日本では、これらの疑問について分かっていることはあまりない。さらに Merolla ら (2004) によると、恋愛の始まり、維持、崩壊、解消に関してこれまで研究されてきた一方、「過去」の恋愛関係が、次の関係に「どのように反映されるのか」について分かっていることは少ない。誰もが持つ「過去」を「現在の恋愛」と関連付け、これまで恋愛コミュニケーション研究があまり行われてこなかった日本において、日本独自の文化的視点に基づき追究することは意義があると考えられる。さらに本研究において、「過去」という視点から「現在の恋愛関係」や「個人の恋愛観の『形成』や『変化』」を追究することで、これまで明らかになっていない日本人の恋愛関係のあり方、そして恋愛観に関する考察を深めていくことができると考えられる。

RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか

RQ 3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか

2. 研究

2-1. 研究方法・分析方法

2-2. 研究対象者

「RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか」および「RQ 3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか」に対する研究方法、分類・分析方法、および研究対象者は第 2 章 (p.16-21) と同様である。

3. 調査結果

3-1. RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか

インタビュー・データから得た回答を精査し、コード化およびカテゴリー化を行った結果、「RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか」について 76 の回答があった。それらの回答を 8 つのコード、そして 3 つのカテゴリーに分類した。

〈表 3〉 RQ 2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか

カテゴリー (回答数)	コード (回答数)
自分の過去の恋愛経験によって構築された恋愛観 (36)	自分の恋愛経験からの理解・気づき (28) 相手とは共有しない(しづらい)独自の恋愛観 (8)
育った環境・親の影響によって構築された恋愛観 (20)	親の行動・態度を基軸とした恋愛観 (18) 自分の恋愛に親の意見を取り入れる (2)
恋愛に対する認識の変化 (20)	結婚の重み (6) 異なる過去と現在の恋愛観 (6) 離婚と世間 (6) 恋愛と老後 (2)

3-1-1. 自分の過去の恋愛経験によって構築された恋愛観 (2コード・36回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「過去の恋愛経験から自分を客観的に見ることができるようになった。甘えられないとか」(f-18)や「依存性が高い相手とは付き合えない」(m-1)などの発言は、過去の恋愛を通して自分が恋愛パートナーに何を求めているか、また恋愛に対する自分の態度などを理解したと言える。これらを「自分の恋愛経験からの理解・気づき」というコードにまとめた。

「前の彼と付き合っていた時、相手が浮気していた。でも実は自分も(恋人とは別の男性との関係が)ちょこちょこあった」(f-3)や「男性が純粋なものだとは思っていない。裏切られても大丈夫なように、自分自身の気持ちを複数の男性に分散する」(f-21)などの発言は、過去の自分の浮気経験など、現在の恋愛相手とは共有しづらい過去、そしてその過去が形成した独自の恋愛観を示している。これらを「相手とは共有しない(しづらい)独自の恋愛観」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、自らが経験した恋愛によって構築された独自の恋愛観を示している。これらを「自分の過去の恋愛経験によって構築された恋愛観」というカテゴリーにまとめた。

3-1-1-1. 自分の恋愛経験からの理解・気づき (28回答)

若い時に付き合っていた彼女に振られた時、「物足りない」と言われた。自分は「いいよ、いいよ」と相手にいつも言っていて、それが優しさだと思っていた。たまにはグイッと引っ張るとか、危ないようなことをするなどのメリハリが必要だと思った。僕には安心感はあるけど、面白みはないということだったんだろう。だけど、自分は危ないことをしたり、グイッと相手を引っ張るタイプでもない。そこに自分は価値を見出せないし面倒くさい。

(m-4・36歳既婚男性・子有り)

過去の恋人や(自分の)離婚の経験を振り返っても、自分は不幸風な女性に惹かれてしまう。両親も自分が選ぶ女性について「大丈夫か」と思っていたらしい。次の結婚では親に聞くとと思う。自分がつい惹かれてしまうような不幸な女性は、今後避けようと思っている。

(m-8・33歳独身男性)

3-1-1-2. 相手とは共有しない（しづらい）独自の恋愛観（8回答）

相手が結婚していても大丈夫。自分だけのものにしたいとは思わない。相手にお子さんがいても大丈夫。私が好きだと思える相手ならそれで構わない。誰かを傷つけるのは嫌だけど、相手がちゃんと隠しておくのなら大丈夫。私の恋愛に倫理的な縛りはない。

（f-3・45歳既婚女性・子有り）

接客のアルバイトをしていた経験から、男が誠実なものだと思っていない。うちのお父さんもずっと浮気していたし。だから男が誠実だと信じて、自分の神経を注いでひとりを純粋に愛しても、結局裏切られるだけなら、最初から期待しない。裏切られても大丈夫なように、常に10人前後の男性を抱えている。

（f-21・35歳未婚女性）

3-1-2. 育った環境・親の影響によって構築された恋愛観（2コード・20回答）

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「自分の親が離婚しているし、子供なんていない方がマシだと思う」（f-18）や「父親が浮気していたので男は浮気するものだと思っている」（f-22）という発言は、自分が育った家庭や両親の行動を基準として、恋愛パートナーや恋愛関係に対する認識が形成されていることを示している。従って、これらを「親の行動・態度を基軸とした恋愛観」というコードにまとめた。

「親が自分の恋人をどう思っているのか気になる」（f-21）や「彼氏に対して母が反対するのは何か理由があると思う」（f-20）などの発言は、自分の恋人に対して親がどのように感じているかを気にするだけでなく、自分自身の恋愛を親に認めて欲しいという気持ちを示している。これらを「自分の恋愛に親の意見を取り入れる」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、自分が育った環境や両親の姿などが、自分の恋愛観を形成していることを示しており、これらを「育った環境・親の影響によって構築された恋愛観」というカテゴリーにまとめた。

3-1-2-1. 親の行動・態度を基軸とした恋愛観（18回答）

「生活が安定するのが一番。経済的に安定することが重要で、女性が男性並みに稼ぐのは難しい」と母がずっと言っていた。私の場合、(仕事をしていた時は)収入はあった。けど仕事はハードだった。このままキャビン・アテンダントとして働き続けるのは無理だと思ったし、寿退社して仕事を辞めることにも未練がなかった。だからこそ母が言っていたように、自分の旦那には稼いで欲しいと思っていたし、安定して生きていくためにはそうしてもらわないといけないと思っていた。今の旦那と家族になる時は、生活の安定が一番大事だと思っていた。今は満足できる生活ができているから、家のことは私がすべてやる。旦那は料理とかしなくていい。

(f-23・46歳既婚女性・子有り)

相手にDVをしていた過去があれば、それは変わらないと思う。完全に治るとは思えない。私の父がDVだったから、そこだけは絶対に許せない。

(f-18・35歳未婚女性)

3-1-2-2. 自分の恋愛に親の意見を取り入れる (2回答)

親のプレッシャーは結構あるかも。親に、「この人とは付き合わない方がいいんじゃないの」と言われたら、それって結構影響力があるから。自分の中では消化試合だと思って気持ちの整理をしたりする。

(f-21・35歳未婚女性)

親が彼氏に対してどう思っているかっていうのは気になる。毒親的視点で反対しているわけではないだろうから。もし反対するなら何か理由があるんだと思う。実際、過去に母親にやんわり反対されたことがある。

(f-20・43歳未婚女性)

3-1-3. 恋愛に対する認識の変化 (4コード・20回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「恋愛と違って結婚は家と家との関係」(f-24)や「結婚して相手の人生を背負うことは中途半端にはできないと思っていた」(m-10)などの発言は、結婚とは相手に対する責任や周囲を巻き込むものであるという認識を示している。これらを「結婚の重み」というコードにまとめた。

「恋愛では付き合う前のドキドキなどを楽しんでいたけど、今は全く求めていない。だから寂しくもある」(f-23)や「結婚は楽しいものだという想像があった。家庭では落ち着けるものだと思っていたが、実際はそうではなかった」(m-8)などの発言から、過去を振り返り、過去と現在の恋愛観は異なるものであると認識されている。これらを「異なる過去と現在の恋愛観」というコードにまとめた。

「僕は自分の離婚について納得していたけど、世間が必ずしも自分と同じ認識を持っていたわけではなかった」(m-8)や「今の彼女には離婚のことを最初に言えなかった。離婚がマイナスであると思っていた」(m-8)などの発言は、「離婚」に対する自分と世間の認識の異なりを過去に経験しており、さらにその経験が、元々持っていた自分自身の「離婚」への認識に影響を与え、変化させたことを示している。これらを「離婚と世間」というコードにまとめた。

「恋人と別れて、『今後、結婚を前提で付き合える人と出会えるのか』と思った。『ひとりで死ぬんだ』というショックの方が大きかった」(f-16)や「今の彼女と結婚したら、老後の世話をしたい」(m-19)などの発言は、恋愛から結婚に発展し、そして結婚が自分の老後にも関連するという認識が持たれていることを示している。これらを「恋愛と老後」というコードにまとめた。

これら4つのコードは、人生経験や恋愛経験を重ねながら恋愛に対する自らが持つ認識が変化していることを示していた。従って、これらを「恋愛に対する認識の変化」というカテゴリーにまとめた。

3-1-3-1. 結婚の重み (6 回答)

恋愛と結婚は別。恋愛はただ楽しくて今が良ければいいけど、結婚は生活することに変わっていく。だからそれを意識した時、色々な情報や準備が必要になると思う。

(m-8・33歳独身男性)

仕事でたくさんの家族模様を見てきた。その度に、「結婚して子供がいることが本当に幸せなのかな」と考えてしまう。だからこそ結婚に執着しなくなった。

(結婚を)今すぐには思わない。

(f-13・33歳未婚女性)

3-1-3-2. 異なる過去と現在の恋愛観（6 回答）

恋愛観は結婚前と離婚後で大きく変わった。若い頃は恋愛にのめり込んでいたし、恋愛することで毎日がハッピーになると思っていた。前の妻と結婚する前は、結婚は楽しいものだと想像していた。家庭は落ち着けるものだと思っていたが、実際はそうではなかった。

（m-8・33 歳独身男性）

恋愛はもういない。恋愛はその時の自分の寂しさや暇な時間を埋めるためのものだった。もう恋愛はいらないと思っているのは、一通り恋愛をして気が済んだのかな。恋愛っていうのは若い時に楽しむものだと思っている。

（f-23・46 歳既婚女性・子有り）

3-1-3-3. 離婚と世間（6 回答）

僕が離婚を失敗と思っているのは「世間」を見てしまうから。もしバツ 2、バツ 3 となると「ヤバい人って思われるかな」っていうのがあるから。さすがにそうはなりたくないと思っている。だから自分は既に 1 回失敗しているんだなと思う。

（m-8・33 歳独身男性）

離婚に関して、両親には「仕方ない」と言われたが、離婚の経緯をよく知らなかった親戚は「しっかりしなさい」という反応をしていた。「離婚はいいこととは思われないんだ」と感じた。でもそうですね、結婚式を挙げてみんなに祝福されて結婚したのに。離婚はある意味それを裏切る行為だったし。みんなの前で誓約した「絶対別れませんよ」っていうことを破ったわけですね。

（m-8・33 歳独身男性）

3-1-3-4. 恋愛と老後（2 回答）

前の彼と別れた時、（私は）30 歳を過ぎていた。「今後、結婚前提で付き合える人に出会えるのか」と思った。その人と別れたことよりも、「ひとりで死ぬんだ」というショックの方が大きかった。

（f-16・37 歳未婚女性）

今の彼女と結婚したら、老後の世話をして欲しい。

(m-19・42歳独身男性)

3-1-4. 「RQ2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか」のまとめ

「RQ2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどのような影響を与えていると認識されているのか」について、以下のことが明らかになった。

3-1-4-1. 育った環境や親からの影響を受ける恋愛観・家族観・夫婦観

研究参加者の中には、両親から受け継いだ恋愛観を持ち続けていたり、見てきた両親の姿を自分の恋愛に反映、または反面教師にしている者がいた。「親」に関する発言が非常に多かったことは、今回のインタビュー調査の大きな特徴でもあった。

35歳未婚女性(f-18)の父親は、彼女の母親に暴力を振るっていたという。彼女は、「暴力というのは完全に治るものではない。自分の父親のように女性に暴力を振るった経験がある男性は、絶対に受け入れられない」と話していた。

そして、自分の父親が浮気をする姿を子供の頃から見続けてきたという女性が2名いた。43歳既婚女性(f-22・子有り)は、「父親の影響で、男は浮気するものだと幼い頃から思っていた」と話していた。そして彼女が結婚した男性も父親と同じように浮気をする人だったが、そのことについて驚いたりショックを受けることもなく、夫の浮気を黙認し続けていたという。また35歳未婚女性(f-21)の父親も浮気をしていた。彼女は、「父親の浮気が原因で家の中がゴタゴタしていたのを、自分が大人になるまで何度も見てきた」と話していた。そして彼女は次第に、「ひとりの男性に尽くすようなことはしない」という考えを持つようになっていた。

また、親が言っていたことを自分自身の恋愛において実践している者もいた。46歳既婚女性(f-23・子有り)は、「経済的に安定することが一番で、女性が男性並みに稼ぐことは難しい。だから経済力のある男性と結婚しなさい」ということを母から聞かされて育った。現在、この女性は結婚し子供もいるが、彼女の生活には母親の教えが反映されているだけでなく、彼女自身も自分の母親と同じように、「安定した生活を維持することが何よりも大切」と考えるようになっていた。

さらに、30-40代となった今でも自分の恋愛に対する親の反応を気にしたり、親にアドバイスを求めたり、さらに親の意見によって自らの行動を変える者もいた。35歳未

婚女性 (f-21) は、自分の恋愛に対する親の反応を気に掛けており、「もし親が恋人との交際に反対した場合、それは自分にとって大事なこと。親の意見を受け入れると思う」と話していた。また離婚を経験した 33 歳独身男性 (m-8) は、「次に結婚することがあれば、親の意見を聞く」と話していた。

一方、自分の親を通して描く「理想の恋愛像」や、親からの影響を受けて構築された「恋愛観」を持っている者もいた。43 歳未婚女性 (f-20) は、「(親が) 喧嘩をしながらも互いに一緒に頑張る姿を見ていたので、両親のようなカップルが理想」と話していた。また、「祖父に対して最期まで愛情を示し続けた祖母の姿」(33 歳未婚女性・f-13) を理想の恋愛として挙げる者もあり、自分の両親や祖父母が時間を掛けて築き上げた関係性が理想となり、自らの恋愛観の形成に影響を与えていたと言える。

このように、研究参加者たちはさまざまな側面から「親」の姿を捉え、そしてそれらを自らの恋愛に結び付けていたと言える。多くの者にとって最初に認識する「男女関係」というのは、自分の父と母の関係だと言えるだろう。自分たちの親がどのようなコミュニケーションを行い、どのような関係であったのか、そして親がどのような恋愛観、異性観、結婚観などを持っていたのかということが、研究参加者たちの恋愛観に大きな影響を与えていたと言える。本研究のインタビューの質問項目には、「親」や「育った環境」などは含まれていなかったが、研究参加者たちはそれらと自分の恋愛や結婚を結び付けており、これは当初予想していないことでもあった。親から影響を受けた恋愛観や恋愛に対する態度は、個人の恋愛や結婚などの基軸となり、その後の恋愛に反映されていた。また 30-40 代になった今でも、自分の恋愛から親を切り離していない者がいることも明らかになった。

3-1-4-2. 婚姻関係における「恋愛」

10 代や 20 代の若者の中には、恋愛を経験したことのない者、情熱的な恋愛をいつか自分もしてみたいと思っている者などもあるだろう。一方、今回の 30-40 代の研究参加者は、「これまでの自らの経験」に基づいた恋愛観や恋愛を語っていた。そして 14 名の既婚者の中には、「結婚と恋愛は別」と発言している者もいたが、それは必ずしも「婚姻関係には恋愛は存在しない」ということを意味しているわけではなかった。

「妻に対して恋愛感情があるかは分からないけど、大好き。一緒にいたら落ち着く。奥さんが傷つくことは言わない」(34 歳既婚男性 m-5・子有り)、「奥さんは理解者であり、本音を話せる」(41 歳既婚男性 m-1・子有り)、「妻は精神的に支えてくれる」(32

歳既婚男性 m-25)、「旦那には気持ちをオープンにぶつける」(45 歳既婚女性 f-3・子有り)、「旦那さんには頼ってしまう」(31 歳既婚女性 f-17) など、配偶者には自分をさらけ出したり、互いに頼り合うという関係性をそれぞれの夫婦が築いていた。相手と仕方なく一緒にいる者、そして子供や生活、また周囲の人々のために自己を犠牲にしてまで関係を継続させている者はいなかった。

さらに 14 名の既婚者たちは、自分の配偶者に対して、「愛」や「恋愛」という言葉を使うことはあまりなかった。結婚前には相手に対して強い恋愛感情を抱き、相手の言動に一喜一憂したり、相手のことを四六時中考えるような時を過ごしたこともあったかもしれない。現在はそのような強く激しい感情ではないにしろ、相手に対する愛や特別な感情を、かたちや表現方法を変えながら相手に示し、そして自分の中に持ち続けているようであった。「旦那は食べ物の好き嫌いが激しいから、それに合わせた料理を毎回作っている」(43 歳既婚女性 f-22・子有り)、「旦那とは一緒に向き合っているわけではないけど、同じ方向を見ている」(46 歳既婚女性 f-23・子有り)、「奥さんは対極な人。知れば知るほどそう思う。彼女の経験によって、彼女という人間が形成されている。彼女には彼女の個性がある」(36 歳既婚男性 m-4・子有り) などの発言は、配偶者に対する愛情や特別な想い、そして相手に対する理解を示していたと言えるだろう。

そして、本研究に参加した既婚者全員が、恋愛を経て結婚していた。恋人同士だった二人が結婚して夫婦に、そして親になり、時間の経過と共に相手に対する激しい感情や情熱が徐々に薄れることがあったとしても (Griffin, 2009; スタンバーグ・ヴァイス、2009; ヘンドリック・ヘンドリック、2000)、相手に対する「愛」がなくなったり、二人の間に「恋愛」という要素が消えてしまうわけではないことを、彼女/彼らの発言が示していたと言える。

3-1-4-3. 日本における家族

日本では、従来から家族に対して重きを置き、知らないうちに家族が基本となることがある (小坂、2017)。人間にとって、最初に属する集団が「家族」であり、そこで社会化を学びヒトから人に成長していく。研究参加者たちからは、未婚・既婚にかかわらず、「家族は一番大事な存在」、「母、弟、犬が一番大事」、「うちは家族仲が良い」など、「家族」に関する発言が多く聞かれた。中でも既婚者は、自分が配偶者と一緒につくった「家族」に加え、自分と配偶者それぞれの両親・兄弟姉妹という「家族」を含

めた「複数の家族」を大切なものであると捉えていた。文化や社会にかかわらず、家族を大切にしている人は多いと考えられるが、その「家族観」は異なるだろう。

日本には、家族の「中」と「外」を分離して考えるような、独自の家族観が存在する。そのような日本の家族の中に、「個」がどのように存在し、さらに家族の中の「個」と「個」の関係性はどのようなものかについて、以下述べていく。

異文化視点から日本の家族を見ると、時としてその姿は異様に映ることがあるという。2016年、著書「家族という病 2」の中で、元NHKアナウンサーで作家の下重暁子氏は、「欧米人は日本の家族が理解できない」という視点から、フランスの家族と比較しながら日本の家族について次のように述べている。

日本で結婚して子供ができると、互いを「お父さん」、「お母さん」、「パパ」、「ママ」と呼び合う夫婦が多い。これは家族が「子供目線」で成り立ち、かつ、夫婦が互いを「個人」としてではなく「役割」で呼び合っていることを示す。また子育てについて、フランスでは女性の約90%が仕事を持っているため、専門のベビーシッターを雇い子供の教育を任せる。そして学校でも教師は勉強しろとうるさく言わないため、勉強したい子は自分から進んで勉強し能力を発揮すればいい。そして落ちこぼれの子に関しては、本人が自分で気付いて何とかしなければ、誰も手を貸してくれることはない。フランスでは、家庭も学校も子供の面倒を見てくれるわけではないため、子供は自分で生きる方法を見つけなければならない。つまり子供は自立せざるを得ないという。一方日本では、特に小・中学校の教員は業務に忙殺されており、フランス人から見れば、他人に任せておけばいいことまで教師が面倒を見る。その上、子供の親たちの目も光っている。

さらに下重(2016)によると、西洋では家庭から一歩外に出て、例えばレストランに行っても小さな子供は入れてもらえないことがあり、「大人は大人」そして「子供は子供」と区別されていることが多い。このような西洋の視点から日本の家族や子育てを見ると、それは自分たちのものとは異次元なものとして映るのかもしれない。実際に日本で大人同士が会話をしているのに、そこに自分の幼い子供が話し掛けてくれば、大人同士の会話を中断して、子供の相手をする光景をよく目にする。だが、欧米の大人たちは、「今、私たちが話をしているの」のように、「大人同士」の時間や場の大切さを子供に諭す。その言葉を耳にした子供は親の元を去り、「子供同士」の世界に戻っていく。

一方、日本的視点からこのフランスでの子育てや親子の関係性を見ると、「なぜ幼い頃から子供を突き放すような育て方をするのか」と感じるかもしれない。もちろん、日本とフランス、どちらが正しいということではないが、文化、社会によって独自の親子

関係や家族のあり方、そして家族メンバー同士の関係性が存在するのである。そして日本の家族というのは、下重（2016）が指摘している通り、その多くは「子供中心」であると言える。だからこそ、日本のような家族システムの中で育つ「子」は、「親」に依存するようになり、さらに「親」も「子」に依存するという関係性が構築される。また小坂（2017）が言うように、日本では家族に対して重きを置く傾向があり、個人のもの考え方の基軸には「家族」がある。だからこそ、日本では家族、特に生まれた時から一緒にいる親に依存すること、そして家族を何よりも優先して考えることはむしろ自然なことなのかもしれない。本研究参加者の36歳未婚女性（f-24）は、現在、母親と無職の弟との3人暮らしで、彼女が家計を支えているという。彼女は、「もし今後、結婚して実家を離れ、自分が夫婦の家賃を払うことになった場合、今の給料では2つの家庭のサポートはできない。それならば『実家』を支えることを選ぶ」と断言していた。母親と弟という「家族」が彼女にとっていかに重要か、そしてその家族を支えることこそが、「自分の役割」であると彼女は認識していた。

日本社会には独自の家族観があり、これは「家族以外」の人々との関係にも影響を与えている。OECD（経済協力開発機構）が2015年に22カ国に対して行った調査によると、日本では友人、同僚、社会団体など、自分の家族以外の人と一緒に過ごすことが「ほとんどない」と答えた人が、他国と比較して群を抜いて高かった。これは、家族以外の人に「社会サポート」を求めることができないという日本人の国民性を示している。社会サポートとは、病気の時に看病してもらい、悩みの相談に乗ってもらい、必要な時にお金を貸してもらい、緊急時に子供を預かってもらうなどの支援を指す。社会サポートには、厚い信頼関係、相互依存の関係性を持つ「他者」が必要となるが（阿部、2011）、日本ではこのような信頼関係を「外」に求めず、「家族内」で解決しようとする傾向が強い。

この「外に助けを求められない」という特徴は、日本で頻繁に起きている家庭内での子供に対する虐待にも関連があるのではないだろうか。昨今の日本において、身体的虐待、性的虐待、心理的虐待、ネグレクトなど、子供が親から虐待を受けているニュースが途絶えることはない。その被害者である子供は乳児、幼児から小学生、中学生、そして高校生も含まれている。子供であったとしてもある程度の年齢であれば、「なぜ自分で警察に通報しないのか」、「なぜ周囲に助けを求めないのか」という疑問を持つ者も少なくないだろう。だがOECD（2015）の調査結果が示すように、日本では、家族以外の誰かに助けを求めるという考えを持つ者は多いとは言えず、さらに子供は、社会サポー

トというものさえ親から教えられていない、またはそれを使うなど言われているのかもしれない。

下重 (2016、p.85) は社会サポートについて、「日本では、助けを外に求めるのが恥ずかしいと思う風潮がある。人に相談するよりひとりで悩みを抱え、家族間だけで解決しようとする。最悪の場合、死を選ぶ。その際、子供を残して逝っては可哀そうだと、一家心中を選ぶ。…〈中略〉…家族は一心同体で、子供は親のもの、あるいは子供が親の面倒を見なければならない。生きていけないなら、いっそみんなで死んでしまおうというものなのだろう」と述べている。日本では、家族の「中」に存在する「個」同士の関係性が極めて強く、それぞれの「個」が依存し合っていると言える。そして、本研究参加者たちからも、「家族は自分にとって重要な存在である」という主旨の発言が数多く聞かれた。彼女/彼らの中には、親からの愛情を感じながら育った者、両親や祖父母に感謝し続けている者などがいた一方、複雑な家庭環境の中で育った者、父と母の姿を通して、恋愛や結婚に対して懐疑的な感情を持ちながら成長した者などもおり、その境遇、そして親や家族に対する想いは実にさまざまであった。だが、どのような親、そしてどのような家庭環境だったかにかかわらず、自分の親や家族が、それぞれの人生観、恋愛観、結婚観、夫婦観の構築に影響を与えていたことは共通していたと言える。

38歳既婚男性 (m-7・子有り) は、幼い頃から「結婚」を意識していたというが、それは彼の育った環境が影響を与えていた。「付き合う先には結婚がある。子供の頃から家族を大切にしていきたいと思っていた。自分には祖父母に大事にしてもらった自負がある。自分は大事にされて愛情をもらったから、自分は自分の人生を生きなければならないと思っている。(昔から) 親孝行のことを考えていた。僕が20歳の時、叔父が亡くなった。人は死ぬし、自分の親もいつかは死ぬ。早く結婚して、親に孫の顔を見せたいし、結婚相手というものを強く意識していた」と話していた。さらにこの男性は、現在二児の父親でもあるが、「子供に何を残していくかが重要」とも話していた。彼は、祖父母、両親、自分、そして子供という「世代」をつないでいくことを大切にしていると同時に、異なる世代の家族が互いに依存し合っている関係性の「中」に生きていると言えるだろう。

そして35歳未婚女性 (f-18) は、男尊女卑の激しい地域で生まれ、それを当たり前のこととして受け入れていた家庭で育ったという。そしてこの女性は、家族の「中」の役割を恋愛関係の「中」にも持ち込んでいることを認識していた。「私の実家では、男の人は黙って座って、女が何でもする。だからと言って女性が男性を尊敬しているわけで

もない。男は女が何でもするものだと思っている。母も祖母も何でもするし、何でもできる。私もそうだから人に頼れない。自分が何でもできるから、恋人にも先回りして何でもしてしまう。お母さんになっちゃう。私はダメ人間製造機」と話していた。さらに彼女は、「恋愛ではいつも我慢する。甘えられない。我がままとか言えない。嫌われるのが嫌。いい人と思われたいし、自分を出せないことが多い」と話していた。彼女は自分の家族の「中」での役割を、恋愛にもおいても持ち込んでいることを認識していた。

本研究参加者たちは、自分がどのような家庭、親の元で育ったのか、そして家族の中でどのような「個」であったのかということが、現在の恋愛や結婚に対する考え方、そして恋愛観の構築に影響を与えていることを認識していたと言える。事実、そのような認識があるからこそ、「相手との関係が本格的になったら、相手と家族との距離感を確かめる」(30歳未婚女性 f-12)、「相手の育ってきた環境や家族のことは気になるので、雑談で探る。うちは家族仲が良いので」(33歳未婚女性 f-13)などの発言がこのインタビューでは数多く聞かれたと言える。自分自身が家族から受けた影響が大きいことを知っているからこそ、「相手」の家庭や家族の存在もまた、重要なものであると捉えていたと考えられる。家族のあり方、自分にとって家族がどのようなものであるか、またどのような関係性を築いているのかということは、日本人の恋愛を理解するにあたり重要な視点であると言える。加えて、個人が自分の家族や親に対し、「どのように」感じながら育ち、今現在の自分の恋愛に「どのような」影響を与えていると認識しているのか、という点も併せて理解する必要があるだろう。

3-1-4-4. 過去に対する認識

インタビュー調査結果から、個人がこれまでの人生において経験してきたこと、即ち個人が持つ「過去」がそれぞれの恋愛観を形成し、現在の恋愛に対する考え方や態度に影響を与えていることが明らかになった。そして以下では、研究参加者たちが具体的に「過去をどのように捉えているのか」について述べていく。

「どのような過去を持っているか」は十人十色である。そして、それぞれの過去は異なるにもかかわらず、研究参加者のほとんどが「過去を経て今がある」、「今までの積み重ねで人間はできている」などの言葉を口にしていた。40歳既婚男性(m-9)には離婚経験がある。この男性は、「過去があるから今がある。学生時代の相手を疑うことを知らないような恋愛から始まり、束縛され、相手を疑い、そして疑わなくていい人を選んで結婚したつもりだったが、うまくいかなかった。前の奥さんとは離婚したが、離婚や

彼女から学んだこともたくさんある。当時の自分には我慢も奥さんへの思いやりも足りなかった。人の心が分かっていなかった。そして2回目の結婚をする時に考えたのは、無償の愛が分かる人、見返りを求めない人。すべての経験はつながっている」と話していた。さらに38歳既婚男性(m-7・子有り)は、「今までの積み重ねで人間はできている。それで自分ができている。親、親友、元彼女など、自分がこれまで付き合ってきた人との経験から学んださまざまな要素によって自分がつくられていることを考えると、考え方や価値観、自分の発想、そして向かっている先などには過去のすべてが関連している」と発言していた。このように、研究参加者の多くが、過去に学んだことや経験してきたことのお陰で今があると考えており、中には過去は資産くらいの値打ちがあると考えている者もいた。もちろん、誰もが素晴らしい過去だけを持っているわけではない。しかし、忘れてしまいたい過去、後悔している過去などであったとしても、それらは貴重な経験として「今」の自分につながっていると考えられていた。

一方、ほとんどの研究参加者が発言していた「過去はその人間の今をつくる」という考えに同意しながらも、異なる視点から過去を捉えている女性もいた。37歳未婚女性(f-16)は、「恋人の過去、特に恋愛関係に関して、(相手が)何人と付き合ったかなどは重要ではない。自分も相手も誰にでも過去はあるから。過去の積み重ねで今があるけど、それに対して一喜一憂する必要はない。過去は過去。相手の過去を受け入れることはしない。私はその人と『今』一緒にいるので、その人の生き立ちにまでさかのぼることには興味がない」と話していた。彼女もまた、「過去が今をつくる」という認識を持っているからこそ、相手の「過去」そのものに注目するのではなく、過去がつくり出した「今」を見ようとしているのではないだろうか。

本研究で引用する「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)もまた、恋愛コンテキストにおける個人が持つ「過去」について注目している。そこでは、「相手が過去に『何』を行ったのか」、そしてその相手の過去が自分にとって「良いもの」や「望ましいもの」なのか、それとも「悪いもの」や「望ましくないもの」なのかという基準により、「過去の価値」が判断されていた。さらに、その「過去」と「現在」を結び付けて考えることはせず、「過去」というあるひとつの時点で起こった出来事、つまり「点」だけに視点が置かれていた。

一方、本研究において、「好きな相手だからその相手の過去に興味がある」という発言をした者はいたが、「相手が具体的に『何』を行ったのか」ということを気にしている者はいなかった。むしろ研究参加者たちは、「相手が過去からどのようなことを学ん

だのか」、「どのように人として変わっていったのか」、そして「過去が現在にどのような影響を与えているのか」など、「過去の経験」と「今」を「線」で結んだ上で、過去から現在を包括的に捉えていたと言える。

3-1-4-5. 過去の経験が現在の恋愛に与える影響

インタビュー調査の結果、研究参加者 26 名のうち、女性ひとりを除いた 25 名は、過去に異性と交際した経験を持っていた。そして彼女/彼らの「恋愛観」は、自らの恋愛経験を含む「過去の経験」から影響を受けており、さらに「過去の経験が今の自分をつくっている」と考えられていた。

46 歳既婚女性 (f-23・子有り) は、結婚前は恋愛にスリルを求め、ゲーム感覚で恋愛を楽しんでいたという。さらに、「若い頃に一通り恋愛を経験したので、もう気が済んだ」と話していた。そして現在、彼女にとって一番大切なのは家族であり、家庭や子供を守ることに視点が移っていた。そして夫について、「(夫は) 気の置けない家族。だけど、全部をさらけ出しているわけでも、すべてを言っているわけでもない」と夫とは一定の距離を保っていた。そしてそれと同時に、「お互いが一緒に向き合っているわけではないけど、同じ方向を見ている」というように、この二人の間には、独自の距離間と関係性が存在していた。

また、過去の恋愛経験からつくられた自分の恋愛観を、「他者と共有することはできない」と回答した 45 歳既婚女性 (f-3・子有り) もいた。彼女は、20 代の頃、浮気性の男性と交際し、相手に翻弄されながらも数年間にわたり関係を続けていた。彼女は初期の段階から恋人の浮気を黙認していたが、その後、彼女自身も他の男性と浮気をするようになった。そのような経験から、「恋愛には倫理的縛りはない」と考えるようになったという。その考えは彼女が結婚してからも変わっておらず、「自分の好きになった人が好きな人」、「自分が夫以外の男性と関係を持つことに対する後ろめたさはない」、「自分の夫が浮気をしても構わない」などと発言している。若い頃の恋愛経験が彼女の恋愛観を大きく変えたというが、「自分の恋愛観を夫に話すことは絶対にない」とも話していた。

この 45 歳既婚女性 (f-3・子有り) も前述の 46 歳既婚女性 (f-23・子有り) も、「過去の恋愛」を人生経験のひとつとして捉えており、それを「自分の夫と共有しない」という点も共通していた。他者と共有することのない自分の過去の経験を糧とし、その後の人生を生きていくことは、人生経験がある程度豊富なこの年代だからこそできることな

のかもしれない。さらにこの女性たちは、自らの過去を包み隠さず夫に語ることはしないが、「過去」と「自分」の間に「夫との関係」を置きながら、日々のコミュニケーションを通し、夫との「現在」の関係を意識的に保とうとしていた。45歳既婚女性（f-3・子有り）は、「他人同士という意識はあるけど、旦那に話す時は自分を見せる。考えも気持ちも含めて。自分は喜怒哀楽が激しいけど、それを旦那さんにオープンにぶつけている。でもあんまり自分だけがぶつけていると相手も困るし、相手もそうじゃないとうまくいかないの、相手も自分にぶつけてくる」と述べていた。そして46歳既婚女性（f-23・子有り）は、「（夫は）突拍子もない私を受け入れてくれている。彼は慎重に慎重を重ねるタイプ。彼には冒険心や決断力はない。それを補っているのは私」と話していた。それぞれが自分の夫と独自のコミュニケーションを行い、構築された二人だけの関係を維持していると言えるだろう。

そして、恋愛観や現在の恋愛に影響を与える過去の経験には、「離婚経験」も含まれる。離婚経験のある33歳独身男性（m-8）は、自らの離婚を「失敗」と捉えていた。彼は、離婚後の自分に対する周囲の人々の態度や接し方から、「世間は離婚をいいものとは思っていない」と感じたという。彼は、「離婚する時は妻と話し合い、離婚は両者が納得した上での決断だった。だが世間がそれを理解してくれることはなかった」と言い、また、「結婚前は、結婚生活は楽しいものであり、家庭は落ち着けるものだと思っていたがそれは違った。だからこそ、今の恋人には『好き』という感情を見せるのではなく、距離を取りながら慎重に付き合うようにしている」と話していた。さらにこの男性は、「この先結婚しても、絶対に離婚はしたくない」とも語っていた。本研究参加者26名の中には離婚経験者が4名いたが、この男性は自身の離婚について最も長く語り、さらに今も離婚をした過去と葛藤している唯一の離婚経験者でもあった。

また35歳未婚女性（f-18）は以前、遠距離恋愛をしていた。しかし相手の男性はこの女性と交際しながら、同時に別の女性とも交際をしていたという。そして男性から、「会いに来られるのが重い」、「存在が重荷」、「もう要らない」などと言われたという。彼女は彼の強さに惹かれて交際を始めたというが、別れる間際になって、相手が開き直り、逃げ腰になる姿を見て失望したと話していた。そして彼女はその頃から、自分が「アセクシャル（無性愛者）」ではないか、と考えるようになったという。アセクシャルとは、恋愛や性的な感情を誰にも抱かない、またはあまり感じないなど、他者に対する性的指向を持たない人を指す（大阪市 市民局ダイバーシティ推進室人権企画課、2018；中西、2017）。昨今、性的少数派である“LGBT（Lesbian/女性同性愛者、Gay/男性同性愛者、

Bisexual/両性愛者、Transgender/性別越境者) ”の中には当てはまらない人々が存在することが知られるようになってきた。性のあり方を、「女」と「男」の2種類や“LGBT”という4種類に分けた時に、自分がどれに当てはまるのか分からない、また決めることができない人々を含めた性的少数派は“LGBTQ”と呼ばれている。“Q”として代表的なものが“Queer (クイア)”と“Questioning (クエスチョニング)”である。Queer は、セクシャル・マイノリティを包括する用語として使用されており、自分の性を何と考えるか、どんな性を好きになるかという性的指向が定まっていない、もしくは性的指向を意図的に定めていない人を指す。そして Questioning は、自分の性別が分からない人や模索中の人を指す (ジョブ レインボー マガジン、2019)。

この35歳未婚女性 (f-18) は、「これまで恋愛は大切だと思っていた。誰かいないと寂しくなるし、人肌恋しいし。周りは結婚しているので焦ったりもしたけど。今は、『私はアセクシャルで、誰も好きになれない人なのかも』と思っている。恋愛にブレーキが掛かっている気がする。昔は誰かと付き合ったら、その後の将来のことも考えていたけど、もうそれもない。今は男性も女性も恋愛対象ではない気がする。人を信用していないと思う。人が怖い気がする」と話していた。遠距離恋愛をしていた恋人から裏切られたというこの女性の経験は、彼女を恋愛から遠ざけるだけではなく、自分の「性」の認識を揺るがす状況も招いていた。そして現在、その恋人と別れて1年半ほど経つというが、彼女は今もなお人を好きになれないという。この女性もまた、前述の離婚経験のある独身男性 (m-8) のように、過去の経験からなかなか前に進めないという状態が続いていた。

本研究から、過去の経験が、個人の恋愛観や現在の恋愛関係に影響を与えていることが明らかになったが、どのようなことが影響を与えていたかについては、実にさまざまであった。そして、それぞれ異なる過去を持つ二人がコミュニケーションを行い、独自の関係を構築し、維持し、そして時にその関係が崩壊するなどの経験を、30-40代である研究参加者の多くが既に経験していたことも明らかとなった。

3-2. RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか

インタビュー・データから得た回答を精査し、コード化およびカテゴリー化を行った結果、「RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか」

について12の回答があった。それらの回答を3つのコード、そして2つのカテゴリーに分類した。

〈表4〉RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか

カテゴリー (回答数)	コード (回答数)
環境の変化 (9)	子供の存在 (7) 生活の変化 (2)
相手の変化 (3)	相手の変化 (3)

3-2-1. 環境の変化 (2コード・9回答)

コード化とカテゴリー化の具体的な手順は以下の通りである。

「子供を産んだ後、旦那さんとの関係性が変わった。子供に関することでは私の方が強くなった」(f-3) や「自分の愛情が子供に移った」(f-22) などの発言は、既婚者において、子供の誕生や子供の存在が二人の関係に影響を与えていた。これらを「子供の存在」というコードにまとめた。

「転職後、生活の時間帯がバラバラになった」(m-1) や「自分が仕事や勉強で出掛けていることを目の当たりにして、彼女が多分、『カチン』ときたんじゃないのかな」(m-4) などの発言は、互いの生活リズムの変化や、二人の時間が減ったことなどが関係に影響を与える要因となっていた。これらを「生活の変化」というコードにまとめた。

これら2つのコードは、人生のステージや生活の変化によってもたらされた変化であり、研究参加者自身が積極的に介入できることではなかったが、二人の関係に影響を与えていたと言える。これらを「環境の変化」というカテゴリーにまとめた。

3-2-1-1. 子供の存在 (7回答)

子供ができた時点で女と男ではなくなった。

(m-14・34歳既婚男性・子有り)

子供が生まれた後くらいから関係が変わってきた。忙しくなった。子供ファーストになった。でも夫婦の信頼度は増えたかなという感じ。

(m-2・39歳既婚男性・子有り)

3-2-1-2. 生活の変化（2 回答）

（妻と）理想の家族をつくるための時間的余裕がなかった。そうなるまでには距離感をうまく近づけないといけなかったと思うが、気持ち的な距離が離れていった。付き合っていた頃は相思相愛であると信じていた。それまでは同じ職場で働いていて、一緒に帰ったりしていた。自分が転職してから、時間帯がバラバラになってしまった。結婚はしているけど休みは合わないし、生活リズムが変わっていった。

（m-1・41 歳既婚男性・子有り）

付き合っている時と結婚してからの奥さんとの関係性は変わった。自分が仕事や勉強会で出掛けていることを目の当たりにして、彼女が多分、「カチン」ときたんじゃないのかな。最近は大いぶん修復したと思うけど。第一子ができた時、僕は仕事であちこちに出回っていた。そこで得た収入を奥さんに還元していたけど、そういうことではなかったみたい。そこで奥さんの気持ちが冷めたみたい。

（m-4・36 歳既婚男性・子有り）

3-2-2. 相手の変化（1 コード・3 回答）

「奥さんのだらしなさが顕著になった」（m-19）や「恋人が何もしなくなって、私が彼を養うようになり、二人の立場が変わっていった」（f-21）などの発言は、関係において、自分ではなく相手の変化したことによって、二人の関係性が変化していたことを示していた。これらを「相手の変化」としてコード化およびカテゴリー化した。

3-2-2-1. 相手の変化（3 回答）

元妻は結婚してから変わった。奥さんのだらしなさが顕著になった。飲み歩くようになった。

（m-19・42 歳独身男性）

（留学先の）韓国では養ってもらったけど、日本では彼が私のヒモになった。そこから私の彼に対するDVがひどくなった。ヒモでも、例えば起業するために勉強するとかならいいけど、ゲームばかりしていた。最初付き合った時は対

等な立場だったけど、別れる前は私が彼を養っていたから、立場が変わっていた。

(f-21・35歳未婚女性)

3-2-3. 「RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか」のまとめ

「RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか」について、以下のことが明らかになった。

3-2-3-1. 恋愛関係の変化

インタビュー調査において、「恋愛関係を変化させるもの」として挙げられたのは、「環境の変化」に関するものが多かった。例えば、生活が変化した、また既婚者においては、子供の誕生によって起こった変化などである。41歳既婚男性(m-1・子有り)は、「転職して生活時間帯が変わった。妻と休みは合わないし、気持ち的な距離が離れていた」と話していた。また、「子供が生まれ、子供中心の生活になった」(38歳既婚男性m-7・子有り、34歳既婚男性m-5・子有り)、「自分の愛情が子供に移った」(43歳既婚女性f-22・子有り)などが挙げられ、生活の変化や子供の誕生によって、二人の直接的なコミュニケーションの頻度が減り、二人の関係性もこれまでとは変わったと認識されていた。

一方、二人の間に起こった生活の変化や時間の経過などが、二人の関係にも影響を与えた結果、「二人の独自の関係性」が構築されたというケースもあった。39歳既婚男性(m-2・子有り)は、「子供が生まれて忙しくなって、子供ファーストになったけど、『子供を守る』という意味での夫婦の信頼度は増えていった」と話していた。また34歳既婚男性(m-5・子有り)は、「妻の尻に敷かれるようになって、自然と色々やらされている。『妻の機嫌が悪くなると僕が動く』ということを妻は理解しているし、うまい具合に調教されてきた」と話していた。このように、恋人だった二人が夫婦に、そして親になるなどの変化を通じて、二人の関係がより強固になり、独自の関係性を築いていることを感じている者もいた。

そして、「相手」が以前と変わってしまったことが原因で、関係に変化がもたらされたという発言もあった。42歳独身男性(m-19)は、離婚して数年経っている。「元妻と結婚する前、彼女が結婚後にアルコール依存になったり、不倫をするとは想像もつかな

かった」と話していた。この男性によると、結婚してから妻の飲酒量が急激に増え、外で飲み歩き、朝まで帰ってこないことも頻繁にあったという。さらに妻は、彼の財布からお金を盗むようになっていた。そしてこの妻にはうつ病の症状も出ており、彼は妻を病院に連れて行ったこともあると話していた。だがそれでも妻は飲酒を続け、さらにパート先で知り合った男性と二人きりで旅行に行くなどの不倫行為をしていることも発覚し、その後、彼は妻に離婚を切り出したという。彼は当時を振り返り、「あの時の自分の経験値ではどうすることもできなかった。周囲にも相談できなかった」と話していた。

35歳未婚女性 (f-21) も、恋人が変化することを経験していた。30歳の時、彼女は韓国に留学し、そこで出会った韓国人男性と交際を始めた。それからしばらくして、彼女が帰国することになり、その恋人も職を求めて来日した。日本で二人は一緒に住んでいたが、その恋人は仕事を探すわけでもなく、いつも家においてゲームばかりしていたという。この女性は、「彼が仕事を探したり、起業するために勉強をしているのであれば、ある程度はサポートするのも構わないと思っていたけど、いつも家において何もしない彼に腹が立った」と話していた。

研究参加者たちが経験した「変化」には共通点がある。彼女/彼らが経験していた変化とは、環境や生活の変化、そして相手によってもたらされたなどの「つくられた変化」だったという点である。生活の変化によって、夫婦がすれ違い状態であることを感じていた者、子供が産まれたことで関係性に変化があったと感じていた者、結婚後に妻が変わってしまった者、交際中に恋人の態度や行動が変わってしまった者など、研究参加者たちは、「つくられた変化」を目の当たりにしていた。そしてその「つくられた」または「起こされた」変化に対して、研究参加者たちは何も感じなかったわけでも、何もしなかったわけでもない。だが、「相手自身を変える」ということを試みた者はいなかった。

例えば、来日した恋人が職探しもせず、ゲームばかりしていたと話していた35歳未婚女性 (f-21) は、「腹が立った」という感情を顕わにしており、その後、恋人を家から追い出し、別れている。しかし、この女性は「追い出す」、「別れる」のように彼の変化に反応し、行動は起こしたものの、職探しもせず自立できない恋人そのものを「変えよう」とはしなかった。また、妻がアルコール依存になったという42歳独身男性 (m-19) は、妻の変化にどう対処すればいいのか分からず、そして周囲に相談することもできず、妻を病院に連れて行くことしかできなかったと話していた。だが、妻がアルコールを断

つことはなく、その後、彼は妻に離婚を切り出している。彼は妻の病状を回復させたり、二人が置かれた状況から抜け出すための行動を起こしたが、その目的は妻を根本的に「変えよう」とするものではなかったと言える。

本研究において、相手と親密な関係で、しかも恋愛関係を構築するような間柄であったとしても、「相手自身」や「相手の存在」を変えようとする者はいなかった。アメリカの社会学者であるヘンドリック・ヘンドリック（1998、p.155）の、「誰かがあなたを愛した時、あなたはその人に対して影響力を持ち、その人をコントロールできるようになる」という主張は、今回の研究参加者たちには当てはまらなかった。「相手をコントロールできる」と考えられている社会では、「人を変化させる」ということに対し、疑問を持つ者はあまりいないのかもしれない。一方日本では、環境や人が変化していくなど、変化を「受動的」に感じ取ることがあったとしても、その変化を「能動的」に起こそうとはしない。少なくとも本研究において、人々が経験した「変化」とは、環境や相手によってもたらされたものであった。そして彼女/彼らにとって、相手や関係というのは、自分が積極的に働き掛けたり、変化させる対象ではなかった。

日本では、相手、そして関係を「変化させる」ということは、どのように捉えられているのだろうか。次項で考察を進めて行く。

3-2-3-2. 「変化させること」に対する認識

恋愛関係における「変化」に関して、インタビュー調査を通して明らかになったことが2つある。恋愛関係に「変化」が起きていたことは認められたが、その変化とは、環境そして他者という「本人以外」の要因が起こしたものであった。つまり、研究参加者たちは恋愛関係において、自発的に変化を起こそうとはしていなかった。

そしてもうひとつは、研究参加者たちは「相手を変化させよう」、「関係を変化させよう」など、相手や関係を「変化させる対象」とは捉えていなかったという点である。

そこで、研究参加者が「自分が対象を変化させる」ということをどのように認識しているかを明らかにすべく、「自分がパートナーを変える」、「自分が関係を変える」という点について質問をした。主な回答は以下の通りである。

〈表5〉「パートナー」を変えることに対する認識

「相手を変えることはできない」

(f-17・31歳既婚女性、f-18・35歳未婚女性、f-20・43歳未婚女性)

「自分のパートナーは『変える』対象ではない。相手を変えることは、自分の中では負のイメージだし、相手を尊重していない気がする」 (m-2・39歳既婚男性・子有り)
「相手の本質的なところが変わると、その人がその人ではなくなる」 (m-6・37歳既婚男性・子有り)
「相手がこだわっているところが、相手の『核』となる部分と言える。そこは変えるべきではないし、相手を変えるということは、一番重要な『核』を変えることになる」 (m-4・36歳既婚男性・子有り)
「相手の性格的なものは変えたくない。性格も含めた彼女を好きになって結婚した」 (m-5・34歳既婚男性・子有り)
「相手をそのまま受け入れる」 (m-10・48歳未婚男性)

「あなたは相手を変えられると思うか」という質問に対し、研究参加者は自分の恋人、配偶者、そして現在恋人がいない者は過去の相手を思い返したり、自分の頭の中にある恋人を思い浮かべていたと考えられる。そしてこの質問に対して、ほぼ全員から「相手を変えたくない」、「相手は変えられない」という言葉が返ってきた。このような回答が出た理由のひとつとして、相手が自分の恋人や配偶者という親しい間柄であったとしても、恋人や配偶者を変えることは「すべきことではない」と同時に、「相手に対する敬いの気持ちを欠いた行為」という認識があったと考えられる。39歳既婚男性（m-2・子有り）の「自分のパートナーは『変える』対象ではない。相手を変えることは自分の中では負のイメージだし、相手を尊重していない気がする」という発言が、他の研究参加者の気持ちを代弁していたのではないだろうか。

一方、欧米では自分自身が思考、行動、動機を中心であり、他者と自分を切り離して考える傾向が強く（Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama, 2004）、個人の意志や努力が、環境や周囲の状況を自分の都合に合わせて変えることができる「する」文化であると捉えられている（宮原、2000）。日本人を対象とした本研究では、他者をコントロールする対象として捉えている欧米（ヘンドリック・ヘンドリック、1998）とは異なる傾向が見られた。今回の調査結果、そして日本および欧米社会における「自己観」などに関するこれまでの先行研究を併せて考えると、日本と欧米では、社会における「自己」と「他者」に対する認識そのものが異なると言える。そしてそれらに加え、「関係」について

も、日本には独自の視点が存在することが、これまで多くの研究者によって示されてきた（例：Markus & Kitayama, 1991; 土居、1971; 浜口、1982; 宮原、2000）。本研究では前述の「『パートナー』を変えることに対する認識」に加え、「『恋愛関係』を変えることに対する認識」に関するインタビュー調査を行った。主な回答は以下の通りである。

〈表6〉「恋愛関係」を変えることに対する認識

「関係なんて変えられるものではない」 (m-2・39歳既婚男性・子有り)
「(関係を) そもそも変えようという意識がない」 (m-6・37歳既婚男性・子有り)
「恋愛関係を変えるなんて想像もつかない」 (f-26・36歳未婚女性)

「『恋愛関係』を変えることに対する認識」に対する回答は、ほぼひとつに絞られていた。それは、「関係は変えられるものではない」というものだった。36歳未婚女性 (f-26) が、「恋愛関係を変えるなんて想像もつかない」と発言していたが、これは研究参加者の多くが持っていた率直な気持ちだったと言える。日本において「関係」とは、「ある」ものであり、変えようとしたり、コントロールする対象ではないと考えられている（宮原、2000）。浜口（1996）は、日本人にとって対人関係とは、自分と切り離せない身体の一部のようなものであり、日本人は人と人の間に自分の存在を位置付け、自己を意識することが多い。従って、そこにある「関係性」だけを取り出して操作しようなどと日本人は考えないだろうと述べている。つまり、「自分の存在」とは「相手の存在」があることで確認できるものである。さらに人間関係というのは自分自身の一部であるため、そこから「関係性」を別のものとして認識するという発想自体、日本人は持っていないのだろう。だからこそ研究参加者たちもまた、「関係を変える」という意識を持っていなかったと考えられる。

そして、「相手を変えられるか」、「恋愛関係を変えられるか」という質問に対して、「相手も関係も変えられない」と回答した者の中には、「変えられるのは自分」と考えている者がいた。先の「『パートナー』を変えることに対する認識」と「『恋愛関係』を変えることに対する認識」のインタビュー結果を受け、「変えられる対象は何か」という質問を追加で行った。主な回答は以下の通りである。

〈表7〉 変えられる対象

「変えられるのは自分だけ」 (m-9・40歳既婚男性)
「自分が変わるしかない」 (f-13・33歳未婚女性)
「自分の感じ方や解釈を変える」 (m-4・36歳既婚男性・子有り)

研究参加者たちは、「変えられる」対象は「自分自身」だけであると認識しており、自分にとって親密な他者である恋人や配偶者、そして二人の関係であっても、それは「変えられる」対象ではないと捉えていた。中には、「大きな出来事がない限り、もしくはどちらかが劇的に変わらない限り（関係が変わるのは）無理だと思う」（46歳既婚女性 f-23・子有り）という意見も存在したが、自分が主導したり、意図的に関係を変えたり、コントロールするという視点に基づいた発言は存在しなかった。このことに関して宮原（2000）によると、欧米の文化が、個人の意志や努力で環境や周囲の状況を自分の都合に合わせて変えていくことができる「する」文化であると考えられている一方、日本は「なる」的発想で動いていると位置付けられている。そして日本のような「ある」、「なる」文化では、人間関係も「うまくいかせる」のではなく、「何となくうまくいく」、「どうにかなる」ものであり、自分たちが能動的に何かを行う対象とは捉えられていない。

宮原（2000）の他にも Kitayama（2000）や Uchida ら（2004）が日本人の視点から、コントロールする対象や人間関係の捉え方について、次のように述べている。Kitayama（2000, p.1114）は、「日本では歴史的に個人は相互依存し合っており、個人は社会関係の中に存在する。個人は社会関係を取り囲む一部であり、さらに行動とは相互依存している相手に対する返答である。つまり、社会行動とは関係に沿ったものであり、個人は自分を周囲に適応させられるように自分をコントロールし、自分の考えや行動をそれに合わせていく」と述べている。また Uchida ら（2004）は、日本を含む東アジアでは、自己とは他者とつながりを持ち、互いに依存し合う関係の中にある。さらに人間関係において、個人と他者との境界はぼやけていると述べている。

日本人を「文化」という視点から追究している Kitayama（2000）、Markus & Kitayama（1991）、Uchida ら（2004）、宮原（2000）をはじめとする研究者たちの主張、さらには約40-50年前に既に語られていた土居（1971）の「甘え」や浜口（1982）の「間人主義」

などの「日本人論」は、現代社会にも通用する、日本人の根幹となる「人間関係」に対する考えや行動を説明している。「日本人が『関係』そのものに価値を置いている」という点は、過去も現在も変わらないと言えるだろう。このように、先行研究や本研究のインタビュー調査結果からも、日本人は関係そのものに重きを置いており、日本人と「関係」を切り離して考えることはできないと言える。一方、昨今の日本において自分と相手の中に「人間関係」が存在しない、または極めて薄い「関係性」しか存在しないことが、この時代を象徴するような、新たな社会的現象を生み出している。言い換えれば、それは日本人にとって重要な「人間関係」が存在しないからこそ見られる現象であると捉えることもできる。

昨今、「退職代行サービス」という新しい形態のビジネスが注目されている。これは退職希望者が代行業者に料金を支払い、代行業者が依頼者の勤務先に退職する旨を伝えるというサービスである。アルバイト、新卒で入社して数日で退職を希望する者、さらには管理職など、利用者の年代やキャリアはさまざまであるという（朝日新聞、2019年5月20日夕刊）。このサービスを利用する理由の多くが「上司が怖い」、「退職届が受理されない可能性がある」、「不当な引き留めを受けたくない」などであるという。退職の意を自分で直接伝えることによって受ける可能性のある精神的苦痛を見越した上で、代行業者に委託するのである。対面でのコミュニケーションを避け、このようなサービスを使う背景のひとつには、職場での「人間関係」の希薄さがあると言えるだろう。

そして、人間関係の希薄さ、もしくは人間関係が存在しないということが最悪の場合、人を死に追い詰める可能性を示唆する出来事も起こっている。2015年12月、大手広告代理店に勤務する当時24歳の女性が自らの命を絶った（日本経済新聞 電子版、2016年10月7日）。自殺の原因は、長時間労働が常態化していたことや、パワー・ハラスメントを受けていたことなどとされている。彼女の死後、組織の責任者は引責辞任し、「過労死等防止対策推進法」が制定されるなどしたが、彼女が戻って来ることはない。

過労を苦しめた自殺というのは、日本社会ではさほど珍しいことではないが、これは欧米諸国で頻繁に起こることではないだろう。「自己実現」のために自分の意思で仕事をすることはあっても、「自己犠牲」をしてまで組織のため、そして上司に言われるがまま仕事をするのではないと考えられる。この亡くなった女性に関して、長時間労働を強いられ、早朝に帰宅する生活が続いていたなど、労働実態の過酷さばかりが報道されていたが、それ以外の彼女の仕事やプライベートでの行動、例えば、彼女が社内外の人々とどのような「コミュニケーション」を行っていたか、上司や同僚、そして友人とどの

ような「関係」であったのかなどについて、報じられることはほとんどなかった。彼女にも同僚や友人がいたはずであり、さらにこの女性は Twitter（140 字以内の短い文章をオンライン上に投稿できるサービス）で仕事に関する発信もしており、それを見ていた人もいたはずである。社内、社外、そして Twitter で、他者とどのようなコミュニケーションが行われていたのだろうか、そこには信頼できる相手との関係は存在していなかったのだろうか、彼女は誰かに助けを求めていなかったのだろうか、そして彼女はなぜ自ら命を絶たなければならなかったのかなどについて、今となっては誰も知ることはできない。ただ、「個人と会社」、「個人と上司・同僚」、「個人と信頼できる人間」、「個人と SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）上にいる人間」など、ひとりの人間とその間に入る「関係」がどのようなものであるかを理解することによって、食い止められる悲劇は、この日本にはたくさん存在するのかもしれない。

本項では、恋愛関係の変化、パートナーや人間関係を変化させることがどのように認識されているのか、さらに日本での人間関係のあり方について考察を行った。日本における人間関係には、相互依存という特徴があり、人は人間関係自体に重きを置く。さらに、日本人にとって人間関係とは人が手を加えたり、そのかたちを変える対象ではない。だからこそ、人間関係がつくられていく過程において、人々がどのようなコミュニケーションを行うか、ということが重要だと言える。日本人を理解し、そして説明する上で、この「人間関係」という視点は、今後もコミュニケーション研究において最も重要な視点のひとつであり続けると言えるであろう。

第 4 章 〈研究 3〉 現代日本人の自己観

1. 自己観と人間関係

本研究において、30-40 代の男女 26 名にインタビュー調査を行ったところ、人間関係に重きを置く点は、これまでの日本人に関する先行研究結果と一致していた。一方、日本人は相互依存的自己観の傾向が強いとする Markus & Kitayama（1991）の主張が反映された発言も存在したが、それと同時に独立的自己観に関する発言も多かった。このことから、研究参加者の「個」に注目し、その発言と自己観の両面から考察を行うことで、日本社会における恋愛関係や恋愛観の特徴がより顕著に表れると考え、研究参加者の個々の「自己観」に注目した。

日本人と欧米人（特にアメリカ人）との「自己観」や「個」に対する考え方の違いについて、これまで繰り返し比較および議論が行われてきた（例：Kitayama, 2000; Kitayama et al., 2000; Markus & Kitayama, 1991; Morling, Kitayama, & Miyamoto, 2002; Rothbaum et al., 2000）。Markus & Kitayama（1991）によると、欧米人は独立的自己観を持ち、個人と周囲の人間との境界が明確であり、自らを他者から切り離れた独自の存在であると認識している。一方、日本を含む東アジアの人々は、相互依存的自己観を持っており、周囲の人間と自己の境界が曖昧で、自分の存在を周囲の人間関係の一部であると捉える傾向が強い。

そして、自己観はコミュニケーションにおいて頻繁に表れるため（Morling et al., 2002）、コミュニケーションを通して構築される「恋愛関係」にも自己観が反映されている。例えば、欧米では恋愛相手に対する愛情の土台は、信頼、希望、忠誠などであると考えられているため、それらの土台がなくなった場合、二人の関係は解消へ向かうことが多い。一方日本では、人は周囲とうまくやっていくこと、義務を果たすこと、関係の一部になることが何より重要で、個人の意見、能力、特質など、個人に関することは二の次だとされてきた（Rothbaum et al., 2000）。日本では相互依存的自己観に基づいた社会的関係が重んじられているため、二人の恋愛関係であっても、それは社会や周囲と切り離すことはできないと言えるだろう。

さらに自己観は、人間関係において「コントロールする対象が誰なのか」ということに違いをもたらすことが分かっている。欧米では、自分自身が主体となり、他者に影響を与え、相手や周囲を変化させることができると考えられている（Kitayama, 2000）。「個が主体である」ということが前提であるアメリカ社会では、周囲の状況、そして相手や二人の関係でさえ、自分の意思によってどうにかできる、つまりコントロールできると考えられているのだろう。一方、日本では相互依存的自己観が根付いており（Markus & Kitayama, 1991）、「個」は社会関係を取り囲む一部である。そして日本における行動とは、相互依存している相手に対する返答であると考えられており、人は自分の考えや行動を周囲に合わせていこうとするため、相手ではなく、自分自身をコントロールしようとする（Kitayama, 2000）。これらのことから、コミュニケーション研究を行うにあたり、研究対象となる人物が「どのような自己観を持っているか」を理解することは、重要な視点のひとつであると考えられる。

さらに、あらゆる社会や文化において、共通認識のように捉えられている「幸せ」という概念にも（Oishi & Diener, 2001; Uchida et al., 2004）、自己観や個に対する考え方が

反映されている。Kitayama ら (2000) の「幸福感に関する調査」によると、日本で人々が幸せを感じていたのは、「社会的調和」が保たれている状態であった。一方、アメリカでは「自己尊重」や「自己実現」を感じられる状態において、人々は幸せを感じていた。そして、文化によって解釈が異なるこの「幸せ」という概念が、時に人間関係を壊すこともある。Uchida ら (2004) によると、日本における幸せとは、「相互の共感」や「協力」などが根底にあるため、欧米で重んじられている「個人の成功」を日本社会において強調することは、他者に嫉妬心を植え付け、妬みをかうことにつながるという。欧米で幸せだと感じる事が日本では受け入れられず、そして日本で幸せだと感じる事が欧米では受け入れられないということなのだろう。このことから、どのような「自己観」を持っているのか、「個」についてどのような考え方を持っているのか、そしてどのような「社会」で生きているのかということは、その個人の生き方、日々の行動、そして他者とのコミュニケーションと密接にかかわっていると考えられる。自己観はコミュニケーションを通して形成され、そしてその自己観がコミュニケーションの特徴に影響を与えるため、「自己観」と「コミュニケーション」は共依存の関係であると言えるだろう。

1996年 Kim らは、「文化的」ではなく「個人的」な視点から、自己観を4種類に分類した。「独立的自己観」と「相互依存的自己観」の2種類、そして個人の中に「独立的自己観」と「相互依存的自己観」の両方を持つ「2文化型自己観 (bicultural type)」、さらにどちらの文化の自己観の特徴もあまり持たない「周辺化型自己観 (marginal type)」を加えた「4つの自己観 (four-type model of self-construal)」を提唱した。そして Kim ら (1996) は、「異文化間の会話に対する適応と自己観に関する調査」を日本、韓国、ハワイ、アメリカ本土の大学生に行った。その結果、異文化間の会話に最も適応できたのは「2文化型自己観」を持つ者で、次いで「相互依存的自己観」、「独立的自己観」、そして最も適応し難かったのは、両方の自己観の特徴を持たない「周辺化型自己観」であった。

この Kim ら (1996) の研究は、研究対象者の「文化的」視点からではなく、「個人的」視点に基づいている。言い換えると、それぞれの研究対象者がどの文化の出身かという「文化的基盤」に基づくのではなく、「個人が持つ自己観」の視点から研究が行われている。これまでの「自己観」に関する研究の多くは、「文化的」視点に基づいており、例えば、「日本人は相互依存的自己観を持つため〇〇である」、「独立的自己観を持つアメリカ社会では△△という傾向が強い」のような結果が導かれていた。しかし Kim ら

(1996) が、「個人的」視点に基づく自己観の考察を行ったことで、「相互依存的自己観を持つ者は●●である」、「▲▲という傾向は独立的自己観を持つ者に見られる」など、「個」の自己観に特化したコミュニケーション研究の可能性が示されたと言える。

そして Yamaguchi, Kim, Oshio, & Akutsu (2016) も、Kim ら (1996) と同じく 4 つの自己観の視点から研究を行っている。Yamaguchi ら (2016) は、「自己観の違いによって健康と幸福に対する認識にどれくらいの差があるのか」について、日本人とアメリカ人の中年層を対象に調査を実施した。その結果、どちらの文化においても、「2文化型自己観」を持つ個人は、自分は健康であり、かつ、幸福であると感じていた。

この「2文化型自己観」の傾向が強い者は、楽観的で幸福を感じやすく、常に感謝の念を抱き、人生における満足感が高いことに加え、他者とのかかわりの中で強い相互的な関係を維持している。さらにこの自己観を持つ者は、さまざまな状況において、自分の感情をコントロールすることができ、自らの感情を周囲と共存させながら、他者との関係を築いていく能力に長けているという特徴を持つ。そして、「独立的自己観」の傾向が強い者は、他の 3 つのグループに比べ、自尊心が強く、自己肯定感を高める行動を起こそうとする (Yamaguchi et al., 2016)。従ってこの自己観を持つ者は、自分の意思や感情を貫く傾向が強い一方、周囲と協調することは得意ではないと考えられている (Diener & Diener, 1995)。また、「相互依存的自己観」の傾向が強い者は、社会的不安を抱えることが多いが (Markus & Kitayama, 1991)、他者との関係を円滑にしたり、周囲を調整する能力を発揮するなどの協調性がある (Jochen & Lerner, 1999)。最後に、「周辺化型自己観」を持つ者は、物事を否定的に捉えがちであり、周囲とのつながりを自ら積極的に持とうとしない傾向がある (Yamaguchi et al., 2016)。

そして「文化的」レベルから自己観を調査した結果、Yamaguchi ら (2016) の研究対象だった、アメリカ人と日本人の中年層が持つ自己観はそれぞれ異なっていた。アメリカでは多い順に「2文化型自己観」(46.3%)、「周辺化型自己観」(22.3%)、「独立的自己観」(17.1%)、そして「相互依存的自己観」(14.3%)だった。一方日本では、「周辺化型自己観」(52.6%)、「2文化型自己観」(21%)、そして「独立的自己観」と「相互依存的自己観」がそれぞれ 13.2%だった。この Yamaguchi ら (2016) の調査結果は、Kitayama (2000) や Markus & Kitayama (1991) が主張していた、欧米では「独立的自己観」が、そして日本では「相互依存的自己観」の傾向が強いというものとは異なっていた。さらに Yamaguchi ら (2016) の研究対象であった日本人中年層の半数以上が、「周辺化型自己観」だった。だがこの周辺化型自己観の特徴は、他の 3 つの自己観と比

べ分かっていることは少ない。従って周辺化型自己観、そして他の3の自己観の特徴やコミュニケーションについても、今後、引き続き注目していく必要があると言えるだろう。

これまで「文化」と「自己観」を結び付けた上で、コミュニケーションや人間関係が論じられることが多かったが、同一文化内における「個人的」視点に基づいた自己観に関する研究が行われるようになったことは、「個」の視点に基づいたコミュニケーション研究が、今後さらに発展していくことを示したと言える。本研究では、「文化的」レベルと「個人的」レベル両方の視点から自己観の特徴を踏まえた上で、日本人のコミュニケーションを追究する。

2. 日本の視点に基づいたコミュニケーション理論

これまでコミュニケーション研究の多くは、欧米主導で行われてきたが、「日本人」に関して「日本人研究者」によって明らかにされていることもある。宮原（2000）によると、欧米の文化では個人が周囲の状況を変えていくことができる「する」文化であると考えられている一方、日本は「なる」的発想で動いていると位置付けられている。そして日本のような「ある」、「なる」文化では、人間関係も「うまくいさせる」のではなく、「何となくうまくいく」、「どうにかなる」ものであり、自分たちが能動的に何かを行う対象とは捉えられていない。この宮原（2000）の主張を基に考えると、人間が自分の意思で天気を変えることができないように、日本において人間関係というものも、人がコントロールできるものではなく、天気のようにただ見守るものだと認識されてきたのではないだろうか。さらに人間関係が自然消滅することが珍しいことではないように、人が関係に対して積極的に働き掛けなくても、人間関係は「なるようになってきた」と捉えることができるだろう。

また、日本において「自文化」研究を行った浜口（1982）は、日本人の「個」を「間人（かんじん）主義」という観点から説明した。浜口（1982）は、欧米の強固な自我意識を前提とする「個人主義」に対して、日本社会で育ち、その影響を受けている人々の自己観を「間人主義」と名付けた。間人主義とは、「人と人との間柄」、「個と全体との関係」を重視する人間観である。そしてこの間人主義は、人と人との不可分離な絆の一体感に基づいており、「社会生活はひとりでは営めない以上、相互の扶助が人間の本態である」、「自分の行動に相手もきつとうまく応えてくれるはずである」、「相互信頼の上に成り立つ関係自体に値打ちがあり、間柄の持続が無条件で望まれる」という考えに基

づいている。日本人は欧米的な「個人」という人間観よりも、他者との「間」に自らの存在を見出すのである（浜口、1982）。欧米とアジアを比較する研究では、欧米を「個人主義」、アジアを「集団主義」として扱うことが多かったが、「間人主義」という日本社会で育ち、その影響を強く受けている人々の独自の人間観が、日本人研究者によって提唱されたことは、「自文化研究」を行うことの重要性を示したと言えるだろう。そして現在、浜口（1982）が間人主義を提唱してから40年近く経過している。この間人主義は、日本人が人間関係をどこに置くのか、どこに位置付けているのかを示している。さらに浜口（1982、p.151）は、「関係のあり方」について次のように述べている。『『個人主義』と『間人主義』は、単に西洋人と東洋人（日本人）の対人関係のあり様を対比するための概念にとどまらず、むしろ、両者のそれぞれ価値付けられた人間存在形態、もしくは、対人連関の様態を指し示す用語なのである』。この間人主義は、日本人の人間関係に対する考え方を「文化的」に説明している。同一文化に在るということだけで、その中に在る人々を一括りにすることはできないが、日本において「関係をどのように位置付けるのか」ということに関し、「間人主義」に対する異論や、それに代わるものが散見されるという状況になっていないことから、「人と人との間柄」や「個と全体との関係」を重視する人間観は、少なくとも40年前から大きく変化していないと言える。これまであまり盛んに行われてこなかった日本人研究だが、「日本的自己観」や「間人主義」は、今現在、「日本人」について分かっている数少ない、かつ、重要な観点であると言えるだろう。

現段階において、「日本人」に関する研究は存在するが、その数は多いとは言えず、実際にこれまで行われたコミュニケーション研究のほとんどは、「欧米視点」であることは先に述べた通りである。中西（2011、p.22）は、「コミュニケーション学が欧米（特にアメリカ）を中心に発展してきたことにより、対人コミュニケーションの研究は、欧米人が考える望ましい対人コミュニケーションのあり方についての価値観や考え方が基準となってきた」と主張している。そして浜口（1982）もまた、これまで西洋起源の概念や理論が、無条件で日本において採択され使用されてきたが、それらは文化的に拘束されたものであり、必ずしも普遍性を持っていないと主張している。中西（2011）、浜口（1982）、宮原（2000）などの日本人研究者が主張するように、日本と欧米では、人はそれぞれ異なる価値観を持ち、独自のコミュニケーションを行っているにもかかわらず、日本人独自のコミュニケーションや人間関係を説明する理論や概念はほとんど存在していない。

さらに Kim (2002) は、「欧米で行われた研究を他の文化圏の研究にそのまま適用することは、欧米で主張されていることが、他の文化圏にも無条件で当てはまると考えられているのではないか」と疑問を呈している。また、Rothbaum ら (2000) は、「文化」とはそれぞれの価値、伝統、行動などを表しているため、その文化を取り囲むコンテキストを考慮しない限り、文化を理解することは不可能であると述べている。このように、日本、韓国、アメリカなど、異なる文化的背景を持つコミュニケーション研究者たちによって、研究とは文化的および社会的視点に基づいた考察の上に成り立つべきであることの重要性が主張されている。

そして欧米主導で行われてきた研究に対して、「欧米で導かれた理論や主張を、欧米以外の文化やコミュニケーションに適用できるのだろうか」ということはもちろん、「文化や社会に応じた理論や概念を構築するにあたり、それがどのようなものであるべきか」という点についても、コミュニケーション研究者は向き合う必要があるのではないだろうか。さらにコミュニケーションや人間関係を研究するにあたり、人々の価値観、考え方、環境、そして人間関係やコミュニケーションのあり方が常に変化している中、「過去」において妥当であると考えられていたことが、「現代」にも適用できるのかという視点もまた、研究者は持ち続ける必要があると言えるだろう。

3. 研究

3-1. 研究方法・分析方法

本研究のインタビュー調査から収集されたデータには、「自己観」が反映された恋愛に関する考え方が多く含まれており、「自己観」と「恋愛」には関連性があることが示されていた。そしてこの自己観について、これまで多くの研究者たちが「文化的」視点に基づき、日本では「相互依存的自己観」の傾向が強いと主張してきた（例：Kitayama, 2000; Kitayama et al., 2000; Markus & Kitayama, 1991; Morling et al., 2002; Uchida et al., 2004）。この主張が示すように、本研究参加者の発言には相互依存的自己観の傾向が強いものも含まれていたが、欧米の自己観であると考えられている独立的自己観に関連する発言も多く含まれていた。このことから、日本社会で育ち日本文化の影響を受けているということが共通していたとしても、自己観は個々によって異なる可能性がある。さらに、「個人の自己観と恋愛に対する考え方は関連している」という点をさらに追究すべく、研究

参加者の持つ「自己観」について追加調査の必要性があると考えた。自己観に関する質問票調査の概要は以下の通りである。

3-2. 研究対象者

自己観に関する研究対象者は、第2章 (p.20-21) と同様である。

4. 調査結果

4-1. 自己観の分類

本研究では、文化心理学者 Singelis (1994) の「自己観 (相互依存的自己観・独立的自己観) に関する 30 項目」を基に、インタビューに参加した 26 名に追加で質問票調査を行った。この Singelis (1994) の質問票は、欧米の研究で最も一般的に用いられているものであるが、北米文化の特質に規定され、日本人には不適切な項目 (例: 相手が年上でもファーストネームで呼ぶ) などを含むため、「欧米とアジアの文化間での妥当性の認識がなされていないのではないかと Matsumoto (1999) が指摘している。

Kim ら (1996) は日本、韓国、ハワイ、アメリカ本土の大学生に対して自己観に関する調査を行う際、Singelis (1994) の質問票項目を、各文化に合わせた適切な項目に修正している。例えば Singelis (1994) の質問票項目では「相手が年上でもファーストネームで呼ぶ」とされていたものを、「初対面の相手が自分よりかなり年上であっても、私は相手とオープンに話をする事ができる」にすることで、日本文化における妥当性を高めている。本研究では、Kim ら (1996) の修正版「自己観に関する 30 項目」を使用し、調査を実施した。質問 30 項目のうち、15 項目が「相互依存的自己観」に関する質問 (例: 自分が属している組織のためなら自分の利益を犠牲にしても構わない、進路や職業について考える時は親の意見を考慮すべきだと思う)、そして「独立的自己観」に関する質問 (例: あらゆる面において他の人たちとは違った個性的な存在でいるのが好きだ、職場の会議で自分の意見を率直に述べる事ができる) などである。

30 の質問項目に対して、7 段階 (とてもそう思う、そう思う、ややそう思う、どちらでもない、あまりそう思わない、そう思わない、全くそう思わない) のうち、研究参加者は自分の意見に最も近いものをひとつ選んだ。その後、筆者が集計作業を次の通り行った。まず、「どちらでもない」を基点 4 点とし、「とてもそう思う」を 7 点、「全くそう思わない」を 1 点として回答の点数を集計した。そして独立的自己観に関する 15 問の合計点 (15-105 点) と、相互依存的自己観に関する 15 問の合計点 (15-105 点) を比

較し、合計点が高い方の自己観を「その個人の傾向を示す自己観」とした。集計結果を以下、「独立的自己観 男性」、「相互依存的自己観 男性」、「独立的自己観 女性」、「相互依存的自己観 女性」の順に並べている。

〈表 8〉 独立的自己観 男性

独立的自己観を表す質問	男性													
	1	2	4	5	6	7	8	9	10	14	15	19	25	
1. 私はあらゆる点で、他の人たちとは違った、個性的な存在でいるのが好きだ。	2	5	5	5	4	6	5	7	5	7	5	5	5	
2. 初対面の相手が自分よりかなり年上であっても、私は相手とオープンに話することができる。	6	5	4	5	2	6	6	7	2	6	3	1	2	
5. 周囲がどう思おうと、私は自分が思ったことをやる。	7	5	5	6	4	5	6	7	6	6	2	3	3	
7. 自立した一人の人間として行動することは大切なことである。	7	6	7	7	5	6	7	7	7	7	6	5	6	
9. 誤解を招くくらいなら、はっきりと「いいえ」と言う方がいい。	6	5	5	4	4	5	7	7	6	6	5	3	5	
10. 豊かな想像力を持つことは、私にとって大切なことである。	7	7	7	7	6	6	7	7	6	7	6	3	6	
13. 初対面の人でも、私は単刀直入で率直でありたいと思う。	3	5	6	6	3	5	5	7	6	6	5	1	4	
15. 私は自分ひとりだけが誉められたり、賞をもらっても気がひけることはない。	5	4	3	6	4	2	3	4	2	3	3	7	3	
18. 職場の会議において、私は自分の意見を率直に述べることができる。	6	5	5	5	4	6	6	7	6	6	5	2	3	
20. 誰と一緒にであろうと、私はいつも同じように行動をする。	2	6	5	4	2	3	3	7	2	6	3	3	5	
22. 健康でいることが、何よりも重要だと思う。	2	7	7	7	7	5	2	7	7	7	7	7	6	
24. 周囲の人に影響が及ぶとしても、私は自分にとって最適であると思ったことには挑戦する。	5	4	3	4	6	3	6	4	6	6	3	1	7	
25. 自分で自分の面倒が見れることは、私にとって最も重要なことである。	7	5	6	5	5	6	6	7	7	3	6	7	6	
27. 他の人から簡単に影響を受けない自分自身のアイデンティティーを持つことは、私にとって重要だ。	7	5	6	5	6	5	5	7	6	6	5	7	5	
29. 私は家にいる時の自分と、職場にいる時の自分とが同じである。	3	5	5	6	2	2	6	7	6	2	1	1	3	

〈表9〉 相互依存的自己観 男性

相互依存的自己観を表す質問	男性													
	1	2	4	5	6	7	8	9	10	14	15	19	25	
3. 自分と同じグループ・組織に属している他のメンバーの意見に全く同意できない時でも、私は相手と議論をすることを避ける。	3	4	3	5	5	3	2	1	2	2	5	3	3	
4. 私は権威や権力を持った知人に対して、尊敬の気持ちを抱いている。	5	4	4	6	4	5	5	7	6	7	3	1	6	
6. 自分に謙虚な人を私は尊敬する。	6	6	7	5	5	6	6	7	6	7	7	4	4	
8. 自分が属しているグループ・組織のためなら、自分の利益を犠牲にしてもかまわない。	5	3	5	3	3	5	3	7	6	6	6	7	5	
11. 進路や職業について考える時、親の意見を考慮すべきだと思う。	3	4	6	3	5	6	2	4	5	6	5	7	5	
12. 私の運命は、自分の周囲の人の運命と関連し合っていると思う。	3	5	7	6	6	5	5	7	6	7	2	4	6	
14. 周囲の人と協力し合うことは、私にとって心地良いことだ。	3	6	7	6	4	6	7	7	6	7	7	6	5	
16. 自分の兄弟姉妹が失敗をしたら、私自身も責任を感じる。	3	5	6	4	5	5	2	7	6	3	3	2	6	
17. 自分の成功や業績よりも、周囲との人間関係の方が大切であると思うことがよくある。	5	4	7	4	4	4	3	4	6	7	5	7	4	
19. バスの中で上司に会ったら、自分の席を譲るだろう。	6	5	6	5	5	6	6	7	6	7	4	1	6	
21. 周囲の人が幸福であってこそ、私は初めて幸福になれる。	5	4	7	5	4	6	6	7	7	6	6	1	5	
23. 居心地が悪くても自分が必要とされるなら、私はそのグループ・組織にとどまると思う。	6	5	5	4	3	3	2	4	6	6	5	1	6	
26. 自分の属しているグループ・組織によって決定されたことを尊重することは、私にとって重要だ。	5	5	5	5	4	5	3	7	6	6	5	7	6	
28. 自分が属しているグループ・組織の調和を保つことは、私にとって重要だ。	6	5	7	5	5	5	2	7	6	6	4	7	6	
30. 自分と周りの人がやりたいことが異なった場合、私はいつも周囲の人の意見を優先している。	2	4	6	4	3	3	1	4	6	5	6	1	5	

〈表 10〉 独立的自己観 女性

独立的自己観を表す質問	女性													
	3	11	12	13	16	17	18	20	21	22	23	24	26	
1. 私はあらゆる点で、他の人たちとは違った、個性的な存在 であるのが好きだ。	6	6	2	1	3	3	4	4	2	4	4	2	3	
2. 初対面の相手が自分よりかなり年上であっても、私は相手とオープンに話をする ことができる。	7	6	5	7	3	7	5	6	7	6	7	3	5	
5. 周囲がどう思おうと、私は自分が思ったことをやる。	6	7	5	3	3	4	4	6	2	3	5	2	5	
7. 自立した一人の人間として行動することは大切なことである。	7	7	7	7	6	7	6	6	7	6	6	7	6	
9. 誤解を招くくらいなら、はっきりと「いいえ」と言う方がいい。	6	7	3	5	6	5	5	7	6	6	6	5	6	
10. 豊かな想像力を持つことは、私にとって大切なことである。	7	7	6	5	5	6	6	7	6	6	5	5	6	
13. 初対面の人でも、私は単刀直入で率直でありたいと思う。	6	7	2	4	3	3	5	2	2	6	5	3	5	
15. 私は自分ひとりだけが誉められたり、賞をもらっても気がひけることはない。	3	2	2	3	3	2	4	3	7	4	3	4	4	
18. 職場の会議において、私は自分の意見を率直に述べることができる。	6	6	5	5	6	5	6	7	6	6	4	3	6	
20. 誰と一緒にであろうと、私はいつも同じよう 行動をする。	6	6	4	4	3	5	3	5	6	5	4	2	2	
22. 健康でいることが、何よりも重要だと思う。	7	6	7	7	6	6	7	7	7	7	7	6	7	
24. 周囲の人に影響が及ぶとしても、私は自分にとって最適であると思ったことには挑戦する。	4	7	2	3	3	5	4	5	6	4	6	4	2	
25. 自分で自分の面倒が見れることは、私にとって最も重要なことである。	6	7	6	5	3	5	6	6	2	6	7	6	4	
27. 他の人から簡単に影響を受けない自分自身のアイデンティティーを持つことは、私にとって重要だ。	7	7	2	5	3	5	4	6	6	4	6	6	5	
29. 私は家にいる時の自分と、職場にいる時の自分とが同じである。	6	7	5	2	2	3	2	1	1	6	6	3	3	

〈表 11〉 相互依存的自己観 女性

相互依存的自己観を表す質問	女性													
	3	11	12	13	16	17	18	20	21	22	23	24	26	
3. 自分と同じグループ・組織に属している他のメンバーの意見に全く同意できない時でも、私は相手と議論をすることを避ける。	2	1	3	5	5	5	5	3	1	3	6	6	2	
4. 私は権威や権力を持った知人に対して、尊敬の気持ちを抱いている。	4	6	5	4	2	6	5	4	1	5	6	5	4	
6. 自分に謙虚な人を私は尊敬する。	7	7	6	5	2	6	3	6	2	7	4	7	5	
8. 自分が属しているグループ・組織のためなら、自分の利益を犠牲にしてもかまわない。	5	2	2	3	1	5	3	4	1	6	2	3	4	
11. 進路や職業について考える時、親の意見を考慮するべきだと思う。	5	1	2	5	3	5	4	5	6	5	5	6	5	
12. 私の運命は、自分の周囲の人の運命と関連し合っていると思う。	6	1	3	3	6	5	6	6	6	6	5	6	5	
14. 周囲の人と協力し合うことは、私にとって心地良いことだ。	6	6	7	6	6	7	5	4	5	7	5	6	6	
16. 自分の兄弟姉妹が失敗をしたら、私自身も責任を感じる。	5	1	5	5	3	6	5	5	6	5	5	5	4	
17. 自分の成功や業績よりも、周囲との人間関係の方が大切であると思うことがよくある。	5	4	5	5	3	6	5	4	2	6	3	5	6	
19. バスの中で上司に会ったら、自分の席を譲るだろう。	6	3	7	5	6	4	6	4	6	5	4	4	6	
21. 周囲の人が幸福であってこそ、私は初めて幸福になれる。	6	2	2	6	2	6	5	6	7	5	4	5	6	
23. 居心地が悪くても自分が必要とされるなら、私はそのグループ・組織にとどまると思う。	5	1	2	4	5	3	2	2	2	5	3	4	3	
26. 自分の属しているグループ・組織によって決定されたことを尊重することは、私にとって重要だ。	5	5	6	5	2	6	3	7	2	5	6	5	5	
28. 自分が属しているグループ・組織の調和を保つことは、私にとって重要だ。	5	5	7	6	5	7	5	6	2	5	6	6	6	
30. 自分と周りの人がやりたいことが異なった場合、私はいつも周囲の人の意見を優先している。	3	3	6	5	2	5	5	4	2	4	5	5	3	

研究参加者の独立的自己観と相互依存的自己観の各点数を合計し、それぞれどちらの自己観の傾向が強いかを、以下の表にまとめた。研究参加者 26 名のうち、相互依存的自己観の傾向が強い者は 13 名、独立的自己観の傾向が強い者は 12 名、そして 2 つの自己観の傾向が同じだった者が 1 名だった。傾向が強い方の自己観の合計点数の上に色を塗っている。

〈表12〉 独立的自己観 ・ 相互依存的自己観

性別	参加者	独立的自己観	相互依存的自己観
男 性	m-1	75	66
	m-2	79	69
	m-4	79	88
	m-5	82	70
	m-6	64	65
	m-7	71	73
	m-8	80	55
	m-9	99	87
	m-10	80	86
	m-14	84	88
	m-15	65	73
	m-19	56	59
	m-25	69	78
女 性	f-3	90	75
	f-11	95	48
	f-12	63	68
	f-13	66	72
	f-16	58	53
	f-17	71	82
	f-18	71	67
	f-20	78	70
	f-21	73	51
	f-22	79	79
	f-23	81	69
	f-24	61	78
	f-26	69	70

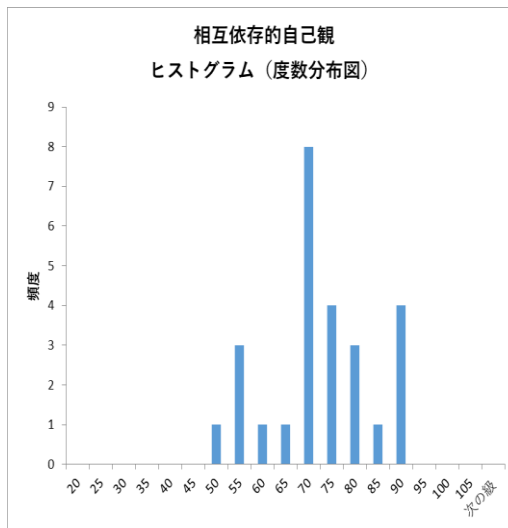
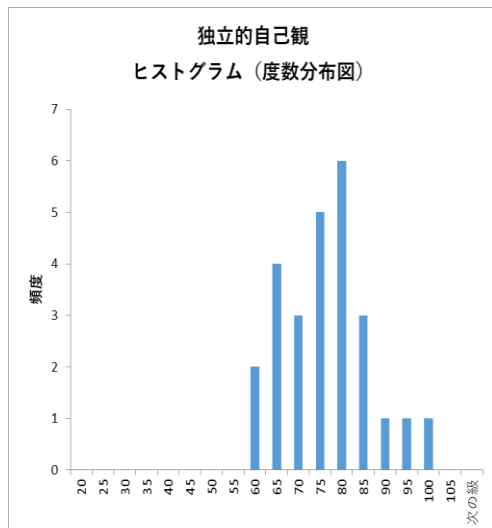
研究参加者の持つ自己観を、「独立的自己観」と「相互依存的自己観」の2つに分類した後、「4つの自己観 (four-type model of self-construal)」(Kim et al., 1996)を導いた。本研究では、羽山(2018)の「やさしく学ぶデータ分析に必要な統計の教科書」が示した手順を基に、Microsoft Excelのデータ分析ツール(基本統計量)を使用し、研究参加者26名の自己観に関するデータ代表値を算出した。なお、データの代表値として、「平均値」、「中央値」、「最頻値」の3つがあるが、本研究では「平均値」を使用する。

平均値は、データの合計値をデータの数で割って算出した値であり、データを代表する数値でもあるが、データの中に極端な数値が含まれている場合、平均値はその影響を大きく受けることがある。次に中央値は、データを昇順または降順に並べた時に中央に位置する数値であるため、データの中に極端に大きいまたは小さい数値が含まれていても、その影響を受けない。しかし、データ全体の真ん中の数値だけを表すことになり、データ全体の変化を表したり比較には適さないとされている。そして最頻値は、データの中でどの数値が一番多いかを表すため、サンプル数が多い場合でしか使えないという特徴がある。これらのことから、本研究はサンプル数が26名と少ないため「最頻値」は使用できない。本研究における2つの自己観それぞれの平均値と中央値を比較したところ、平均値(独立的74.5、相互依存的70.7)と中央値(独立的74、相互依存的70)には大きな差はない。本研究では正規分布が見られ、さらに統計を行うにあたり、平均値と中央値の差が大きくずれがない場合、平均値を使うことが一般的であることから(羽山、2018)、本研究でも平均値を基準値とする。なお、Kimら(1996)やYamaguchiら(2016)も平均値を基準値としている。

詳細は、「自己観調査結果(26名)のデータ代表値」にまとめている。また、26名から得たデータが正規分布であることを示した「ヒストグラム(度数分布図)」は、以下の通りである。

〈表13〉 自己観調査結果（26名）のデータ代表値

独立的自己観		相互依存的自己観	
平均	74.5	平均	70.7
標準誤差	2.1	標準誤差	2.2
中央値（メジアン）	74.0	中央値（メジアン）	70.0
最頻値（モード）	79.0	最頻値（モード）	70.0
標準偏差	10.7	標準偏差	11.2
分散	115.4	分散	124.6
尖度	0.0	尖度	-0.4
歪度	0.4	歪度	-0.3
範囲	43.0	範囲	40.0
最小	56.0	最小	48.0
最大	99.0	最大	88.0
合計	1938.0	合計	1839.0
データの個数	26.0	データの個数	26.0



次に、Kim ら (1996) の「4つの自己観」の分類方法に基づき、研究参加者の自己観を、独立的自己観、相互依存的自己観、2文化型自己観、周辺化型自己観の4つに分類した。なお、Kim ら (1996) の20年後に Yamaguchi ら (2016) が行った研究でも、研究対象者の自己観を4つに分類する際、本研究が参考とする Kim ら (1996) の手順に従っている。

そして、先に示した26名の自己観の平均値(独立的自己観74.5、相互依存的自己観70.7)と、個人が持つそれぞれの自己観の数値を比較し、両方の自己観が平均値より高い場合を「2文化型自己観」、両方の自己観が平均値より低い場合を「周辺化型自己観」、さらに独立的自己観のみが平均値より高い場合を「独立的自己観」、相互依存的自己観のみが平均値より高い場合を「相互依存的自己観」と設定した。例えば、男性参加者(m-4)の独立的自己観は79で相互依存的自己観は88である。独立的自己観74.5、相互依存的自己観70.7という平均値と比較し、両方とも平均値を上回っている。従ってこの男性(m-4)は、「2文化型自己観」ということになる。

本研究参加者の中で、「独立的自己観」または「周辺化型自己観」を持つ者が7名ずつと最も多く、それに次いで「2文化型自己観」または「相互依存的自己観」がそれぞれ6名ずつであった。以下の表に●印がついている自己観が、その個人が持つ自己観である。

〈表14〉 4つの自己観

性別	参加者	独立的自己観	相互依存的自己観	2文化型自己観	周辺化型自己観
男性	m-1	●			
	m-2	●			
	m-4			●	
	m-5	●			
	m-6				●
	m-7		●		
	m-8	●			
	m-9			●	
	m-10			●	
	m-14			●	
	m-15		●		
	m-19				●
	m-25		●		
女性	f-3			●	
	f-11	●			
	f-12				●
	f-13		●		
	f-16				●
	f-17		●		
	f-18				●
	f-20	●			
	f-21				●
	f-22			●	
	f-23	●			
	f-24		●		
	f-26				●

4-2. 4つの自己観

本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の視点に基づいたインタビュー調査、およびデータの分類・分析を行った。そして研究参加者の「言葉」とそれぞれが持つ「自己観」を双方向から考察するため、別途、質問票調査を実施した。

本研究では、Singelis（1994）の「自己観に関する30項目」を基に、研究参加者たちの自己観の傾向を調べた。そしてKimら（1996）は、欧米で広く使用されているSingelis（1994）の質問票を、各文化に適切な項目に修正し、日本、韓国、ハワイ、アメリカ本土の大学生を対象に、自己観に関する調査を行った。その結果、独立的自己観の傾向が強い順に、アメリカ本土、ハワイ、日本、そして韓国と続き、これは日本や韓国という相互依存的自己観の傾向が強いと考えられている文化圏で、独立的自己観の傾向が弱いという、Markus & Kitayama（1991）の主張を裏付けるものであった。

一方、本研究参加者の自己観（平均値：独立的自己観 74.5、相互依存的自己観 70.7）は、独立的自己観が51%、相互依存的自己観が49%だった。この2つの自己観の差は僅かだったが、独立的自己観の傾向の方がやや強く、Markus & Kitayama（1991）やKimら（1996）の結果とは異なるものだった。実際に26名のインタビュー・データには、独立的自己観の傾向を表すものが多く含まれていた。

「自己観は『文化的』から『個人的』レベルの問題になっている」という主張の基、Kimら（1996）が提唱した「4つの自己観」の視点から、「異文化間の会話に対する適応」（Kim et al., 1996）や「幸福と健康に対する認識」（Yamaguchi et al., 2016）などの研究が行われた。これらの研究によって、「同一文化内における『個人』を、『自己観』の違いから説明することが可能である」ということが示された。一方、日本社会での恋愛を追究している本研究においても、同じ社会に属する個人の恋愛観やコミュニケーションを自己観の違いから考察することは、個人を理解するにあたり重要な観点である。従って本研究も、Kimら（1996）の「4つの自己観」の分類方法に沿って、研究参加者それぞれが持っている自己観を4つに分類した。

その結果、「独立的自己観」、「周辺化型自己観」を持つ者が7名（各27%）ずつ、「2文化型自己観」、「相互依存的自己観」はそれぞれ6名（各23%）だった。そして、4つに分類されたそれぞれの自己観から、個人の恋愛観やコミュニケーションを説明するため、再度インタビュー・データを読み返した。そして、研究参加者の発言ひとつひとつと、個々が持つ自己観を照らし合わせた。その結果、それぞれの自己観の特徴から、ほぼすべての研究参加者が持つ考え方やコミュニケーションを説明することができた。

そして、4つの自己観に分けられた研究参加者の中でも、特にその自己観の特徴を反映したコミュニケーションを行っていた者を、自己観別に2名ずつ、合計8名選んだ。なお、特定の自己観の特徴とは関連付けづらいコミュニケーションを行っていた者(m-14)については、「4-2-6-1.4つの自己観以外の自己観」、「4-2-7.分離型自己観」、「4-2-7-1.34歳既婚男性・子有り(m-14)」(p.113-117)で別途考察を行う。

以下、「『文化的』ではなく、『個人的』レベルに基づいた自己観から、個人を説明することがどのような意味を持つのか」という点にも注目し、研究参加者のインタビュー・データとそれぞれの自己観を照らし合わせ、以下考察を行う。

4-2-1. 相互依存的自己観

研究参加者の中で、「相互依存的自己観」の傾向が強い者は6名(23%)だった。さらに Yamaguchi らが2016年に日本人の中年層に行った調査では、4つの自己観のうち相互依存的自己観は独立的自己観と並び最も低く、13.1%だった。本研究参加者のインタビュー内容は以下の通りである。

4-2-1-1. 33歳未婚女性(f-13)

この女性は、「自分は恋愛したら尽くすタイプ」と認識しており、恋愛中は相手に合わせる事が多く、恋人に対して「これは嫌だ」など、否定的な発言をしたことがないという。彼女は、精神的に恋愛に依存したくないと考える一方、彼女にとって恋愛は心の支えでもあり、恋愛をすることで、頼れる存在が身近に感じられるので、「恋愛はいいな」と思っているという。

この女性には10代の頃から13年間交際した恋人がいたが、社会人になって別れ、それからしばらく恋人はいない。数年前に、その元恋人が別の女性と結婚したことを知ったが、特に落ち込むことはなかったという。その理由を、「自分には夢中になれる趣味があるから」と彼女は考えている。彼女はK-pop(韓国のポップミュージックの総称)に夢中で、コンサートにも頻繁に足を運んでいる。一方、そのK-popという趣味が、「恋愛の妨げになるかもしれない」と考えていた。彼女は、「K-popが好きなことに対して抵抗がある男性もいるかもしれないし、K-popが好きということだけで(私のことを)判断する人もいるかもしれない。雑談程度には(K-popが好きだということ)を言う。相手の反応を見る。『私のK-pop好き』は隠し通せないから。隠すことはしないけど、何かしらのタイミングで言う」と話していた。この女性は、自分の好きなことを貫きた

いと思いつつも、まだ存在しない未来の恋人が、「自分の趣味をどう思うのか」ということを気に掛けていた。

そしてこの女性は、親から「結婚しろ」と言われることもあるが、それには反発しているという。その理由は、「今、子供を産んだとしても（世の中の）環境が変わって、産んだ子供が幸せに生きていけるのか」、「子供を持つこと、家庭を持つことが自分の幸せに結びつくのか」ということが、常に頭の中にあるからだという。彼女は仕事で日常的に、大学生やその親と接する機会が多く、さまざまな親子関係や家族の姿を見ている。そのような中、彼女は「『結婚して子供がいても、幸せなのかな』と思うことが多くなった。だからこそ結婚に執着しなくなった」と話す一方、「親も孫の顔を早く見たいと思っているのだろう」とも話していた。

この女性は自分の意思や考えを持ちながらも、他者、そして周囲の状況を常に意識している。彼女の恋愛観には、他者や周囲というものが常に結び付いていると言えるだろう。

4-2-1-2. 31 歳既婚女性 (f-17)

この女性は、「恋愛に興味がなくなることはないと思う。そういうのが女性だなんて思う」と話していた。そして「男性と交際を始めるにあたり、躊躇することがあるとしたらそれは何か」という質問に対し、「仕事はするけど、家のことはそこまでできない。だらしのない自分」と答えていた。彼女は、「女性だから家のことをきちんとしなければならない」、「女性だから恋愛に興味なくなることはない」というような、「女性だから〇〇である」という主旨の発言をすることが多かった。これはホフステード(1995)の「男性らしさの社会」を象徴するような考え方とも言えるだろう。男性らしさを特徴とする社会では、社会生活の上で男女のジェンダー・ロールがはっきりと分かれており、男性は自己主張が強くてたくましく、物質的な成功を目指すものだと考えられているのに対し、女性は謙虚で優しく、生活の質に関心を払うものだと考えられている。

またこの女性は、精神的に恋愛パートナーに依存する傾向が強かった。例えば、深刻な悩みなどは、同性の友人ではなくパートナーに聞いてもらいたいと考えていた。そして、「相手（恋愛パートナー）が変えて欲しいと思うことには、基本的に従う。自分の自信のなさが露呈してしまう。...〈中略〉...（相手から）どう思われているんだろうと思っていた。私は自分で洋服を選べないし、（自分のファッションが）ダサいと思われ

ているんじゃないかが気になっていた」と話していた。そして、この女性が恋愛パートナーに依存する傾向は学生時代から変わっていなかった。

彼女は大学時代、浮気症でギャンブルばかりしている男性と交際していた。「あの人だけはやめた方がいい」と友人から忠告されていたが、「私なら付き合えるはず」と思い、周囲の反対を押し切って交際を始めた。二人が交際を始めてからも、相手は浮気もギャンブルもやめなかったが、関係は約3年間続いた。さらに彼女は、別れた後もこの男性と時々会っていた。彼女には、「もしかしたら将来（結婚）があるかも」ということが常に頭の中にあったという。また、それに加え交際時に恋人の家族、特に兄夫婦と親しくしており、恋人と別れた後もその兄夫婦との交流が続いていたため、その関係からも元恋人からも離れることができなかつたと話していた。

そして現在、彼女は社会人になって出会った男性と結婚しており、「旦那さんは心許せる人なので頼ってしまう」と話していた。彼女は学生時代を振り返り、「あの時の方が恋愛に依存していた」と言っていたが、この女性は自分の恋愛対象を特別な存在として捉え、依存傾向にあることは過去も現在も変わらないと言えるだろう。

4-2-1-3. 相互依存的自己観の傾向が強い人々

前述の女性たちは、周囲からの反応に敏感であり、かつ、恋愛パートナーや他者に依存するという、「相互依存的自己観」の傾向が強いコミュニケーションを行っていたと言える。仮に、この研究参加者たちに対して「文化的」レベルからの考察しか行われていなかったら、彼女たちは「相互依存的自己観」の傾向が強いということだけで「日本にいる日本人の象徴」として一括りにされた可能性もあっただろう。

一方、本研究は Kim ら（1996）や Yamaguchi ら（2016）のように、「個人的」レベルに注目し自己観の考察を行った結果、「なぜ彼女たちが相互依存的自己観に分類されたのか」、「どのような特徴がこの自己観に当てはまったのか」、「なぜ彼女たちが他の3つの自己観ではなく相互依存的自己観に分類されたのか」などについて理解することができた。さらにこの女性たちを含めた、相互依存的自己観を持つ6名の研究参加者が行っていたコミュニケーションのひとつひとつに注目し、考察を繰り返すことで、相互依存的自己観の特徴がさらに鮮明になったと言える。また、相互依存的自己観の傾向の強い個人が、それぞれ「何」に依存していたのかということも導くことができた。

例えば、K-pop に夢中の33歳未婚女性（f-13）は、「恋人ができたなら、相手はK-pop が好きな自分をどのように思うのか」、また仕事を通じて周囲の親子の姿を見る度に、

「結婚して子供を持つことは幸せなのか」などと考えていた。自分が楽しんでいる趣味であれば、「他者の目」がどうであれそれを気にせず、また、自分の家族をつくりたいと思うなら、「周囲の家族」がどうであるかは関係ないという自分の主張を貫くこともできるだろう。しかしこの女性は、「他者の目」や「周囲の状況」に敏感であり、依存していたからこそ、自身の考えが揺れ動いていたのかもしれない。そして、恋愛そのものに依存する傾向が強かった31歳既婚女性（f-17）は、恋人や夫など「親密な異性」に精神的に依存していたと言える。

この女性たちを例に取っても、その「依存対象」は異なるが、数値上、二人は同じ相互依存的自己観に分類される。このことから、これまで相互依存の傾向が強いと考えられてきた日本において、人が具体的に「『何』に依存しているのか」を知ることは、日本人をより詳細に説明するために欠かせない視点であると言えるだろう。

4-2-2. 2 文化型自己観

本研究参加者の中で、「2文化型自己観」の傾向が強い者は6名（23%）だった。さらに、Yamaguchiらが2016年に日本人の中年層に行った調査では、4つの自己観のうち2文化型自己観は2番目に多い21%だった。本研究参加者のインタビュー内容は以下の通りである。

4-2-2-1. 36歳既婚男性・子有り（m-4）

この男性は、妻との間にあった問題を解決しただけではなく、コミュニケーションを通して互いが理解し合える関係を妻と築いていたと言える。

彼は結婚する前から束縛を嫌い、自分の時間を大切にしていた。そして結婚後も以前と同じように、週末は仕事関係の勉強会やイベントに出掛けることが多かったという。その行動に対して妻が口を出すこともなかったため、この男性は妻が自分の行動を黙認していると思っていた。妻の機嫌が悪いということをたまに感じることもあったが、それでも何も言われなかったため、そのまま外出を続けていたという。だが、妻は本当のところ「子供も小さいし、週末は家にいて欲しい」と思っており、彼はそのような妻の気持ちをかなり後になって知ったという。

そして彼は「どうすれば自分と妻の両方が満足できるのか」を考え、さらに妻とも話し合ったことで、「妻を理解できた気がする」と話していた。例えば、妻の気持ちは言葉ではなく、表情や態度に表れていたこと、また、自分が理詰めで話をする一方で、妻

が反論できない状況をつくっていたことなどに気付けたという。さらに彼は妻に対し、「言葉で気持ちを伝えるようにしてほしい」と言った結果、妻は感情を少しずつ口に出すようになった。そしてこの男性も自分ばかりが話すのではなく、妻が話し終えるまで待つように心掛けるなど、互いのことを考えたコミュニケーションを行うようになったという。そして現在、妻や家族の状況を見ながら、彼はこれまで通り勉強会に参加するなどの「自分の時間」と妻が望んでいる「家族との時間」の両方を手に入れたという。

Yamaguchi ら (2016) は、相互依存的自己観と独立的自己観の両方を持つ者たちは、自らの感情を周囲と共存させながら、他者との関係を築いていくことを可能にすると述べている。この男性は 2 文化型自己観の特徴を示すようなコミュニケーションを行い、妻と自分が満足する状況を導くと同時に、妻のことも理解し、夫婦のより良い関係を築いていると言えるだろう。

4-2-2-2. 43 歳既婚女性・子有り (f-22)

この女性は浪費癖のある男性と交際し、その後結婚した。彼女は結婚する際、「夫婦だけの結婚生活であれば、夫の浪費や家計のやり繰りも何とかできる」、「子供ができれば、夫も自分の行動を少しは改めるだろう」と考えていた。しかし、子供が産まれてからも夫の浪費は続き、さらに夫には不倫相手があり、その女性に高級時計を贈っていたことが分かったという。この女性は、家計を圧迫している「夫の浪費」、そして母親として「子供と家庭を守る」という 2 つの現実の間で葛藤していた。一時は離婚を考えるまで追い詰められていたというが、夫の両親に相談したり、夫と喧嘩を繰り返しながらも、話し合いを続けたことで、夫の浪費は減り、そして夫は不倫相手とも別れたという。これは今から 10 年以上前のことであるが、この夫婦は現在も婚姻関係を維持している。

さらにこの女性は、「結婚して愛情が子供に移った」という発言もしており、母親としての自覚が強かったからこそ、子供や家庭を守るための行動を起こしたと言えるのではないだろうか。夫の両親にも助けを求め、そして自分自身も夫と向き合ったことで、彼女は問題を解決した。Yamaguchi ら (2016) は、2 つの自己観を持つ者は、多くの人間とかかわりながら、他者や周囲と強い関係を持つことができると述べている。

そして彼女は家庭の外においても、周囲とのコミュニケーションを繰り返し、人間関係を構築していた。この女性は、子供の友人の母親たちとの交流も盛んで、一緒に集まって話をしたり、食事に出掛ける機会も多いという。さらに彼女は自分自身について、

「男っぽいしポンポン言う性格だけど、ムカついても(そのことは)相手には言わない」と話していた。彼女は思ったことを何でも口に出すのではなく、自分の感情をコントロールしながら、他者と付き合っていく能力を持っているのだろう。

この女性は2つの自己観の特徴を活かしたコミュニケーションを行いながら、家庭でもそれ以外の場所でも他者との関係を築いていると言えるだろう。

4-2-2-3.2 文化型自己観の傾向が強い人々

2文化型自己観を持つ者は、楽観的で幸福を感じやすく、他者に感謝の念を抱き、人生における満足度が高いという特徴を持つ。さらに、感情をコントロールしながら、自分と周囲と共存させ、他者との関係を築いていくことができる(Yamaguchi et al., 2016)。今回の研究参加者たちも、他者とのコミュニケーションを積極的に行っており、周囲と協力し合おうと同時に、自分の意思や考えも貫こうとしていた。この2文化型自己観の傾向が強い者は、2つの自己観の特徴をそれぞれの方法で活かしながら、自分にとって、そして周囲の人々にとっても満足できる結果を導くだけではなく、より強固な人間関係をつくっていたと言える。

4-2-3. 周辺化型自己観

今回の研究参加者の中で「周辺化型自己観」の傾向が強い者は7名(27%)で、独立的自己観と同数であった。さらに、Yamaguchiらが2016年に行った日本人の中年層に対する調査では、4つの自己観のうち最も多く、半数以上の52.6%だった。本研究参加者のインタビュー内容は以下の通りである。

4-2-3-1. 37歳既婚男性・子有り (m-6)

この男性によると、彼の結婚前の生活はかなり乱れており、偏った食生活を続けるなど、不規則な日々を送っていた。しかし、今の妻と結婚したことにより生活は一変し、何事においても意欲が湧いてきたという。彼は精神的にも安定し、チャレンジしたいことが増え、さらに大学院に進学する気持ちにもなり、「結婚前の自分からは想像もつかないような別人に生まれ変わったような気がする」と語っていた。

この男性は、「たまに妻からの束縛を感じることもある」と言いつつも、「いいかげんな自分」が「きちんとした妻」に引っ張られたことにより、やる気が出て、充実した日々を送っていると実感していた。そして現在は、妻や子供たちのことが何よりも大切であ

り、今感じている幸せを維持しようとしていた。頑なに意思を貫いたり、自我に固執することもないと同時に、妻に依存したり、無理に周囲とうまくやっっていこうとするわけでもない彼は、独立的自己観、そして相互依存的自己観の特徴を表すコミュニケーションを過度に行うことはないが、自分と周囲が満足する最良の方向へ進んでいるようであった。

4-2-3-2. 42歳独身男性 (m-19)

この男性は、恋愛を重要なものとは捉えておらず、「互いが干渉しない関係で、疲れた時にたまに連絡する程度でちょうどいい」、「ひとりが好きだし、彼女がいないことの方がいい。ひとりの方が楽」と話していた。さらに彼は、これまでの恋愛で浮気をしたことはなく、これからもするつもりがないという。その理由を、「面倒くさい。あつちに嘘ついて、こっちに嘘ついてというのは面倒」と話していた。さらに過去の恋愛を振り返り、「恋愛が終わる時は、決まって自分の気持ちが冷めていることが多い。僕の気持ちが途切れる。相手への気持ちが消えていくし、愛情表現もできないので、相手に悪いなと思うようになる」と話していた。

この男性は恋愛において非常にマイペースであり、自分から相手に合わせようとすることもなければ、相手に何かを求めるわけでもない。彼の中には、独立的自己観そして相互依存的自己観の両方の特徴は強く見えず、周辺化型自己観の定義と一致する考え方をもち、それに沿った行動をしていたと言える。

4-2-3-3. 周辺化型自己観の傾向が強い人々

前述の2名の男性たちは、自分の強い意思に基づいた行動を起こしたり、周囲に対して自身の主張をすることはあまりない。また、他者や周囲からの反応を極端に気にしたり、積極的に相手につながりを求めようとしない点も共通していた。むしろ彼らは、自分自身を見つめたり、内省する発言が多く、自らを客観的に捉える傾向が強かったと言える。

Yamaguchiら(2016)が、34-84歳(平均年齢54.5歳)の「アメリカ人」に行った調査では、この周辺化型自己観は、2文化型自己観の46.2%に次いで2番目に多く、22.2%だった。「文化的」視点に立つと、「アメリカ人は独立的自己観の傾向が強い」とされているため、この周辺化型自己観の傾向が強いことは、意外な結果であるように感じられる。しかし、これまで「独立的自己観」の傾向が強いとされていたアメリカであっても、

自己観を「個人的」レベルから調査すると、その結果は必ずしも「文化的」レベルからのものとは一致するわけではない、ということが明らかにされた結果であると言えるだろう。

そして Yamaguchi ら (2016) によると、「日本人」の中年層を対象に行った調査では周辺化型自己観に該当した者が最も多く、52.6%で半数以上を占めていた。本研究では独立的自己観と同様、その差は僅かだったが、他の自己観よりも「周辺化型自己観の傾向が強い者が多い」という結果になった。日本人にこの周辺化型自己観の傾向が強いのは、日本社会ではこの自己観を持つ人間が、受け入れられやすいからではないだろうか。自分を周囲から切り離れた「個」であると考えたり、自己実現のために積極的に行動を起こすという「独立的自己観」の傾向が強くなく、かつ、周囲の反応に合わせてたり、他者と強調し合うなどに代表されるような「相互依存的自己観」の傾向が強くなくても、日本社会において問題視されることはないだろう。つまり、自己主張をしなくても、もしくは多少の自己主張をしたとしても、周囲にある程度合わせていくことができれば、その人間は日本社会において目立つこともなければ、出る杭は打たれることもなく、さらにはお節介な人と周りから煙たがられることもない。そのような人々は、「目立たない人」であるかもしれないが、日本社会においてはむしろ「控えめな人」として評価されるのではないだろうか。

Yamaguchi ら (2016) によると、周辺化型自己観の特徴を持つ者は、物事を否定的に捉えがちで、周囲とのつながりを積極的に持とうとしない傾向があるとされている。本研究参加者の中の周辺化型自己観の傾向を持つ者は、「自己肯定感はそれほど高くない」(35歳未婚女性 f-21)、「相手を変えるほどの能力は自分にはない」(30歳未婚女性 f-12)などの発言をしていた。「自己肯定感はそれほど高くない」という言葉が示しているように、自身を高く評価するのではなく、むしろ謙遜するような態度でいることもまた、日本社会において「受け入れられやすい」と言えるのかもしれない。さらに恋愛に関しても、「互いが全く干渉しない関係で、疲れた時にたまに連絡する程度でちょうどいい」(42歳独身男性 m-19)、「相手に順応する方が楽」(37歳未婚女性 f-16)、「相手に主導権を握って欲しい」(35歳未婚女性 f-18)という発言が聞かれた。彼女/彼らは、恋愛に対して自分の希望を強く持っているわけでも、パートナーとの関係に依存しようとするわけでも、さらにはパートナーに過度な期待を抱いているわけでもなかった。本研究における周辺化型自己観を持つ者たちには、関係を自ら積極的に構築しようとしたり、つながりを持とうと能動的に行動を起こそうとする姿はあまり見られなか

った。しかし、彼女/彼らは、他者とつながりを持つことを拒否していたわけではなかった。むしろ、人間関係とは「なるようになるもの」として捉え、人間関係を俯瞰していたようであった。そして Yamaguchi ら (2016) の周辺化型自己観の定義には、本研究参加者たちのコミュニケーションから得られた、「自分にも相手にも過度に期待しない」という特徴は含まれていなかったが、これは周辺化型自己観を持つ人々を表す特徴として、その定義に付け加えることができるのではないだろうか。

4-2-4. 独立的自己観

今回の研究参加者の中で「独立的自己観」の傾向が強い者は 7 名で全体の 27% だった。そして 7 名のうち女性が 3 名で、全員に北米を中心に海外在住経験がある。カナダに 11 年間留学 (41 歳未婚女性 f-11)、アメリカに 7 年間留学 (43 歳未婚女性 f-20)、夫がカナダ人でアメリカ、香港、バリ島など海外在住経験 10 年以上 (46 歳既婚女性 f-23・子有り)。一方男性には、旅行や短期ホームステイ以外の海外在住経験を持つ者はいなかった。

また、Yamaguchi らが 2016 年に日本人の中年層に行った調査では、独立的自己観は相互依存的自己観と並び、4 つの自己観の中で最も低い 13.1% だった。本研究参加者のインタビュー内容は以下の通りである。

4-2-4-1. 41 歳未婚女性 (f-11)

この女性は、16 歳から 27 歳までカナダに留学した経験を持ち、独立的自己観の傾向を持つ他の研究参加者と比べても、その特徴を強く持っていたと言える。そして、この女性には強い結婚願望はなく、彼女自身、恋愛は特に重要なものではないと考えていた。なぜならこの女性にとって何より重要なのは、「ひとりの人間として自立すること」であり、そのきっかけとなったのは亭主関白的な振る舞いをする彼女の父親の存在であった。この女性が育った家庭では、父親が絶対的な権力を握っており、彼女は幼い頃からそれが嫌だったという。

さらに、彼女が裕福な家庭で生まれ育ったことも、彼女が自立したいと考えるようになった理由のひとつである。彼女はこれまで、「お嬢さん育ちだから、楽な思いをして生きてきたんでしょ」などと言われることが多かったという。彼女は、自分が経済的に恵まれた環境で育ったことを理解しながらも、自分で人生を切り拓いてきたことに誇りを持っている。そして彼女は、「女性を軽視する男性とは絶対付き合わないし、結婚

をゴールだと思っている女性には全く共感できない。男性に依存せずに、精神的にも経済的にも独り立ちしたいとずっと思ってきた」と話していた。実際、この女性は誰が見ても自立していると言えるだろう。カナダでの学費や生活費などの金銭的サポートは親から受けていたが、彼女は大学院を修了して帰国し、合格率 20%以下の国家試験に合格し、現在はその資格を活かした職に就いている。

そして彼女は恋愛について、「自分の人生の中でそれほど重要なものではないが、自分から好きになった男性と、これまで自分が思うような恋愛をしてきた」と話していた。彼女は男性を好きになると、最初はその相手に夢中になる。彼女は、カナダから帰国した後、地元で知り合った男性と付き合い始めた。しばらくして恋人が県外に転勤になったが、彼女は迷うことなく恋人と一緒に地元を離れ、新しい土地で生活を始めた。しかしその後、恋人とは自分から別れたという。この女性は、「好きになったら必ず相手を落としたい」という気持ちがある一方、「相手を尊敬できない」、「一緒にいて楽しくない」と少しでも感じると、相手からすぐに離れるという。これに加え、「恋愛をすればいつも同じ行動パターンになる」と話していた。彼女は異性と付き合い始めると、自分が主導権を握り、相手を自分の思い通りにしようとする。そしてそのような自分の姿が、「父親そっくり」と思うことがこれまで何度もあったという。彼女は嫌がっていた父親の「亭主関白」という姿が、恋愛中の自分に乗り移っていることを感じていた。彼女はこのことについて、「父が亭主関白で、家ではお父さん第一主義だった。それが本当に嫌だった。でも今になると、お父さんくらい強引な男性じゃないとはっきりし過ぎていて私を扱えないって思う」と話していた。

そしてこの女性は、自分の恋愛に父親が介入してくることを経験していた。彼女が以前交際していた恋人のことを、父親は非常に気に入っており、父親とその恋人は電話で話したり、食事に行くなど、交流を深めていたという。その後、彼女は恋人と別れたが、それを知った父親が激しく落ち込んでいたことを、彼女は今でもよく覚えていると話していた。この女性は、「自分」と「恋人」の関係であっても、そこには「父親」がかかわってくることを既に経験していた。さらに、「もし、私が今後結婚することがあれば、父親が相手を気に入らないと（結婚は）無理だと思う」と話していた。彼女は、自分の恋愛に父親の姿が反映されているだけではなく、今後も恋人と自分の間に、父親が再び介入してくるのではないかと考えていた。

この女性は「自分は自分」という意識を持ち、自分自身という「個」を重視し、さらに自分は周囲からは独立した「個」であることにこだわっていた。一方、父と自分を切

り離せないことも強く感じていた。彼女は父親自体を嫌っているのではなく、父の独裁的な態度を嫌っているのだが、そのような父の姿が自分自身にも受け継がれていることを何より彼女自身が理解していたと言える。彼女が父の姿を見ながら生きているという状態は、昔も今も変わらないと言えるだろう。

さらに彼女は現在、父親と同じ職業に就いている。だが、業界では名があるという父親から離れ、父親の存在を伏せた上で仕事をしている。彼女は幼い頃から父親の態度を嫌がり、さらに父親に激しく反発していた時期もあったというが、それでも彼女が父親と同じ職業を志したということは、彼女がずっと父親の姿を見ながら生きてきたことの表れなのではないだろうか。そして父親は、今も相変わらずの亭主関白ぶりだというが、彼女がその亭主関白さを嫌がることはあっても、父親の存在やその人間性を否定するようなことをインタビューにおいて口にすることはなかった。

この女性は自分の確固たる考えを持っており、さらに他の研究参加者と比較しても、他者や周囲、そして世間を気にするような発言をすることはなかった。だが、彼女が唯一気にするのは父親であり、自分を貫こうとすると同時に、父親と一心同体であるような側面も持っていた。それはつまり、独立的自己観を持ちつつも、相互依存的自己観も併せ持っているような状態である。自己観の質問票調査において、彼女は独立的自己観と分類されており、しかも彼女の相互依存的自己観の点数は26名の研究参加者の中で最も低かった。だがそれと同時に、彼女と父親の関係は共依存であり、それは彼女が幼い頃から変わっていないと言えるだろう。

4-2-4-2. 34歳既婚男性・子有り (m-5)

この男性は確固たる信念を持っており、それは恋愛においても一貫している。彼が好きになる女性は、「勉強ができる人。インテリジェンスが高い人。そして顔がいい人」だといい、これは彼の妻に当てはまっているという。そして結婚前は、異性から好きになれることが多かったという彼は、「今までの女性は自分を愛してくれ、色々してくれたけど、それが面倒になった」と言い、さらに「こちらがどれだけ相手に夢中になれるか。自分が相手を追いかけていたいと思うかが重要」と話していた。つまり、基準は自分であり、自分の意思に基づいた行動をしていた。そしてそれは恋愛だけではなく、仕事においても一貫している。

彼は仕事に没頭しており、「仕事にすべてのパワーを注ぎたい」と考えている。自分が楽しいと思う事にはのめり込むという彼は、仕事の妨害となるものはすべて排除して

いた。例えば、「これまで別れ際以外の場面で、女性と喧嘩をしたことはない。喧嘩には生産性がない。そこに力を注ぎたくない」と話しており、自分がやりたいことを妨害するもの、そして邪魔する人間は一切受け入れないという立場を取っている。そして彼が、「勉強ができる人」を好きになるのには理由がある。彼はスポーツ推薦で高校に進学したこともあり、「自分は基本的な勉強ができていない」と感じているという。だからこそ、「勉強をして、その成果を職業に結び付けた妻を尊敬している」と言っていた。そして彼は、「妻に対して恋愛感情があるかは分からないけど、大好き。一緒にいたら落ち着く。奥さんが傷つくことは言わない」と話していた。

彼は確固たる自己を持ち、仕事に没頭することで、自己実現をしようとしていると同時に、対人面において、妻をひとりの人間として尊敬し、大切にしている。この男性は、自己観の質問票調査とインタビュー・データから、独立的自己観が優勢であったことは事実であるが、相互依存的自己観の傾向も言葉の端々に示されていた。彼は、「これを言ったら、相手が不愉快になるかもしれない」ということを常に考えながら、人と接しており、「自分は人間関係に対して臆病である」とも口にしていた。この男性は強い意思を持ちながらも、周囲のこと、特に妻のことを気に掛けている。彼は独立的自己観が優位であると共に、周囲、そして特に自分が大切だと思う妻との関係に重きを置いていると言える。

4-2-4-3. 独立的自己観の傾向が強い人々

4つに分類した自己観とインタビュー・データを分析したところ、それぞれの自己観の特徴がインタビュー・データに反映されていた。一方、4つのどの自己観に該当しているかに関係なく、「自らと周囲を切り離さない」という態度や行動は、その態程度はさまざまであったが、研究参加者たちに共通しており、これは独立的自己観を持つ者も例外ではなかった。

本研究では、周辺化型自己観および独立的自己観の傾向が強い者が、それぞれ7名ずつと最も多かった。一方、前述の2名も含め、独立的自己観の傾向が強い者はその自己観の特徴を顕著に示すと同時に、「相互依存的自己観」に沿った考え方を持っていることもインタビュー・データから明らかになった。これは、「文化的」レベルからの自己観研究で導かれた「日本社会では相互依存的自己観が優勢である」(Markus & Kitayama, 1991)ということに関連していると言える。日本社会は、「相互依存的自己観」の傾向が強いとされているが、その日本社会には今回の研究参加者7名のように「独立的自己

観」を持つ人間も存在する。人は所属社会からの影響を受けることは避けられないため、自分が独立的自己観であっても、相互依存的自己観の影響が強い日本社会で生きることには、「日本社会が持つ自己観（＝相互依存的自己観）」と「自分の持つ自己観（＝独立的自己観）」の両方を併せ持つことにつながるのだろう。だからこそ、そのような日本人はどの自己観を持っていたとしても「周囲（＝相互依存的自己観）から自分を切り離せない」という特徴を持つようになるのではないだろうか。

本研究での自己観調査の集計作業の結果、独立的自己観を持つ7名の相互依存的自己観の点数は、平均値（70.7）より低かった。この理由により、この7名は独立的自己観に分類された。だが「数値」には表れない、そして「数値」だけでは分からない、この7名が持っていた「相互依存的自己観」の傾向が、それぞれの「インタビュー・データ」に反映されていたことも事実である。これはパンチ（2005）が述べている「質的データは、世界を『言葉』で表した情報である」ということを示していたと言えるだろう。

本研究において、筆者は研究対象者の恋愛を理解するにあたり、それぞれが持つ過去の経験や人生観、恋愛観に関する「主観的意味」を明らかにし、数値から読み取れる傾向や仮説を検証するのではなく、研究対象者それぞれの「言葉」に込められた「意味」を読み取っていくことが重要であると考えている。そして、この「独立的自己観」を持つ研究参加者のインタビュー・データを何度も読み返し、向き合った結果、「独立的自己観を持つ者であっても、相互依存的自己観の傾向も併せ持っている」という事実を導くことができたのではないかと考えている。

本研究が指摘した、「独立的自己観を持つ個人でも、相互依存的自己観の傾向を持っている」というこれまでの先行研究では言及されていなかった点に関連し、日本人にとって、「相互依存」はどのようなことを示すのかについて以下考察を行う。

4-2-5. 周囲から切り離せない自己

自己観は「文化的」レベルというより「個人的」レベルの問題となっているという指摘（Kim et al., 1996）に基づき、本研究における26名の自己観を4つに分類し、その特徴やそれぞれのコミュニケーションについて考察した。その結果、「独立的自己観」を持つ者でも、「自らを周囲から切り離していない」という特徴を持っていることが明らかになった。もちろん、独立的自己観の傾向が強いからといって、相互依存的自己観の傾向が全くないというわけではないだろう。だが、この独立的自己観の傾向を持つ者が、その自己観と同じくらい相互依存的自己観の傾向が強いのであれば、その研究参加者は

2 文化型自己観に分類されていたはずだが、結果はそうではなかった。実際に、独立的自己観を持つ者たちの「自らを周囲から切り離していない」という点は、今回のインタビュー調査におけるさまざまな発言から確認できたが、このことはこれまでの自己観研究では指摘されていなかった。このことを受け以下、「相互依存的傾向が強いとされている日本社会において、独立的自己観を持つ者が具体的にどのようなコミュニケーションを行っているのか」について注目する。なお、先に述べた独立的自己観の傾向が強い2名の研究参加者（41歳未婚女性 f-11、34歳既婚男性 m-5）以外の独立的自己観の傾向が強かった3名のインタビュー結果を中心に考察を行うが、この3名は独立的自己観を持ちながら相互依存的自己観の傾向を示す考えを持ち、その傾向がコミュニケーションに特に顕著に表れていたという理由で選定した。

4-2-5-1. 41歳既婚男性・子有り（m-1）

この男性は、「ギブ&テイクの関係が成り立っていないといけない」、「依存型で自分で物事を決められない人とは付き合えない」など、人間関係において現実的、かつ、合理的な考えを持っている。

彼には放浪癖があり、「自分は人間関係がウザくなる。人とのかわりに嫌気がさすことがあり、知らない人ばかりの所に行きたくなる。でも、誰も知らない人ばかりの所に行くと、人に頼らざるを得なくなる。そういう時は人に頼るし、人に頼ることが重要であると学んで帰ってくる。高校を卒業して2年くらい、高速道路でヒッチハイクをしていた。『こんな出会いがあるんだ』と思った。みんな優しくしてくれた。色々な人にお世話になったので、今度は自分が人をお世話する仕事をしようと思った。コミュニケーションが大事だと思った」と話していた。

この男性は明確な自己を持ち、人間関係についても合理的に捉えており、独立的自己観の傾向が強い。一方、若い頃にヒッチハイクをして見知らぬ人に助けてもらうなどの経験をしたことで、その後、他人をサポートしたいと医療の道を志し、現在もその職に就いている。いくら自分が「個」であることを主張しても、自分と周囲を切り離せないということをこの男性は若い時に経験し、その経験が今も彼の中で生きている。

さらにこの男性は自身の恋愛を振り返り、「本当に相手との関係を継続させたいと思う時は『ちゃんと話し合おう』と思う。『もうどうにでもなれ』、『何でこんな思いをしてまで、付き合わないといけないのか』みたいに思うこともあった。だけど、『一時の感情によって、この人は突き放してはいけない。だから歩み寄ろう』ということも学

んだ」と話していた。この男性は、相手と深く向き合いながら関係を築いていくことに価値を見出している人でもあると言えるだろう。彼は、自分と親密な相手との関係を深めていくこと、そして他者によって人間は支えられているということ、自分の過去の経験から学んでいた。

4-2-5-2. 43 歳未婚女性 (f-20)

この女性は恋愛について、「恋愛はまあ重要。自分を成長させてくれるから。毎回の恋愛で自分が成長していると思うから」と話し、さらに「1+1 が 3 になるのが恋愛。2 だったらいけない。お互いにとってプラス効果がなければ。金銭的なことではなく、成長という意味で」というように、恋愛は自分が成長するためには必要なものであるが、それが望めないのなら、無理に恋愛をすることはないと考えている。

だが一方、彼女は恋人ができると、相手にそして関係に依存し始める。「彼氏は家族みたいな感じ。自分のことで我慢してもらうこともあるし、自分が我慢することもある」と話していた。彼女は、「自分のためになる恋愛以外はらない」のように、恋愛において、独立的自己観の傾向を表す考えを持っている。だが、恋人ができるとそれまでの自分が仮の姿となり、恋人に対して自分の家族であるかのような振る舞いをし、さらに相手に「役割」を求めるようになる。また、彼女は同性の友人との距離も近い。「女友達は姉妹のようなもの。一緒にいて空気みたいな。緊張せず何でも言い合える」と話していた。この女性は頭の中では人間関係を合理的に考えているが、実際に親密な相手を目の前にすると、一気に相互依存的な関係を求めるようになる。彼女は、親密な相手と自分は「一心同体」という認識を持っていると言えるだろう。

4-2-5-3. 46 歳既婚女性・子有り (f-23)

この女性は 20 代後半で離婚した後、カナダ人男性と再婚し、香港、アメリカ、東京、バリ島などで生活をした経験を持つ。この家族が東京から最近まで住んでいたバリ島に移住した主な理由は、「サーフィンができるから」だったという。現在サーフィンをしているのは夫だが、元々サーフィンを始めたのはこの女性であり、その趣味に付き合いされた夫がサーフィンにのめり込むようになっていた。この夫婦は妻が積極的に行動を起こし、夫がそれに合わせることが多いという。

彼女は自分のことを、「空気が読めない。とんちんかん。我がまま。協調性がない」と話していた。一方カナダ人の夫について、「突拍子もない私を受け入れてくれている。

彼は慎重に慎重を重ねるタイプ。彼には冒険心や決断力はない。それを補っているのは私」と話していた。性格的に正反対の二人は、互いを補完し合いながら関係を維持しており、それは実生活においても同じことが言える。彼女は現在、夫の仕事のサポートをしながら家事全般を行っている。彼女は、「今の生活が経済的に安定しているからこそ、夫との関係を維持しようと思っている。生活さえ安定していればいい。旦那は料理とかしなくていい」と話していた。性格的には彼女が夫を引っ張っているが、経済的には夫に支えられている状況であり、彼女は今の生活を維持することが重要だと考えている。彼女がそのような考えを持つようになったのには理由がある。

彼女は20代後半までキャビン・アテンダントとして働き、経済的にも自立し、さらに合コンに頻繁に参加するなど交友関係も広く華やかな生活を送っていた。彼女は幼い頃からキャビン・アテンダントになるのが夢であり、学生時代はキャビン・アテンダント養成学校に新幹線で通っていた。また苦手な水泳を克服するなどの努力を続けた結果、夢を実現させた。そして東京でキャビン・アテンダントとしての生活が始まったが、それと同時に挫折を経験したという。彼女は、「東京では地方出身者の自分は何者でもないと思った。同僚は高学歴で、彼女たちのお父さんもお偉いさんばかりだった」と話していた。この経験が後に、彼女の母親が持つジェンダー・ロールや結婚観へと彼女を近づけることになる。

彼女の母親は、「生活が安定するのが一番。経済的に安定することが重要で、女性が男性並みに稼ぐのは難しい」ということを、娘であるこの女性とその妹に対して繰り返して言っていたという。そして彼女自身も、「キャビン・アテンダントを一生続けることはできないと思った。だからこそ、結婚相手には稼いで欲しいと思っていたし、安定して生きていくためにはそうしなければならないと思っていた。今思うと、私が一生懸命キャリアをつければ良かったのにも思う。でも、キャビン・アテンダントとして働き続けることは体力的に無理だと思った。航空業界にも未練はなかった。だからこそ、仕事に対して野心があり、将来性のある男性に目が向くようになっていた」と話していた。そして、その考えは2回目の結婚をした今でも変わらない。「将来に対する野心や展望がない男性は嫌。良い方向に向かおうとしない人は嫌。仕事して出世さえすればいい。家のことは私が全部やる」と話していた。現在、夫の収入で経済的安定を得ている彼女は、これからも今の生活を維持したいと考えている。また、「娘の成長が楽しみ」という発言もしており、自分自身の生活や生きがいを、夫や娘に託しているようであった。

そして彼女は、結婚前は恋愛にスリルを求め、ゲーム感覚で恋愛を楽しんでいたという。彼女は、「若い頃に一通り恋愛を経験したので、もう気が済んだ」と話し、さらに「もう恋愛はしないと思う。第一線での私はもう終わった。しょぼい人生よ」とも口にしていた。

彼女はかつて、幼い頃からの憧れの職業に就くなど、自分で自分の人生を切り拓いていく積極性を持っていたようだが、今はその面影はほとんどなく、現在の安定した生活を維持することに重きを置いていた。彼女は、「安定した生活」そして「夫と娘」と共存しながら今を生きていると言える。

4-2-5-4. 35 歳未婚女性 (f-21)

上記3名はすべて、独立的自己観の傾向を持つと同時に「自らを周囲から切り離していない」という特徴があった。一方、独立的自己観には分類されていないが、35歳未婚女性 (f-21) は「周囲から切り離せない自己」を持つと同時に、その自己形成に影響を与えたと考えられる経験を数多くしていた。このことを受け、この女性について以下考察を行っていく。

質問票調査によると、この女性の自己観は「周辺化型」である。周辺化型自己観は、独立的自己観と相互依存的自己観の両方の特徴があまり見えず、そして物事を否定的に捉えがちで、周囲とのつながりを積極的に持とうとしない傾向がある (Yamaguchi et al., 2016)。この女性の恋愛に対する考え方や恋愛スタイルは、いわゆる一般的なものではないと考えられるが、それには過去の経験が反映されていた。

この女性は男性に対する不信感を持ち、「男性や恋愛には期待しない」という考えを持つ。その男性観や恋愛観は、彼女の「周囲の男性」によってつくられていた。彼女は、不倫を繰り返す父親の姿を見ながら育ったという。「父の不倫が原因で、家の中がゴタゴタしているのを、大人になるまで何度も見ている」と話していた。さらに、自らの接客業のアルバイト経験などからもまた、「男性は決して誠実なものではない」と感じるようになったという。さらに最近も、「離婚歴はあるが子供はいない」という男性から食事に誘われたが、実際はその男性は既婚者で、子供がいたことを彼女は自分で突き止めたと話していた。彼女は男性と関係が深まりそうになると、事前にその相手のことをSNSを使って徹底的に調べるという用心深さがある。父親の不倫、アルバイト経験、さらにはこのような男性との出会いを通して、「ひとりの男性を追いかけることで傷ついたら、自分の気持ちを分散しておいた方がいい」と考えるようになったという。その結

果、彼女は独自の恋愛スタイルを貫くようになっていた。現在、この女性には 10 名前後の男性が周囲にいる。このような状態を維持しているのは、「男性に対する気持ちを分散したいから」であり、過去の経験が彼女をそうさせていると言える。だが、これは彼女の「理想の恋愛」とは全く異なる。

彼女の理想の恋愛とは、相手と四六時中一緒にいて、連絡を密に取り合い、そしてすべてを共にすることだという。それにもかかわらず、彼女が恋愛対象をひとりに決めない理由のひとつは、先に述べた通り男性に対する不信感によるものであるが、それとは別の理由もある。それは、「本当に好きな相手ができると、自分が相手に過度に依存するから」と彼女は話していた。彼女は、「気持ちを（複数の男性に）分散しないと、ネットストーカーになってしまう。相手が連絡を返してくれなかったら、その人のことを調べまくる。許されるなら、相手に盗聴器を仕込んだり、スマホをハッキングしたい。そうするのはただ相手のことを知りたいから」と話していた。気になる異性ができたら、その相手のことを知りたいと思うのは自然なことかもしれない。だがこの女性は、好きな相手の SNS を常にチェックし、「相手がログインしているってことは、携帯を見ているんだな。23 時になったからもう寝る頃だろうな。今、ログオフしたから携帯置いたんだな」のような、まるで監視ともとれるような行動をすることもあるという。

このような彼女の行動を理解したり、彼女から頻繁に送られてくるメッセージにすぐに返信するような日本人男性はあまりいないという。だからこそ、彼女の行動に合わせてくれない日本人男性が相手であれば、彼女は相手の男性に対して 3 日置きに連絡をするなど、相手のペースに合わせる。そして、その男性と連絡を取らない時間は、別の男性で「補完」しているという。この女性によると、「外国人男性」は大半の日本人男性とは違い、彼女の頻繁な連絡にすぐに反応したり一緒にいることを受け入れてくれることが多いという。現在彼女の周りには 10 人近い男性がいるが、その中で彼女が恋人だと認識している中東出身の男性がいる。その男性は、彼女の頻繁な連絡にいつも付き合ってくれるため、彼女はこの男性と一緒にいることに心地良さを感じているという。なぜなら、彼女はこの男性といつでも「つながっている」からである。

そして、この女性の過去の「失恋経験」も独自の恋愛観を形成することに関連している。彼女には大学時代に付き合っていた恋人がいた。「大学を卒業したら結婚すると思っていたけど、彼が地元に戻って遠距離になって 1 年くらいして終わった。『恋愛が終わる』っていうことを知った。その人のことはずっと覚えている。最初の恋愛の挫折。結婚するって盛り上がっていたけど、『結局、結婚しないんだな』ってことを経験した。

その後、相手が別の女性と結婚することを知った。大学時代のサークルの掲示板に、彼が恋人と連名で結婚の報告を出していたことに腹が立ち、自分の携帯を叩き割った。感情が大きく揺れたのが彼だった。その経験をしてから、『恋愛がどうやって終わるのか』ということを考えるようになった。『この人と付き合っても、別れる時はどんな感じになるのかな』と考えるようになった」と話していた。

この女性は、自分の気持ちを分散させるために複数の男性がいつも自分の周りにいる状態をつくっている。それは複数の男性と「つながっている」状態であると言えるだろう。彼女の理想は、「ひとりの男性と一緒にいること」であるが、その状態を心地良いと思う一方、自分がひとりの男性を好きになると「ネットストーカーになってしまう」と話していたように、相手の行動を追い、そして頻繁に連絡をして「つながっている」状態を過剰に求める。だが、それこそが自分を追い詰めることになるかと理解しているからこそ、複数の男性との「ゆるいつながり」を選んでいるのではないだろうか。さらにこの女性は、両親や姉とも仲が良く、女友達とも飲みに行ったり、頻繁に SNS をしていると話していた。彼女は誰かといつも「つながっている」状態を意識的につくっていると考えられる。

一方彼女は、「人をあまり好きにならない。人にあまり興味がない。好きになる人があまりいない。私が本当に好きになったらネットストーカーになったり、『その人と連絡取りたいな』って思うけど、滅多にあることじゃない」とも話していた。この女性が心から好きだと思える男性はそういないとしても、そのような相手ができたら必死に「つながろう」とする。そのような対象がいなければ、複数の男性と「つながっている」状態をつくる。さらにそれは女友達でも誰かと「つながる」状態をつくるのは同じである。つまり彼女は、つながりに「親密さ」を求めているのではなく、「つながっている」こと自体が重要なのであり、「つながっている状態」に依存しているのだろう。

この女性は、独立的自己観と相互依存的自己観のどちらの特徴もあまり持たない「周辺化型自己観」に分類されている。Yamaguchi ら（2016）によると、この自己観を持つ者は、物事を否定的に捉えがちで、周囲とのつながりを積極的に持とうとしない傾向がある。一方、この女性は周辺化型自己観の特徴とは違い、周囲につながりを求めている。だが先にも述べた通り、彼女が意味する「つながり」とは信頼関係によって構築されたものではない。彼女にとって重要なのは「つながりの数」であり、かつ、「複数のつながっている状態」を維持することであったと言える。

この女性はひとつの例に過ぎないが、彼女をはじめとして、「誰」または「何」とつながるかではなく、「つながっている状態」そのものに意味があると考えている者は多いのではないだろうか。多数の「つながり」に依存しているこの女性は、現代の日本において、決して珍しいというわけではないだろう。この女性は、SNSを頻繁に利用していると話していたが、SNSを通じて「つながり」を維持している人々は、若者を中心に増えている。SNSの普及により、人は他者と簡単に「つながる」ことができるようになっただけでなく、その多くは「つながる」ことに時間を割き、精神的にも依存するようになった。自分の周囲の人々と「つながる」だけでなく、自分の友人のその友人、一度会っただけの名前もよく覚えていない相手、さらに顔も名前も知らない人々とも「つながる」ことは可能であり簡単なことである。そして「つながり」ができた人々へ情報を発信し、その反応を得ることにより、人はさらなる「つながり」を感じる。このような種類の「つながり」には、必ずしも互いを理解し合うことも、共感し合うことも必要ない。そしてこのような不特定多数の他者と物理的に「つながる」ことだけに価値を見出す者は、現実世界において自分の目の前にいるひとりの相手との関係が希薄になる、または面倒になるという状態を自らが引き起こしていると言えるのかもしれない。

この35歳未婚女性(f-21)が「つながり」、その中でも「ゆるいつながり」に依存するようになったのは、父親の不倫を幼い頃から見ていたことなどをはじめとした、彼女が持つ男性観、失恋経験など「過去の経験」が影響しており、さらに彼女が必死に「つながり」を求めているのは「自分自身を守る」、さらには「ひとりの相手と向き合うことへの恐れ」などが根底にあると考えられる。彼女は幼い頃から、「誰かとつながりたい」という感情を持っていたわけではないだろう。しかし、彼女自身の「過去の経験」がそのような感情を抱かせ、行動を起こさせていると言えるのではないだろうか。

4-2-6. 周囲から切り離せない自己を持つ人々

本研究において独立的自己観の傾向を持っていた研究参加者たちが、自分の強い意思を持ち、それに伴う行動を起こしていたことは共通していた。だがそれと同時に、他者との関係を気に掛け、周囲から自分を明確に切り離さず、さらに社会からの影響も受け入れているという側面も持っていた。彼女/彼らは、独立的自己観の傾向を優位に持ちながらも、相互依存的自己観の傾向も併せ持っていたと言える。そして何に対して依存しているのかという「依存の対象」が、さまざま存在することも明らかになった。また周辺化型自己観のように、どちらの自己観の特徴もあまり持っていないとされる者であっ

でも、何かに「依存」しているということが確認できた。依存の対象は、家族、恋愛パートナー、世間の目、他者、つながっている状態などであり、コンテキストによってその対象が変わることも分かった。さらに、個人が持つ「過去の経験」が、他者や周囲へ依存することに影響を与えていた。例えば、世間に依存している者は、子供の頃から世間の目を気にしていたわけではない。だがこれまで生きてきた中で、自らが経験してきたことなどが影響して世間を意識するようになり、そしてそれが自分の一部となり、現段階において世間の目を気にせずにはいられなくなったと考えられる。また、「4-2-1-3. 相互依存的自己観の傾向が強い人々」(p.95 -96)でも述べた通り、「相互依存的自己観」の傾向が強い者たちも、誰かにそして何かに依存していたが、その依存対象は他の自己観を持つ者と同様にそれぞれ異なっていた。

本項では、強い自己を持ち周囲から自らを切り離していると考えられている、独立的自己観を持つ人々のコミュニケーションを考察した。その結果、彼女/彼らは独立的自己観の傾向を顕著に持っている一方、何かに依存をしていることも明らかになった。それは周辺化型自己観、そして相互依存的自己観を持っている者にも共通していたことである。つまり、どのような自己観を持っていても、日本において人は自分以外の何かに依存し、そして周囲から自らを明確に切り離してはいないと言えるだろう。

4-2-6-1. 4つの自己観以外の自己観

本研究では研究参加者 26 名の 4 つの自己観を導くため、研究参加者が独立的自己観または相互依存的自己観のどちらに該当するかを調べた。その後、Kim ら (1996) の 4 つの自己観の分類方法に沿って、研究参加者それぞれの自己観を、独立的自己観、相互依存的自己観、そして両方の自己観の特徴を持つ 2 文化型自己観、さらにどちらの文化の特徴もあまり待たない周辺化型自己観の 4 つに分類した。研究参加者たちを 4 つの自己観に分類した後、研究参加者のコミュニケーションを「個人的」レベルに基づいた自己観の観点から考察し、その個人のコミュニケーションや背景にある現象などを説明した。一方、新たな疑問も出てきた。

「個人的」レベルでの自己観を考察したとはいえ、その個人が持つ考え方およびコミュニケーションは実に多様であることに加え、30-40 代の研究参加者は、これまでさまざまな恋愛経験や人生経験を経て現在に至っている。そのため個人の経験値が幅広く、数値上は「4 つの自己観」のいずれかに該当したとしても、研究参加者全員を、その特定の自己観からだけでは説明しきれないことが分かった。本研究において、4 つの自己

観の特徴には当てはまらなると考えられる研究参加者がおり、その特徴を表した自己観を「分離型自己観」として、以下詳細を述べる。

4-2-7. 分離型自己観

4-2-7-1. 34 歳既婚男性・子有り (m-14)

この男性は、4つの自己観の中の「2文化型自己観」に属している。彼の人生の目的は「仕事で成功を収めること」であり、それを達成するために「日本社会に適応すること」が不可欠であると考えている。

彼は既婚者で子供もいるが、「妻には恋愛感情はない」、「家族は大切にしていない」と話していた。そのような彼が家庭を持ち、維持し続けているのには理由がある。「(自分が就いている職において)離婚はネックになる。家庭を持って『まとも』である。

『社会の一員として、まともに行っていますよ』という意味では、結婚というツールは重要。社会的アピールが出世には必要」と話していた。彼は、日本社会、そして彼の職種で、「受け入れられる人間」になるための手段のひとつが、家庭を持つことであると考えている。さらに、「社会でうまく生き残っていくには、結婚というツールをうまく活かしたいし、上を目指すには日本の慣例に従うことが必要だと思っている。本音と建前を使い分けるのが大人だと思う」と口にしてきた。この男性は、自分は着実にキャリアを積んでいると認識していると同時に、日本社会が望む「既婚者」、「親」という役割も果たしていると考えていた。

さらにこの男性は、自分の目的を達成するにあたり、自分の妻にも独自の「役割」があると考えていた。彼は結婚する際、「自分は将来偉くなると確信していたから、自分のことを支えてくれる人、口出しをしない人を選んだ」と話していた。そして結婚して10年になるという彼は、「奥さんは家事も育児もすべてやっている。奥さんはこういう自分を理解してくれている。...〈中略〉...奥さんは悪く言えば家政婦、良く言えば最高のパートナー。縁の下の力持ち。自分が活躍できているのは奥さんのお陰」と話していた。この男性は、自分が「仕事で成功を収める」という目的を達成するために妻がいる、つまり妻の「役割」は自分を支えることであるとと考えていた。この男性にとって、社会で成功するために婚姻関係は欠かせない。そしてこの男性の妻が、日々どのように感じながら夫や子供と生活しているのかは分からないが、今現在この夫婦の婚姻関係は保たれている。だが、両者間のバランスが保てなくなった時、関係を維持することは難しくなるかもしれない。

Carpenter (2017) は、恋愛には「力関係」が存在し、関係に対する「依存度」が高い者の方が、力関係においては下の立場であると述べている。関係に対する依存度が相手よりも高い者は、関係を維持し続けるために、自分のパートナーにも「関係を維持したい」と思ってもらうような動機や利益を与えようとする。これをこの男性に当てはめてみる。彼は出世には欠かせない現在の婚姻関係を維持したいと思っている。出世が人生の目標であるこの男性にとって、出世の絶対条件である婚姻関係に対する依存度は高いと言える。そして妻もまた、現在の婚姻関係を維持している。しかし、妻が今の状態や関係性に疑問を持ったり、関係を解消したいと考えるようになると、両者間のバランスは保てなくなり、この婚姻関係は崩壊する可能性もある。だがこの男性のように、「出世するには家庭を持つことが重要」と考えている者は、婚姻関係を手放そうとはせず、関係にさらに依存せざるを得ない状況を招くと考えられる。

またこの男性は、「人とつながりたい」という願望を強く持ち、他者と共依存の関係を求めている。彼は学生時代、恋人に浮気をされたというが、その後も半同棲の生活を続けていた。その理由を、「彼女は僕にしか甘えられない。浮気をされたから男としては駄目だったのかもしれないが、人として彼女を支えてあげられると思っていた」と話していた。さらに彼は恋愛以外の状況でも、「普段から常に誰かとつながりたい。男友達でもいい。僕はすぐにメールの返信をするから信用されるし、困った時に周囲は自分を頼ってくれる。仕事でも『僕がいれば安心』と言われることに、自分の存在意義を感じている。どんな仕事でも引き受ける」と話していた。恋愛だけではなく、それ以外のコンテキストにおいても、「誰かに頼りたい」、「誰かとつながりたい」という気持ちが強い。だが彼は、他者に心理的なつながりを求めている一方、それを自分の妻には求めている。この男性は、「恋愛と結婚は別。結婚しても恋愛はしたいが、その相手は妻ではない。恋愛をするなら外に女の子をつくる」、「全国に彼女をつくりたい。成功者は野心家だし」とし、妻について「妻には恋愛感情はない。やはり（子供ができて）お父さんとお母さんになった時点で、男と女ではなくなった。子供を預けてデートするなんて思わない」と話していた。この男性は、妻とそれ以外の女性に対しそれぞれ異なる役割を求めている。

そしてこの男性は、「仕事で成功を収める」という自身の目的を達成するために、独自の生き方を選択している。結婚して家庭を持つこともそのひとつである。「社会が求めているから自分も家庭を持つ」ということが、彼が本当に望んでいることなのかは分からない。仮にこの男性が、今と同じように自己実現をしようとして、それが独立的自

己観の傾向が強い社会というコンテキストであれば、彼が選択する生き方、そして結婚観や家族観は、今とは異なっていたのかもしれない。言い換えると、彼が今実際に生きているのは「日本社会」であるということが、彼の目標達成のプロセス、そして彼自身の生き方そのものに大きな影響を与えていると考えられる。

また彼は、「人とつながりたい」という気持ちを強く持っており、「彼女には自分しかない」、「普段から誰かとつながっていたい」、「寂しいから恋人をつくりたい」などの発言がそれを示していた。質問票調査の結果から、彼は相互依存的自己観と独立的自己観の両方を併せ持つ、「2文化型自己観」と分類された。Yamaguchi ら (2016) によると、2文化型自己観を持つ者は、多くの人間とかかわり、他者や周囲と強い関係を構築している。そして、それぞれの状況において自分の感情をコントロールすることでき、自らの感情を周囲と共存させながら、他者との関係を築いていくことができる。この定義に対して、この男性の考え方やコミュニケーションは、ほぼ当てはまらないと言える。さらにこのことは、2文化型自己観を持つ他の本研究参加者のコミュニケーションと照らし合わせても明らかであった。

本研究において、この男性以外の2文化型自己観を持つ者は、その特徴を示すコミュニケーションや他者とかかわり合いをしていたと言える。例えば、夫の浪費癖について、夫と話し合ったり、夫の両親に相談するなどして最終的に問題を解決し、自分の子供と家庭を守った43歳既婚女性 (f-22・子有り)。勉強会に行くなど自分の時間を守りつつも、自分と家族にとって一番いい方法について妻と話し合い、問題を解決し、さらに妻との関係を強固にした36歳既婚男性 (m-4・子有り)。過去の離婚経験から自分を見つめ直し、自分が何を大切にしているかを明確にした上で再婚し、現在の妻や他者のことを理解しようとしている40歳既婚男性 (m-9) などがいた。この3名以外の2文化型自己観に分類された残り2名もまた、両文化の特徴を持ちながら、自分の置かれている状況やその時々に応じたコミュニケーションを行っていた。

一方、この34歳既婚男性 (m14・子有り) のコミュニケーションを、2文化型自己観の特徴や残り5名の研究参加者のコミュニケーションと照らし合わせた結果、本研究ではこの男性を、「2文化型自己観を持つ者として説明することは難しい」という結論に至った。Yamaguchi ら (2016) の主張や、本研究における2文化型自己観を持つ者たちとは異なり、彼は2つの異なる自己観を融合させたり、その時々において適切な判断をしながら、コミュニケーションを通して「人間関係」という産物を生み出すことはしていない。むしろこの男性は、2つの自己観を完全に「分離」させていたと言える。例え

ば、「仕事」というコンテキストにおいて、彼は独立的自己観の傾向が見られる。それは、仕事で成功するための手段のひとつとして考えている「家庭」というコンテキストにおいても同様であった。だが、それ以外のコンテキストでは、「共依存」の関係を他者に求めており、「常に誰かとつながりたい」という気持ちが非常に強い。妻以外の女性、同僚、男友達などと一緒にいる状況においては、相互依存的自己観の傾向を示していた。

さらにこの男性は、「人間関係が根本にある」と発言していたが、信頼関係に基づき他者と人間関係を構築したり、親密さを深めていくなどに関する自らの経験を口にすることはなかった。この男性は2つの自己観の特徴を持っているが、それぞれが完全に2つに分かれてしまった状態であったと言える。ある場面では「独立的自己観」の特徴だけを示し、また別の場面では「相互依存的自己観」の特徴をだけ示す。Yamaguchi ら (2016) が提示しているような、「自らの感情を周囲と共存させながらも、他者との関係を築いていく」という、2文化型自己観の特徴を表しているとは言い難い。このことから、この男性は2つの自己観を持ちながらも、その2つがはっきりと分かれている「分離型自己観」として捉えることができるのではないだろうか。

第5章 〈研究4〉「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」 の日本人への適用

1. 欧米のコミュニケーション理論の異文化への適用

前章では「自己観」に注目し、日本では相互依存的自己観が、そして欧米では独立的自己観の傾向が強いとす「文化的」レベルからの考察ではなく、その焦点を「個人的」レベルに当て、研究参加者の自己観を考察した。その結果、日本人はどの自己観を持っていても、「周囲から自らを切り離せない」という特徴を持っているということが明らかになった。

一方、コミュニケーション学領域において、「個人」の視点から日本人のあり方やそのコミュニケーションが追究されることはこれまであまりなかったと言える。なぜなら、コミュニケーション学は、欧米を中心とした研究者たちの貢献によって発展してきた歴史がある。そのため欧米諸国、特にアメリカ文化やアメリカ人の自己観などに合わせた理論構築がなされてきたことは否めない。「欧米的視点に基づいた理論や概念を、その

ままのかたちで異文化に適用することはできないのではないか」と指摘している研究者は多い（例：Kim, 2002; Rothbaum et al., 2000; 中西、2011; 浜口、1982; 宮原; 2000）。仮に欧米で構築された理論を、欧米と文化のおよび社会的背景が異なる人々に当てはめたとしても、その結果は欧米で得られたものと必ずしも一致するわけではないだろう。

現在、「日本的視点からの恋愛」を説明することができる理論や概念は、ほとんど存在しない。本研究では、日本社会で育ちその影響を受けている人々のコミュニケーションを「十分に説明することはできない」、「当てはまらないかもしれない」ということを理解した上で、敢えて欧米の理論を日本人に適用する。そして、欧米人との共通点や欧米人とは異なる日本人の特性を際立たせ、日本人のコミュニケーションを説明するための理論構築の一端を担う貢献を果たしたいと考えている。

2. 欧米のコミュニケーション理論の異文化への適用の例：

「Relational turbulence model / 関係乱気流モデル」

本研究は日本社会で育ち、その影響を受けている人々の恋愛コミュニケーションに注目しており、本研究の核のひとつとなるのが恋愛関係における「変化」である。宮原(2000, p.71)によると、「人間は常に変化し続け、人間が二人でつくる関係も常に変化を続けている。どんなに安定しているように見える人間関係も、お互いが努力して『安定』という状態をつくり出しているのもあって、人間関係が静止状態に入っているのではない。『いつもの状態』とは、何もせずに保たれているわけではない。さらに恋愛関係において、両者が望むような関係が常に維持されることはない。人間関係とは変化し続けているのである (Baxter & Montgomery, 1996; 2000)。そしてその変化には、「望まない変化」が含まれていることもある。実際に恋愛関係が構築され、維持されている状況において、思いがけないことや望まない出来事が起こることは決して珍しいことではない。そしてそのような変化もまた二人の関係に影響を与える。

アメリカのコミュニケーション研究者 Solomon, Weber, & Steuber (2010) を中心に生み出された「Relational turbulence model/関係乱気流モデル」は、二人の関係において新しく起こった「変化」が、感情、認知、コミュニケーションを複雑化していくことを説明している。そして何らかの変化が起きた時、二人の間に「不確実性」と「相互依存による相手からの干渉」という要素が頻繁に見られるようになるという。ここでいう「変化」とは、社会的状況や経済的状況そして感情などが、あるひとつの状態から別の状態

に移ることである。例えば、相手に対する愛情の減少、子どもができた、新しいキャリアを得た、職場を解雇された、事故に遭った、親の病気が発覚したなどである。これらの変化によって、二人の間で連携し同意してきたはずの考えや行動などが機能しなくなることもある (Solomon, Knobloch, & McLaren, 2016)。

そして状況や関係性の変化が起こっている時に見られる「不確実性」について、Solomon ら (2016) は次の3つに分類している。まず、自分が今後相手に対してどのような感情を持つのか、自分が二人の関係をどのように考えていくのかなどに関する「自分の不確実性」。次に、相手が自分にどのような感情を持っているのか、相手が二人の関係に対してどれほどの投資を行うのか、そしてどのようなゴールを持っているのかなどに関する「相手の不確実性」。そして最後は、二人の関係は今後どのようなようになっていくのかという「関係の不確実性」である。二人の関係を維持し続けるには、これらの不確実性を乗り越えなければならないと Solomon (2016) らは主張している。

さらに Solomon (2016) によると「相互依存による相手からの干渉」について、親密な間柄になると、互いは依存するようになり相手への干渉も増えていく。そして二人の関係がより深まり、さらにその関係が維持され続けると、両者の間に何らかの変化が起こったとしてもそれを乗り越えられるようになる。仮にその変化が、二人にとって困難、かつ、関係を脅かすような「望まないもの」であっても、実際に二人で乗り越えることにより「望まないもの」から二人で一緒に「達成したもの」へ変わっていくという。「関係の不確実性」そして「相手からの干渉」は、親密な関係を維持することを妨害する要素のように感じられる。しかし、これらは二人の親密さを深め、関係の維持を促進するものであると「Relational turbulence model/関係乱気流モデル」では考えられている。

そして Solomon ら (2010) の研究によると、ある女性は自分が乳がんであることを知った。その事実を夫に打ち明けた場合、「夫はどのように感じるのか」、「どのような反応をするのか」などの自分の病気に対する夫の反応は、彼女にとって不確実なことであった。そして実際に、自分が乳がんであることを夫に告げると、夫は治療法や手術などについて干渉してきたという。この乳がんという病気は妻が患っていたものだったが、それは夫にとっても重要な問題であり、妻の病気は「夫婦の病気」となった。

また別の研究では、ある既婚女性は自分が不妊症であることを知った。この夫婦は結婚する際、「将来、二人の子供を持とう」と話していたという。そのため妻は、「自分が子供を産めない」という事実を夫に伝えることで、婚姻関係が解消されてしまうのではないかと考えていたという。だが夫は、この事実を「二人の問題」として受け入れ、子

供を持たない、または養子を迎えるなどの選択肢について二人で話し合い、この夫婦独自の解決方法を見つけようとしていた (Solomon et al., 2010)。

この2組の夫婦が経験したように、二人の関係に「変化」を起こすような出来事が起こる可能性は、極めて高いと考えられる。その変化をどのように捉えるのか、その変化を共有するのか、そして変化に対してどのようなコミュニケーションを行うかなどの判断は、二人それぞれ異なるかもしれない。だが、両者の間に望まないことが起こったとしても、それを両者が「二人の問題」として乗り越えることで、その望まない変化は二人に価値ある結果をもたらし、両者の関係性をより強固なものに変えていくことが、先行研究から明らかになっている。

上記の先行研究も含め、これまで「Relational turbulence model/関係乱気流モデル」の研究対象はすべてアメリカ人であり他の文化圏での研究は行われていなかったが、Theiss & Nagy (2012; 2013) によって、この「Relational turbulence model/関係乱気流モデル」をアメリカ人以外に適用した研究が行われた。彼女たちは、恋愛中の韓国人とアメリカ人を対象に、「恋人が自分の意見を尊重する」、「自分が目標達成しようとしていることを、恋人が邪魔していることについて話し合う」、「二人の関係についての話し合いを避ける」という3つを「変化」と想定した。そしてその変化が起こっている時に、「不確実性」と「恋人からの干渉」の2点がどのように関連しているかについて調査した。

その結果、アメリカでは「自分が目標達成しようとしていることを、恋人が邪魔していることについて話し合う」と「恋人からの干渉」の関連が強かった。このことについて Theiss & Nagy (2013) は次のように説明している。アメリカでは、個人の目標を達成することが重要だとされているため (Markus & Kitayama, 1991)、たとえ相手が恋人であったとしても、自分の目標を追いかける行為を妨害されることは受け入れ難いことである。だからこそ、そのような行為を恋人が行った場合、アメリカ人にとって相手と「話し合う」ことが重要なのである。一方韓国ではアメリカとは違い、「自分が目標達成しようとしていることを、恋人が邪魔していることについて話し合う」と「恋人からの干渉」の関連性は弱かった。これは、韓国では他の東アジア諸国同様、他者との関係に依存する傾向が強く、人々にとって重要なのは周囲との調和であり (Markus & Kitayama, 1991)、個人の成功や目標達成ではない (Kitayama et al., 2000; Uchida et al., 2004)。従って、自分の目標を達成しようとしていることを恋人から妨害されることは、アメリカ人

が感じるほど韓国では深刻には捉えられておらず、そのことについて相手と話し合う必要性は低いと考えられていたのだろう (Theiss & Nagy, 2013)。

次にアメリカと韓国の両方で、「不確実性」と「二人の関係についての話し合いを避ける」の2つには関連があり、両文化とも「不確実性」が高い関係や相手であるほど、二人の関係についての話題を避ける傾向にあった (Theiss & Nagy, 2013)。文化にかかわらず、自分たちの不確実性の高い関係に関する話をした場合、自分とパートナーの考え方の相違が浮き彫りになることは十分起こり得ると考えられる。例えば、自分は相手との将来を考えているにもかかわらず、相手はそのようには考えてはいなかった。また場合によっては、相手が二人の関係を否定的に捉えていることが発覚するかもしれない。いずれにせよ、「関係の不確実性」という要素は、関係にいる当事者たちを不安にさせると考えられる。Theiss & Nagy (2013) の調査によると、「不確実性の高い関係についての話し合いを避ける」という点は両文化で共通していたが、その理由は同じではなかった。

アメリカでは人々は自分自身を主体として物事を捉え、そして何より自分自身に価値があると考えている (Kitayama, 2000)。そのようなアメリカ社会で育った者にとって、不確実性の高い二人の関係についてパートナーと話をすることで、「自尊心」が傷つけられることも十分に考えられる。一方韓国では、他者からどのように見られているかということを非常に気にする傾向がある (Theiss & Nagy, 2013)。そのため、不確実性の高い二人の関係についてパートナーと話をすることで、自分の「面子」が傷つけられる可能性もある。この2つの文化において「不確実性の高い二人の関係についての話題を避ける」という行動は共通していたが、そこに至った理由は異なっていた。アメリカでは、「自尊心」を傷つけられることを避ける、つまり「自己評価」に関連する理由だったが、韓国では「面子」を傷つけられることを避けるという「他者評価」に関連する理由であった (Heine, 2003)。

Theiss & Nagy (2013) の韓国人とアメリカ人に対する調査から浮彫りになったのは、それぞれのコミュニケーションは文化的・社会的価値観に則していたという点である。例えば、恋人からの干渉に対し、自分のゴールを邪魔することであれば、それは重要な問題であるからこそ、そのことについて恋人と話し合おうとするアメリカ人、そして、日常的に他者と相互依存的なかかわりを持ち、個人の目標よりも周囲との調和の方が重要であるため、恋人からの干渉はさほど大きな問題ではないと捉える韓国人のコミュニケーション行動は異なっていた。また、恋人と不確実性の高い話題を避けるという行為

は韓国とアメリカで共通していたが、その理由には文化的相違が見られた。不確実性の高い会話を避ける理由として、アメリカでは「自分の『自尊心』を傷つけることへの恐れ」が挙げられていたが、韓国では「自分の『面子』を傷つけることへの恐れ」とされていた。

「異なる文化的背景」を持つ人間が「異なる行動」を起こす理由には、文化的・社会的差異が存在するように、両者が「同じ行動」を起こす時でさえ、そこにはそれぞれ異なる文化および社会的理由が存在する。例えば、電車で「お年寄りに席を譲る」という行動を起こすにあたり、「相手が目上の人だから」、「困っている人を見たらそれを助けるのは当然の行為」、「周囲の人が見ているから」など、さまざまな理由があると考えられるが、これらも文化的な影響を受けていると言える。さらに「幸せ」という概念に関して、幸せを感じるのは「社会的調和」が取れている時だという日本社会にいる人々と、「自己実現」を感じる時に幸せだと感じるアメリカ社会にいる人々にとって (Kitayama et al., 2000)、「何が幸せか」ということ自体がそもそも異なるため、その幸せを手に入れるための行動やコミュニケーションもまた異なると言える。

「Relational turbulence model /関係乱気流モデル」を韓国人とアメリカ人に適用した Theiss & Nagy (2012; 2013) も主張していた通り、個人が属する文化や社会の存在は、人々のコミュニケーションや人間関係に対する考え方に、大きな影響を与える。例えば、Kim (2002) によると、欧米で「自己開示」というのは肯定的に捉えられているコミュニケーション能力であるからこそ、欧米社会で自己開示を積極的に行わない、もしくは自己開示ができないアジア人は、「能力が欠けている」と見なされることもある。だが、アジア人が自己開示を積極的に行わないのは、「周囲との関係を乱したくない」という理由で敢えて控えめな行動に出ているからであり、さらに「謙遜」や「自己卑下」などの否定的自己開示をすることは、アジア文化圏ではむしろ「能力」であると考えられることもある。このように、同じ行動でもその解釈や意味することは文化によって異なる。それはコミュニケーション理論についても同様のことが言える。たとえある理論が、特定の文化や社会にいる人々のコミュニケーションを説明し、予測することができたとしても、それが別の文化や社会においても有効であるというわけではないと言える。

これら Kim (2002) や Theiss & Nagy (2012; 2013)、さらに前述の Rothbaum ら (2000)、中西 (2011)、宮原 (2000) のように、「欧米主導」で構築された理論だけに沿って、「非欧米」文化のコミュニケーションを説明することに疑問を呈しているコミュニケーション研究者は多い。既に存在している理論や概念を「完成されたもの」として捉える

のではなく、それに対して疑問を抱くことや批判的視点を持つことは、今後のコミュニケーション学の発展においても欠かせないことであると考えられる。

3. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」という概念は、「社会的交換理論」(Thibaut & Kelly, 1959)と「相手の価値」を基に、Sidelinger & Booth-Butterfield (2009)によって創出された。この「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」とは、恋愛関係を始めたり、関係を維持することを困難にさせるものであり、具体的には個人が元々持っている特質、これまでの人生を通して手にしてきたもの、周囲の人間関係など、一度手にしたことでのその後の人生において常に一緒に過ごすことになったものである。「関係に持ち込む荷物」には、才能、富、名声、輝かしい経歴、仕事での成功、素晴らしい人間関係などの誇れるものも含まれる。一方、特異な人間性、怠惰なライフスタイル、能力の低さ、借金、犯罪歴、長年の厄介な人間関係などもまた荷物とされている。この後者の「荷物」、つまり「望まない荷物」の方が親密な関係に影響を与える。なぜなら社会的交換理論に基づくと、人は人間関係において肯定的な側面や報酬を最大限にしようとする一方、否定的な事柄やコストを最小限にしようとする。従って、望まない荷物を持っている人間の存在は人間関係においてコストが掛かるため、その価値は低いと認識されている(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)。例えば、男性がある女性と親密な関係を築きたいと考えているとする。だがその男性には浮気癖がありさらに元恋人に暴力を振るった過去もある。もし女性が、「浮気癖」と「過去の暴力」というこの男性の「荷物」の存在を知れば、相手の価値を低く見積もることが予想されるため、この男性との交際を始める可能性は極めて低いと考えられる。

さらにこの荷物に関して、人は他者からの尊敬の念を失うことを恐れるため、自分の望ましくない点を隠そうとする。特に恋愛関係において、人は相手の期待を裏切りたくない、相手から拒絶されたくない、恥をかきたくない、自分の人格を否定的に判断されたくないなどの気持ちが強くなるという。さらに、人間はその時々状況や相手との関係性などを考えた上で相手に何を話すのか、どこまで話すかについて判断する(Derlega, Winstead, Mathews, & Braitman, 2008)。これらのことから、恋愛関係において相手がどのように受け止めるのかははっきり分からない不確実性の高い自分の考えや価値観、そして自らの過去などについて、積極的に相手と共有しようとする者はそう多くないと考えられる。

そして本研究で日本人に適用を試みる「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」について、先行研究から明らかになっていることは以下の通りである。まず、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に含まれる「荷物の種類」に関して、Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) が恋愛中の男女を対象に行った調査によると、自分の恋人または配偶者が二人の関係に持ち込んでいると認識されていた「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」は9つあった。(1) 浮気を含む相手の過去の否定的な恋愛関係、(2) 相手が元々持っている個人的特質や特徴（自我が強いなど）、(3) 関係に影響を及ぼす物理的および状況的条件（遠距離など）、(4) 関係に影響を与える可能性のある相手の周囲の人々（家族・親友など）、(5) 関係を否定的な方向に導く可能性のある相手の個人的特質（攻撃的な口調など）、(6) 相手と自分との相違（意見の食い違いなど）、(7) 相手の物理的および身体的特質（障害・肥満など）、(8) 相手と自分の関係に対する考え方の相違（「結婚を見据えた付き合い」対「今を楽しむ付き合い」など）、(9) 性的親密度に対する考え方の違い（性交渉は行わないなど）。

そして、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」は恋愛関係を始めることを困難にしたり、関係を維持させることを阻むだけではなく、自分のパートナーが荷物を持っている場合、パートナーだけではなく自分自身の価値も低めると考えられているため、ほとんどの人は荷物を持っている相手と関係を深めようとは考えない(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)。さらに Frisby ら (2015) によると、相手が荷物を持っていると気付くと、ほとんどの人はその相手から去ろうとしたり関係から早々に抜け出そうとする。そして荷物を持っている側もまた、「自分には荷物がある」という理由で未来のパートナーとなる人と関係を築くことに対して不安を抱くという。つまり、「自分が荷物を持っている」または「相手が荷物を持っている」というどちらの側にいても、「荷物がある」ということは、恋愛関係において望ましいことではないと捉えられているのである(Frisby et al., 2015)。

次に、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」について分かっているのは、自分の荷物についてパートナーに本人から直接伝えることが重要だという点である。どんなに自分の荷物の存在をパートナーに知られたくないと思っても、その情報が本人からではなく第三者によってパートナーに知らされた場合、そちらの方が荷物に対してより大きな不信感を抱かせ、後の関係構築や関係維持を困難にさせるという。パートナーに自分の荷物の存在を直接打ち明けその内容を二人で共有することが、親密な関係を築くためには重要であると考えられているのである。さらにパートナーに荷物のことを伝え

るだけではなく、荷物について二人で「話し合う」ことの重要性も指摘されている (Frisby et al., 2015)。

そして Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) によると、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を相手が持っていた場合、二人の関係の深度により荷物の捉え方が異なるという。調査によると、交際を始めたばかりなど関係が初期段階の者に比べ、結婚もしくは婚約をしているなど将来的な関係を約束している者の方がパートナーが持っている荷物が問題であると捉えることが少なかった (Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)。

このように、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」について明らかになっていることもある一方、追究されていない点もある。例えば、Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) は荷物を持っているのは「相手」であるとしていたが、Frisby ら (2015) は、「相手だけではなく自分も荷物を持っている」と考えている者は多いと指摘している。しかしこれまでの先行研究は、「荷物は『相手』が持っている」という視点からのみの追究であり、さらにはその荷物の多くは「負」と捉えられているという結論にとどまっていた。このことに関して、他者と互いに依存し合う傾向が強い日本人 (Markus & Kitayama, 1991) は、「負」であると捉えられることの多い荷物の存在について、その所在を「相手」だけに見出すのではなく、「自分」にもあるという視点を持つのかもしれない。この点について以下追究を行う。

4. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の日本人への適用

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」とは、恋愛関係を始めたり、関係を維持することを困難にさせるものであり、それらは個人が元々持っている特質、これまでの人生を通して手にしてきたもの、周囲の人間関係など、一度手にしたことでの後の人生において常に一緒に過ごすことになったものである。

本章では、このアメリカで創出された「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を日本人に適用し、どのような点が日本人に当てはまるのか、そしてこの概念が日本人を説明しきれないとすれば、それはどのような点なのかについて追究する。まず、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の捉え方という視点から、日本人の独自性に注目したいと考えている。恋愛関係は両者の密接なつながりによって構築されているからこそ、相互依存と親密性が共存した関係性が「荷物」にも反映されるかもしれない。そして相手が関係に持ち込む荷物とは、本来自分のものではないが、その荷物を受け入れるのか、受け入れないのか、荷物が原因で関係が衰退していくのか、もしくは相手の荷物を共有

することで二人の関係性がより強くなるのかなど、「荷物」の存在が二人の関係に影響を与えることが想定される。また自分と周囲の境界線が曖昧である日本人は、荷物が自分のものでなくても、それが恋人や配偶者のものであれば、自分の荷物として扱うのかもしれない。しかし、現時点で恋愛関係における「荷物」に対して、実際に「どのようなコミュニケーションを行うのか」という点について明らかになっていることはほとんどない。

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」はアメリカで発展した概念であるということからも、本研究の対象である日本人の恋愛関係において、先行研究と同様の結果が導かれるかどうかは分からない。そして、人々が過去の時点で手にした荷物の大きさや内容は実にさまざまであると考えられる。荷物を関係のどの時点で認識したのか、荷物の内容によって関係を構築・維持するかどうかが決められるのか、荷物を相手と共有するかどうかの判断はどのように下されるのか、そして荷物が二人の関係に与える影響やその後の関係の変化など、アメリカの先行研究では明らかにになっていないことを日本で追究することには意義があると言えるだろう。

5. 研究

5-1. 研究方法・分析方法

研究方法および分析方法は第2章（p.16-21）と同様である。

5-2. 研究対象者

Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) が提唱した「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の定義とは、「『自分の恋人や配偶者』が持っている特質や過去の経験、周囲の人間関係など、それまでの人生を通して手にしてきたものなどが、恋愛関係を始めたり、維持することを困難にする可能性があるもの」である。本研究で得たインタビュー・データを読み返し、この定義に当てはまると考えられる研究参加者は、26名中3名存在し、全員が女性だった。そして、荷物を持っていた研究参加者の恋愛パートナーはすべて過去の恋人であった。43歳既婚女性（f-22・子有り）は、その当時の恋人と結婚し、今も婚姻関係を維持している。そして45歳既婚女性（f-3・子有り）と31歳既婚女性（f-17）の二人は、その当時の恋人とは別れ、現在それぞれ別の男性と婚姻関係を築いている。

6. 調査結果

6-1. 相手の「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」

本研究では、「荷物を持っていた相手」、「相手との現在の関係」、「荷物の種類」、「いつ荷物について知ったのか」、「なぜ荷物を持った相手と交際・結婚したのか」、「どのようにして荷物について知ったのか」、「荷物に関して、どのようなコミュニケーションを行ったのか」、「荷物の存在を知ってからどのくらいの期間、関係を継続したのか」、「荷物を知った後も関係を維持した動機は何か」、「その後の恋愛関係に及ぼした影響」の10項目についてまとめた。このうち、アメリカでの先行研究の調査項目と同じ、もしくは類似している項目は4カ所ある。そして先行研究にはなかったが、本研究でインタビュー・データを分類および分析する過程において、荷物を通した二人のコミュニケーションや関係性を理解するために必要だと思われる項目が6つあり、筆者が追加した。その項目には印(◎)をつけている。

〈表 15〉「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を持っている恋人と交際していた研究参加者

研究参加者	f-22 43歳既婚女性 子有り	f-17 31歳既婚女性	f-3 45歳既婚女性 子有り
研究参加者の当時の年齢および婚姻状況	20代後半 未婚	20代前半 未婚	10代後半から 20代前半 未婚
荷物を持っていた相手	当時の恋人（その男性と結婚し現在も婚姻関係）	当時の恋人（現在は別の男性と婚姻関係）	当時の恋人（現在は別の男性と婚姻関係）
◎相手との現在の関係	婚姻関係	別離	別離
相手の荷物の種類	浪費癖	・浮気 ・ギャンブル	浮気
荷物をいつ知ったか	交際前	交際前	交際前
◎なぜ荷物を持った相手と交際・結婚したのか	・好きだった ・二人の価値観が似ていた	周囲に反対されたが好きだった	好きだった

荷物をどのように知ったか	交際前および交際中の相手の行動	交際前に周囲の友人から聞いた	交際前の相手の行動
◎荷物に関してどのようなコミュニケーションを行ったか	・話し合った ・(結婚後)相手の両親に相談した	相手の行為を黙認し続けた	・相手の行為を黙認し続けた ・自分も浮気をした
◎荷物の存在を知ってからの関係継続期間	約16年(現在も継続中)	約3年	約6年
◎荷物を知った後の関係維持の動機	・荷物の存在以上に、相手に惹かれるものがあった	・周囲に反対されるような相手でも、私なら付き合えるというプライドがあった ・二人には将来(結婚)があると思っていた	・彼には自分が必要だと思っていた ・二人には将来(結婚)があると思っていた
◎その後の恋愛にどのような影響を与えたのか	・相手の浪費癖は改善された ・婚姻関係はこれからも継続する	浮気やギャンブルをする男性とは付き合わない	・男性観と恋愛観が大きく変化した ・男性の浮気は受け入れる、かつ、自分も今後不倫をするかもしれないと思っている

本研究参加者の中で、荷物を持っている相手と恋愛関係だった経験を持つ3名の女性の現在の平均年齢は39.6歳である。一方、アメリカの研究参加者は大学生中心で、平均年齢は21.3歳だったが、本研究の日本人女性3名が荷物を持っている相手と交際を始めたのはそれぞれ10代後半(f-3)、20代前半(f-17)、20代後半(f-22)であり、アメリカの研究参加者の方が年齢は若干低い、両者の年齢は大きく離れていない。

今回の研究で分かったことは以下の通りである。まず荷物の種類に関して、Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) が挙げている9つの荷物(浮気を含む相手の過去の否定的な恋愛関係、相手が元々持っている個人的特質および特徴、関係に影響を及ぼす物理的および状況的条件、関係に影響を与える可能性のある相手の周囲の人々、関係を否定的な

方向に導く可能性のある相手の個人的特質、相手と自分との相違、相手の物理的および身体的特質、相手と自分の関係に対する考え方の相違、性的親密度に対する考え方の違い)と一致していたのは、「浮気を含む相手の過去の否定的な恋愛関係」だけだった。アメリカの研究参加者は大学生であり、日本の研究参加者と比較して、年齢が若干低かったことが影響していたのかもしれないが、荷物として本研究で挙げられていたギャンブル、浪費癖などはアメリカでの荷物には含まれていなかった。

そして、「荷物の存在を知った経緯」について、先行研究では「荷物の存在を本人が直接告げることが重要である」とされていたが、本研究では荷物を持っていた相手（研究参加者たちの後の恋人となった男性）がその荷物について告げる、告げないにかかわらず、研究参加者 3 名の女性は全員が相手の荷物の存在を知りながら交際を始めていた。浮気癖という相手の荷物を知りながら交際を始めた 45 歳既婚女性 (f-3 子有り・10 代後半から約 6 年間交際) は、交際を始めた理由を「彼が好きだった」と話していた。また 31 歳既婚女性 (f-17・20 代前半から約 3 年間交際) は、浮気癖やギャンブル癖という相手の荷物の存在を周囲から知らされていたが、「私ならそんな彼とでも付き合える」と交際を始めていた。さらにもうひとりの 43 歳既婚女性 (f-22 子有り・20 代後半から現在まで約 16 年間関係継続中) は、相手との交際中に浪費癖という荷物に気付いたがそのまま交際を続け、さらにその後、その男性と結婚している。彼女は当時を振り返り、「相手のギャンブル癖は気になっていたけど、それ以上に彼に惹かれていたから交際を続け結婚した」と話していた。そしてこの女性は、今も婚姻関係を継続させている。さらに、この 3 名が荷物を持った男性との関係を維持し続けた理由として、「好きな部分や共通する価値観があった」、「彼には私が必要だと思っていた」、「周囲に止められるような相手でも、私なら付き合えるというプライドがあった」、「将来（結婚）があると思っていた」などを挙げていた。

そして「荷物を持っている相手と、どのようなコミュニケーションを行ったのか」について、相手の荷物となっていた問題を改善するような行動を起こした者 (f-22 子有り・20 代後半から現在まで約 16 年間関係継続中) と、荷物に対して特に何もせずそのまま静観していた者 (f-3 子有り・10 代後半から約 6 年間交際、f-17・20 代前半から約 3 年間交際) がいた。荷物に対し、「コミュニケーションを行ったかどうか」、「どのようなコミュニケーションを行ったのか」という点がその後の二人の関係を「維持」もしくは「解消」のどちらかに導いていたことが分かった。

本研究において、「相手の荷物を黙認し続けた」という女性2名（f-3子有り・10代後半から約6年間交際、f-17・20代前半から約3年間交際）の恋人の荷物は浮気で、それに対して自分から何か行動を起こすことも、相手と話し合うこともなく、その状態をただ黙認し続けていたという。さらに、このうちのひとりの45歳既婚女性（f-3子有り・10代後半から約6年間交際）は、恋人が浮気を繰り返す中、彼女自身も浮気をするようになったというが、それでも別れようとしなかったという。なぜならこの女性は、「恋人はいつか自分の元に戻ってくる」と信じており、結局、恋人との関係は約6年続いたという。さらにこの女性たちが関係を維持していた理由のひとつが、「二人には将来（結婚）があるかもしれない」というものだった。彼女たちは、「恋愛の先には結婚がある」という考えを持っていたと言える。そして最終的にこの2名の女性は、当時の恋人と結婚することなく、現在それぞれ別の男性と結婚している。

一方、43歳既婚女性（f-22子有り・20代後半から現在まで約16年間関係継続中）は、荷物を持っていた相手との婚姻関係を今も続けている。この女性の夫には結婚前から浪費癖と浮気癖があったが、この女性の父親も自分の夫と同じように浮気をしていたという。そのような父親の姿を見て育った彼女は、「男性は浮気をするもの」と幼い頃から考えていたため、夫の浮気を荷物として捉えていなかった。だが、浪費癖は彼女にとって荷物だった。彼女は結婚前から相手の浪費癖に気付いていたというが、それ以上に相手には魅力があると感じていたため、結婚を決めたという。しかし結婚後も夫の浪費癖は続き、このままでは家庭や子供を守れなくなると思い、夫の両親に相談をしたり、夫と喧嘩を繰り返しながらも、浪費の問題について二人で話し合いを重ねたという。彼女は浪費癖という「相手」の荷物を「二人」の荷物として捉えていた。つまり、相手の荷物を自分も一緒に抱える、共有するということを行っており、この女性の視点は「相手」そして「二人の関係」に向けられていた。その後、夫の浪費癖はほぼなくなり、彼女はこれからも夫と一緒にいるつもりだと話していた。この女性が「夫」そして「荷物」に対して行ったコミュニケーションは、「関係維持」をもたらしていたと言える。本研究参加者26名のコミュニケーションに注目すると、視点が「自分」に向けられていた場合、二人の関係は後退していたが、視点が「相手」や「関係」に向けられていた時、二人の関係は維持されそして発展していたことがインタビュー調査から明らかになっている。一方、相手の荷物を共有することを選ばず、そして視点が「自分」に向けられた2名（45歳既婚女性 f-3子有り・10代後半から約6年間交際、31歳既婚女性 f-17・20代前半から約3年間交際）は、荷物を持っていたパートナーとは別れている。そしてその

後、「過去の相手のような男性とは付き合わない」、「恋人との経験により自分の恋愛観が変わった」などのように、過去の恋人の荷物が今の恋愛関係への教訓となったり、自分の恋愛観を変えることにつながっていた。

以上、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」というアメリカで構築された概念を日本人に適用した。アメリカでは荷物を持っている相手と恋愛を始めることは少ないとされていたが、本研究では相手に荷物があると知っていても、全員が関係を始めていた。さらにその後、どのようなコミュニケーションを行ったのか、つまり相手の荷物を一緒に共有したのか、もしくはその荷物に対して何もしなかったのかなどが、後の二人の関係を発展もしくは後退、解消に導いていた。本項では、「相手」が荷物を持っていたことに注目したが、次項では「自分」が荷物を持っていた場合の荷物に対する認識やコミュニケーションについての考察を行う。

6-2. 自分の「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」

Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) の先行研究で、研究対象となっていたのは「相手の荷物」だったが、「『自分が望まない荷物を持っている』と感じている者は多い」(Frisby et al., 2015) という指摘を受け、「『Relational baggage/関係に持ち込む荷物』を『自分』が持っている」という点に注目した。そしてこの条件に該当する者を次の通り抽出した。

まず、「相手」が荷物を持っていた時と同様、本研究のインタビュー・データを読み返した。そして、「『研究参加者』が持っている特質、過去の経験、周囲の人間関係など、それまでの人生を通して手にしてきたものなどが、恋愛関係を始めたり、維持させることを困難にする可能性がある」という「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の定義に当てはまり、かつ、本人もそれを「荷物」であると認識していた研究参加者 3 名を、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を持つ者とした。

次にインタビュー・データから、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に関連した項目を抜き出し、以下の表にまとめた。アメリカでの調査項目と同じ、または類似している項目は全部で 3 ヶ所ある。なお前項と同様、Sidelinger & Booth-Butterfield(2009) の「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」には含まれていなかったが、インタビュー・データを分類および分析する過程において、荷物を通した二人のコミュニケーションや関係性を理解するために必要だと思われる項目 5 つを筆者が追加した。その項目には印(◎)をつけている。

〈表 16〉「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を自分が持っていると認識していた研究参加者

研究参加者	m-8 33 歳独身男性 現在交際中	f-21 35 歳未婚女性 現在交際中	f-3 45 歳既婚女性 子有り
自分の荷物の種類	離婚経験	過去の恋愛経験(外国人男性と交際した経験が多い)	・過去の恋愛経験(浮気症の男性と付き合いながら自分も浮気をしていた) ・独自の恋愛観(恋愛に関する倫理的縛りがなく、好きになれば不倫も構わない。夫が浮気をしても黙認するなど)
◎荷物を持っているいたのはいつか	過去から現在	過去から現在	過去から現在
荷物を相手にいつ知らせたか	親密になって約 1 ヶ月後	知らせるつもりはない	知らせるつもりはない
荷物をどのように知らせたか	直接	知らせるつもりはない	知らせるつもりはない
◎自分にとって荷物であると考えているのか	荷物である	荷物である	荷物である
◎荷物だと考えている理由	自分の離婚に対する世間の反応	外国人との交際経験が多い自分のことを世間の男性がどのように感じるのかが不安	自分の過去の経験や恋愛観は夫には言えないことだと認識している

◎荷物に関してどのようなコミュニケーションを行ったか	新しい恋人とは距離を保ちながら交際している	何もしていない(相手には知らせていない)	何もしていない(相手には知らせていない)
◎その後の恋愛にどのような影響を与えたのか	恋愛に慎重になり、二度と離婚はしたくないと強く思うようになった	自分には外国人と付き合う方が合っていると考えている	・恋愛に倫理的縛りはないと考えている ・夫とは離婚したくない

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に関して、実際には「自分も荷物を持っている」と認識している者が多く存在するにもかかわらず (Frisby et al., 2015)、アメリカの先行研究では「相手」の荷物に関してのみ調査が行われていた。そのため、「自分」の荷物について明らかになっていることはほとんどない。本研究参加者のうち、荷物を持っていると考えられる3名に注目した結果、以下のことが明らかになった。

3名中、唯一の男性である33歳独身男性(m-8)の荷物は自らの「離婚経験」であった。そして35歳未婚女性(f-21)の荷物は外国人男性との交際経験が多いという「過去の恋愛経験」であり、45歳既婚女性(f-3・子有り)には2つの荷物があり、ひとつは浮気性の男性と付き合いながら自分も浮気をしていたという「過去の恋愛経験」、そしてもうひとつは恋愛に関する倫理的縛りはない(夫も自分も不倫をしても構わないなど)という「独自の恋愛観」である。そして3名全員がこれらを「荷物である」と認識しており、今もなおその荷物を持っている状態である。

研究参加者26名中、離婚経験者が4名いたが(33歳独身男性m-8、40歳既婚男性m-9、42歳独身男性m-19、46歳既婚女性f-23・子有り)、離婚経験を荷物であると考えていたのは33歳独身男性(m-8)だけだった。この男性が離婚を荷物であると考えている背景には、自身の離婚に対する周囲からの反応が大きく影響していた。彼は、「周囲や世間は離婚をいいことだと思っていない」、「離婚は失敗だと思われている」、「もう離婚は繰り返したくない」と話していた。彼は約1年前、当時交際を考えていた女性(現在の恋人)との関係が親密になった約1ヵ月後、「自分には離婚歴がある」ということを相手の女性に打ち明けた。その女性はかなり動揺していたというが、その後二人は正式に交際を始めたという。そして今もこの二人は恋人同士である。この男性は、「離婚

をしてから恋愛に慎重になった」、「再婚は絶対に失敗したくない」と話していたが、今の恋人といることが心地良いため、「また結婚してもいいかな」と徐々に思えるようになってきたという。この男性と新たな恋愛関係を構築し、共に維持し続けている彼の恋人が、この男性が荷物だと思っている「離婚経験」を共有しているからこそ、その荷物が徐々に軽くなりつつあるのかもしれない。だがそれと同時に、彼は今もなお自らの離婚経験のことで「世間」と「自分」の間で葛藤し続けている。

そして、「外国人との恋愛経験」が自分の荷物であると考えている 35 歳未婚女性 (f-21) は、現在 10 名ほどの男性が周囲にいるという。しかし彼女の理想の恋愛は、ひとりの男性と四六時中一緒にいるような関係であり、そのような関係を日本人男性は求めていないということを、過去の日本人との恋愛で感じたという。現在の彼女の恋人もまた外国人であり、この女性は、自分の理想の恋愛スタイルを受け入れてくれるのは外国人しかいないと考えている。そして、その外国人の恋人とは彼女が望むように密に連絡を取ったり、頻繁に会うことができるという。その男性との付き合いを進めていく中で、「そうだ、この感じ。こういうのが理想」と感じた話し、自分の理想の恋愛がどのようなものであるかを改めて理解したという。この恋人も含めて彼女がこれまで交際していた男性の多くは外国人であり、そのことに対して「世間の男性はどのように感じるのか」ということを彼女は不安視している。そのような過去の恋愛経験こそが彼女の荷物であり、この荷物の存在を今の恋人も含め、今後付き合う男性に対して知らせるつもりはないという。彼女は過去の恋愛経験を荷物であると感じている一方、「自分には外国人の方が合う」ということを再認識していた。

43 歳既婚女性 (f-3・子有り) は浮気性の男性と付き合いつつ、自分も浮気をしていたという「過去の恋愛経験」と、夫も自分も不倫をしても構わないなどの「独自の恋愛観」が自分の荷物であると考えていた。この女性は 10 代後半から約 6 年間、浮気性の男性と恋愛関係を続けていた。そして相手が浮気を続ける中、自分もまた別の男性と浮気をしながら、恋人が自分の元に戻ってくることを待ち続けていたという。彼女は相手に浮気をされていたが、自分もまた浮気をしており、その経験こそが自分の荷物であると考えていた。

そして、この女性のもうひとつの荷物は「独自の恋愛観」である。この恋愛観もまた、前述の男性との経験によってつくられたものだった。彼女はその男性と付き合い合った経験を振り返り、「男性観が変わったし、普通じゃなくなった。その後も普通じゃないし、幸せな恋愛はしていない」と話していた。それを表すのが、「恋愛には倫理的縛りは存

在しない」という彼女独自の恋愛観である。彼女は既婚者だが、自分が好きになった人が好きな人なのであり、自分がこの先、夫以外の男性と恋愛しても構わないと考えている。さらにその男性に家庭があったとしても、それも彼女には大した意味を持たない。なぜなら彼女にとって重要なのは、「自分が相手を好きかどうか」であり、その相手が既婚者ならそれも受け入れるという。だが彼女は、相手の家庭、そして自分の家庭を壊すことや、誰かを傷つけることは望んでいない。だからこそ、もし夫以外の男性と交際することがあれば、そのことは相手の男性にも隠し通して欲しいと話していた。さらに、仮に自分の夫が浮気をしたとしても、家庭に戻ってくるのであれば彼女はその浮気も黙認するつもりだという。現在この女性には夫と子供がいるが、夫や子供たちとこのままずっと一緒にいたいと思っており、かつ、離婚をするつもりもないため、自分の荷物だと認識している自分の恋愛観について、「夫に話すことは絶対にない」と話していた。

この女性2名(35歳未婚女性 f-21、43歳既婚女性 f-3・子有り)に共通していたのは、自らの過去の経験によってつくられた荷物を通して、「自分自身」や「自分の恋愛」を理解するようになっていたという点である。そして荷物の存在を現在のパートナーと共有するという選択をせず、今後も自分ひとりで抱えていこうと決めていたことも共通点として挙げられる。自分の荷物に対する認識、今の二人の関係性や置かれている状況、さらに今後の関係に対する展望などを考慮した上で、「共有しない」ということが賢明な判断だと言えることもあるだろう。これは、アメリカでの先行研究とは異なる視点である。アメリカでは、「荷物について相手に直接伝えること」、「荷物について話し合うこと」が重要だと考えられていた。しかし、その荷物の存在をパートナーに知らせたり、話し合うことが二人にとって、また二人の関係において必ずしも最良の選択ではないこともあるだろう。荷物の存在を隠しておくことは、自らの保身を意味するかもしれないが、相手を傷つけない、そして二人の関係を維持するために有効な恋愛戦略のひとつであるという見方もできるのではないだろうか。

本項ではアメリカの先行研究にはなかった「自分の荷物」について注目した。その結果、相手が荷物を持っていた時と同様、その荷物が自分のものではなかったとしても、離婚を経験した33歳独身男性(m-8)とその恋人のように、荷物を二人で共有することでその荷物は徐々に軽くなっていったと言える。さらに、元々は彼にとって「望まない」荷物であった「離婚」だが、その離婚の意味合いさえ、今後変わっていくことの可能性も示唆された結果であったと言えるだろう。

一方、荷物を「相手とは共有しない」と決め、自分ひとりの荷物として捉えるという戦略も存在した。そしてそのような荷物に対する認識を持つ者に共通していたのは、自らの荷物を厄介なものとして扱ったり、捨てたいと思うのではなく、自分自身の過去や自分の本来の姿が反映されているその荷物を、「現在の自分」や「現在の恋愛」に活かしている点であった。

本研究で、ある程度の年齢を重ね、人生経験を積んできた人々の「恋愛」を「過去から手にした荷物」を通して追究したことで、これまでの人生経験が個人の恋愛や恋愛観の形成にどのような影響を与えているか、そして個々が自分の過去の経験や荷物をどのように理解し、どのような解釈の基、どのような恋愛コミュニケーションを行っているかについての理解を深めることができた。そして、日本において「関係」というのは、本研究で繰り返し述べてきた「個人」と「周囲」の間に存在するという視点に加え、時として「過去」と「個人」の間、そして「過去の恋愛」と「現在の恋愛」の間にも存在することも明らかとなった。

Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) が「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」をアメリカ以外の文化や社会で使用したり、適用できるかなどについて考えていたかどうかは分からない。しかし本研究でこの概念を日本人に適用したことで、「荷物」を通した日本人独自のコミュニケーションが明らかになったことに加え、「荷物の共有」という Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) や Frisby ら (2015) が注目していなかったアメリカとは異なる視点に基づく日本独自の恋愛コミュニケーションのあり方が導かれたことは、「日本人研究者」による「日本人」のコミュニケーションや人間関係を説明するための理論・概念構築の一端を担う貢献に一步近づけたのではないかと考えている。

第6章 考察

1. 本研究からの知見

本研究では、日本人の恋愛コミュニケーションを説明する理論構築の一端を担う貢献をすべく、日本における恋愛関係、恋愛コミュニケーション、そして恋愛観について、個人が持つ「過去」を基点とし、追究した。そしてインタビュー調査と自己観に関する質問票調査から「日本社会における30-40代の恋愛」を考察した結果、大きく以下の3つのことが導かれた。

(1) 「親」

親の存在や親との関係、そして家族のあり方が、個人の恋愛観の形成に重要な意味を持つ。

(2) 「日本社会の型」

日本社会における一定の「型」が恋愛関係のあり方と関連している。

(3) 「日本人の個」

日本人の「個」には欧米とは異なる独自性があり、それは恋愛コミュニケーションのあり方や恋愛観の形成に強い影響を与えている。

これらの知見を基に以下、本研究全体の考察を行い、日本人のコミュニケーションを説明する理論とはどのようなものかについて述べていく。

2. 日本社会における「個（子）」と「親」

本研究では日本社会における恋愛コミュニケーションを追究し、文化的視点に加え日本社会の中に存在する「個」にも焦点を当てた。同じ日本社会に生きその文化の影響を受けている者たちには、恋愛に対する態度や恋愛観などにおいて、共通点や類似点が見られた一方、相違点も存在した。その「異なる」部分をつくっている要因のひとつが、それぞれの人生経験を反映した「過去」であった。そしてその過去の中でも、研究参加者たちの「親の存在」や「親との関係性」が、個人の恋愛観や現在の恋愛関係のあり方に大きな影響を与えていた。

本研究インタビューの質問項目には「親」、「家族」などの項目は含まれていなかったにもかかわらず、研究参加者たちは自分の親の存在について、そして幼い頃から親を見て感じていたことなどを自らの恋愛や生き方に結び付けていた。さらにそれらは、自分の現在の恋愛観や夫婦観などの基盤になっていると認識されていた。例えば、母親に暴力を振るう父親の姿が自らの男性観に大きく影響している者、両親が離婚しているので自分も離婚するのではないかと不安に思っている者、父親の不倫を見続けてきたことで男性に不信感を抱いている者などがいた。一方、夫婦喧嘩が絶えない両親だったが、それでも同じ方向に向かおうとする姿を自分の理想の恋愛と考えている者、祖父母や両親

に大切にされてきたからこそ、それを自分の子供にも継承していきたいと考えている者、死の直前まで祖父に愛情を示し続けた祖母の姿が理想の恋愛像になっている者などがいた。

さらに 30-40 代となった今でも、自分の恋愛と親の存在を結び付ける傾向があった。例えば、再婚する際には親からアドバイスを求めようと考えている者、交際相手を選ぶにあたり親が賛成してくれることが絶対条件であると捉えている者などがおり、自らの恋愛であっても、そこに親の意見を求めたり、さらには親から認められる恋愛をしたいと考えている者もいた。また、「恋人の家族は自分の家族のように仲が良いか」という点を確認してから、相手との関係を深めていこうとしている者もいた。自分の両親がどのようなコミュニケーションを行っていたのか、どのような関係をそしてどのような家庭を築いていたかなどの点が、自らの恋愛の基準や指標になっていた。

そして、家族や親というのは個人の恋愛や恋愛観に加え、そこで育つ子の「個」を形成する。それに大きく関連しているのが、日本社会独自の「家族観」である。2015 年に発表された OECD（経済協力開発機構）の統計によると、日本人は世界のどの国と比較しても、「家族以外」の人に頼ったり、社会サポートを求めることができない国民性を持つ傾向にある。言い換えると、日本人は何か問題が起こったとしてもそれを「家族の中」で解決しようとする。さらに、「親」と「子」の依存度が高い日本では、それが引き金となり犯罪に巻き込まれることもある。例えば、日本で「振り込め詐欺(オレオレ詐欺)」が社会問題となって久しい。身内を装って電話を掛け、「急にお金が必要になった」などと言い、金銭を騙し取ろうとする（警視庁、2019）。高齢者を中心にそのような犯罪に巻き込まれる者は後を絶たず、第三者からすると「なぜそんな簡単に騙されるのだろうか」と思うかもしれないが、実際にそのように状況に遭遇し家族のこと、しかも自分の子供が困っているとすれば平常心が保てなくなるのであろう。日本では「家族」が無条件に優先されているのである。

また、現在の日本では中高年の引きこもりが社会問題になっている。「引きこもっているのは恥ずかしいこと」、「そこから抜け出せないのは本人の責任」などの自己責任論を、その当人だけではなく家族にまで押し付けている風潮がある。2019 年 6 月、元農林水産省の事務次官が、自宅に引きこもりがちだった当時 44 歳の息子を刺殺した。近所の小学校で朝から行われていた運動会について、「運動会の音がうるさい」と苛立っている息子を注意したところ、息子がだんだん不機嫌になるのを見て、「怒りの矛先が小学生に向いてはいけない」と感じた父親がその数時間後、息子を殺害した（産経ニュー

ス、2019年6月2日)。この息子は中学生の頃から家庭で暴力を振るっており、父親は誰にも相談できず、精神的に追い詰められていたということも報道されていた。この事件についてさまざまな世論があり、父親を擁護する声もあった。親が子を殺害するという痛ましい事件であった一方、日本における親子の共依存のあり方が問われることになった事件であったとも言える。

そして、自分の子供が罪を犯した後に自殺する親もいる。罪を犯したのは子であり親ではない。それは事実なのだが、日本ではそれが受け入れられる社会ではないこともまた事実なのである。1972年に「浅間山荘事件」が起こった。左翼の過激派が、浅間山荘の管理をしていた女性を人質に立てこもり、機動隊との銃撃戦を交えた事件である（朝日新聞デジタル、2015年12月25日）。当時の朝日新聞によると、事件発生以降、加害者青年の家には度々電話が鳴り、家族は「お前が人質の身代わりになれ」という脅迫を受けていたという。そして犯人逮捕に至る直前、犯人グループのひとりの父親が自殺した（竹内、2014）。この事件は今から約50年前のことであるが、現代においても自分の子供が罪を犯したことを理由に社会から攻撃されたり、自殺をする親は少なくない。家族の誰かが起こした犯罪は、その家族の犯罪であるという意識が日本には根付いていると言える。だがこのような日本とは違い、自分の子供が罪を犯したとしても「親が責任を取れ」と言ったり、子の罪に対して親が謝罪しなければならない国は、世界的にも日本以外には見当たらないのだという（佐藤、2017）。

1998年、アメリカのアーカンソー州の中学校で銃乱射事件が起きた。事件の重大性を鑑み、加害者少年の実名や写真が公開され、その結果、加害者少年の母親の元には全米から多くの手紙が殺到した。その手紙のほとんどが母親を励ます内容だったという。具体的には、「今、あなたの息子さんは一番大事な時なのだから、頻繁に面会に行ってください」、「日曜の教会に集まって、村中の人々があなた方家族のために祈っています」などだったという（鈴木、2010）。このことについて佐藤（2017）は、アメリカの事件は未成年者が起こした重大な事件であり、日本だったらどうなるかは火を見るより明らかである。日本であれば「世間」に対して家族が直ちに謝罪するのが当然で、家族の実名や住所が公開されれば、家や職場は非難の電話や手紙が殺到することになるだろうと述べている。そして、日本と同じ東アジアに位置する韓国や中国では、自分の子供が引き起こした不祥事や犯罪であっても、親が謝罪する理由はないと考えるのが一般的であるという（佐藤、2017）。日本には世界でも類を見ない「独自の家族観」が存在するのである。そして世界中の親たちが、「自分の子供のためには何でもする」という

言葉を発したとしても、「何でもする」が具体的に何をすることなのか、そして「何」が子供のためになるのかということ、それぞれの文化や社会において異なると考えられる。

今回の研究参加者たちの中で、自分の家族、親戚、配偶者、恋人などが社会的な犯罪に加担したり、事件に巻き込まれたり、また家庭が大きな危機に直面している者はいなかった。しかし、仮に自分の家族がそのような場面に遭遇した場合、その事実をどのように受け止めるのか、どのような行動を起こすのか、どのような選択をするのかなどの土台には、日本社会が持つ、そして個々が持つ「家族観」が大きく影響すると言えるだろう。

日本には独自の家族観が存在し、それはあらゆる場面において見られる。そしてどの家族の中にも、独自の家族のあり方や関係性が存在する。本研究には、親のような夫婦の関係性が理想と考える者、親から大切に育てられ愛情をもらい、さらに今もなお自分を支えてくれていることを実感しながら生きている者がいた。一方、親の姿を反面教師にしたり、親の行動に疑問や嫌悪感を抱いている者もいた。しかし、親に対して抱く感情や考え方がそれぞれ異なっても、親の存在は誰の中にもあり、それは個人が持つ恋愛観や恋愛関係に対する考え方から切り離すことはできないと言える。恋愛とは学校で学習するものでもなければ、誰かが教えてくれるものでもない。恋愛とは自分の経験によってつくられるものであると言える。そして、多くの者が生まれて初めて見る、そしてその後も見続けることになる「男女」、そして「恋愛関係」とは、自分の「父母の姿」であり、「父母の関係」である。そう考えると、自分の親が自分の恋愛観に影響を与えることは自然なことだと言える。そして今回の研究参加者のほとんどが、実際に親からの影響を受け、そして構築された「恋愛観」を持ち、さらには今もなおそれを持ち続けていた。

また、本研究参加者で親である者の中には、自分と子供は一体であることや、子供に自分の人生を託しているような発言をする者もいた。彼女/彼らは自分の親と共依存の関係であると同様、自分の子供とも同じ関係性なのであろう。

個（子）と親が共依存し続けることは、その「かたち」が変わることはあるかもしれないが、過去も今も、そしてこれからも日本においては変わらないと考えられる。さらに、「個」と「親」という独自の関係性は、日本人の人間関係のあり方や日本人そのものを説明する上で欠かせない要素のひとつであると言えるだろう。

3. 日本社会の「型」と恋愛

本研究参加者は30-40代ということもあり、彼女/彼らの中には「恋愛」と「結婚」を関連付けている者が多かった。さらに結婚とは、自分とパートナーだけの問題ではなく、社会における常識、周囲の目、世間体、慣習などから切り離せないと考えられていた。

広告代理店 博報堂の「ソロ活動系男子研究プロジェクト」のリーダーを務めている荒川和久氏は、2016年に1万人の未婚・独身男女を対象に調査を行った。その調査結果の中に、本研究参加者が「自分の家庭を持っていることは、日本社会で信頼される。『まともな人間』であることの証明になる」(34歳既婚男性 m-14・子有り)と語っていたことと同様の内容が示されていた。荒川(2017)によると、「結婚できないあいつには何か問題がある」という解釈により、企業の中には未婚・独身者の人間性までも否定し、特に40-50代の未婚男性を管理職に昇進させないということが実際に起きているという。これは、「子供を育てたこともない未婚人間に、部下を育てられるはずがない」という理屈なのだという。このような結婚していない者に対する嫌がらせは、「ソロ・ハラメント(ソロハラ)」と呼ばれている。ソロハラは、「結婚する」、「結婚しない」という問題を超えて、「ソロ=ひとりで生きる」という個人の生き方そのものを否定しかねない問題をはらんでいると荒川(2017)は指摘している。

そして、未婚であることによって実際に「ソロハラ」を感じている者が今回の研究参加者の中にもいた。48歳未婚男性(m-10)は、「ある程度の年齢なって結婚していないと『欠陥人間』扱いされたりする。僕も実際に、親や身近な人に『結婚しないのか』と言われるのでプレッシャーを感じているし、世間体も気になっている」と話していた。

晩婚化の増加、未婚率の上昇などから、現代日本では恋愛に関する個人の自由度は高くなっているように思われる。事実、結婚することも、親になることも、法的義務でも他者から強要されるべきことでもなく、個人の意思に基づき、個人が選択することのできる権利のひとつでしかない。それにもかかわらず、「なぜ結婚しないのか」、「結婚して家庭を持ってこそ一人前だ」、「そんな歳にもなって結婚していないなんて、どこかおかしいのではないか」などの認識が日本社会の根底には存在し、それは現在も変わっていないのである。

さらに政治の場において、「結婚していない」、「子供もいない」ということを中傷する言葉が発せられたこともある。上西小百合元衆議院議員(当時31歳)は、2014年4月の衆議院総務委員会での質問中に男性議員から、「まず自分が子供を産まない駄目

だ」というやじを受けた（日本経済新聞 電子版、2014年7月4日）。さらにその2ヵ月後、塩村文夏元東京都議会議員（当時36歳）は、東京都議会定例会の一般質問で女性の晩婚化問題について、「東京は都会であるがゆえに周囲との関係が希薄で、女性が妊娠、出産、育児にかかわる悩みを一人で抱えてしまうという弊害があります。...〈中略〉...妊婦さんを支える仕組みはとても重要であり、私も所属する厚生委員会でこの件についての充実をお願いしてきました」と発言していたところ、塩村元議員に対してある男性議員から「早く結婚した方がいいんじゃないか」というやじが飛んだ。その後も塩村元議員が発言を続ける中、別の男性議員から「自分が産んでから」、「先生の努力次第」、「やる気があればできる」などのやじが続いた。これら男性議員の発言に対し、批判や抗議が起こり、このことは海外でも報道された（朝日新聞デジタル、2014年7月8日）。

さらに、このような「結婚していない」、「子供もいない」ということを中傷する一方的な発言は、女性に対してだけではなく、男性にも発せられている。2016年2月、福原淳嗣秋田県大館市長（当時48歳）に対して、ある女性議員が「（市長は）まだ結婚もしていない。子供もいない。これでは同じ土俵で議論できない」、「市長にはぜひ、この任期4年間の間に結婚してもらいたい」と述べた（産経ニュース、2016年3月2日）。前述の女性議員に対するやじも含め、これらの行為は「ソロハラ」であると同時に、日本社会の「慣習」に則ったものであるという見方もできる。

日本ではある程度の年齢になると、「人は結婚するものだ」という暗黙の了解があることは否めない。本研究においても未婚・独身の研究参加者は、日本に古くから根付いている結婚に関する慣習や規範に則った発言をすることが多かった。インタビュー中、筆者には「結婚」に関する発言を積極的に促す意図はなかったが、研究参加者から「結婚」、「子供」という言葉が多く聞かれ、さらに「結婚すること」、「子供を持つこと」ということに「周囲」、「世間」を関連付ける発言が多かったことは本研究において特筆すべき点であったと言える。

本研究参加者も含め、「なぜ日本において、人は結婚を周囲や世間と結び付けてしまうのか」という点に影響を与えているのが日本的慣習であり日本的規範であると考えられる。池田・クレーマー（2000）は、人は日常生活において「こうあるべき」という規範に沿った行動をしていると述べている。「規範」とは英語では“norm”と訳され、“normal”は日本語で「普通」、「通常」であり、それに“ab-（外側の・反対側の）”をつければ“abnormal”、つまり「普通から離れる」、「特異な」ということになる。「規範/norm」

から外れてしまった“abnormal”な人間は、「普通ではない人」、「変わった人」なのである。これを「結婚」に当てはめて考えると、平均初婚年齢が30歳である日本において、「30-40代であれば結婚しているのが当然」という規範から外れてしまった人は、理論的には“abnormal”な人である。だからこそ、前述の48歳未婚男性（m-10）が語っていたように、「ある程度の年齢になって結婚していないと『欠陥人間』扱いされたりする」ということにつながるのだろう。このように、日本では結婚に関する独自の規範や慣習がある。だからこそ、人は結婚を「自分」と「相手」だけのものとしてではなく、周囲からどのように見られているか、そして世間で自分がどのように扱われているかということまでを含んでいるのが「結婚」であると、日本社会の中で学習してきたのではないだろうか。

さらに、日本社会において「離婚」もまた、「型」から外れた行為であると見なすことができる。「自分たちが納得した離婚でも、それを世間や周囲が理解してくれるわけではなかった」（33歳独身男性 m-8）という発言が示す通り、現代日本において今もなお「離婚」に対する世間からの風当たりは強いと言える。もし仮に、ある夫婦にとって離婚をすることが最良の選択であったとしても、世間的には一度築いた婚姻生活は維持する方が好ましいと考えられているのだろう。その理由のひとつに、離婚する人より婚姻関係を維持している人の方が圧倒的に多く、そちらの方が多数派であるということが挙げられる。そして、婚姻関係を維持し続けることが日本社会の「型」にはまっているとするなら、「離婚すること」は日本社会の「型」からはみ出ることを意味すると言える。だが、「型」にはまることを優先して個人の幸せを求めるための離婚をせず、自分や二人の意思に反して婚姻生活を維持するというのは一種の自己犠牲ではないだろうか。

「自己犠牲」という現象は、恋愛以外の場面においてもよくあることであり、特にここ日本では珍しいことではない。例を挙げると、日本では過労死や過重労働が長年にわたり社会問題になっている。労働環境の見直しや改善などは行われている最中であるとは言え、根本的には問題は解決していない。さらに激務のため体調を壊したり、精神的に病んだり、さらには仕事の原因で自ら命を絶つ人々に関する報道は後を絶たない。それにもかかわらず、人々は過度なストレスを感じつつも長時間働き続け、自分が属する組織のために身を捧げているのは、そうするのが「当たり前」という認識や風潮が日本に根付いているからだと言えるだろう。

また、組織において自分以外の「誰か」が致命的なミスをして、それによってその組織や社会に重大な損害をもたらしたとしても、その後処理や穴埋めを本人以外の人間が行うことは多い。さらに、その責任を取るの本人ではなく、その人間の管理責任者である上司、または立場の弱い人間が押し付けられるということは、日本社会において珍しいことではない。同じ組織の「誰か」が責任を取ればよいのであり、責任を取るの必ずしも当事者である必要はない。組織の「誰か」が矢面に立てば世間の感情は収まるのである。このような現象が当たり前になっている背景には、日本独自の相互依存に基づいた人間関係が関連しているのだろう。世間も他者の「相互依存」を容認しているのである。そしてこのような「相互依存に基づいた関係性」というのは日本社会の「型」にはまっており、これは「世間」とも大きく関連している。

2018年のサッカー・ワールド杯において、日本人選手は自分たちが使用したベンチやロッカールームを清掃してからサッカー場を後にした。さらに、一部の日本人サポーターもまた試合後に会場のごみ拾いをしていた。このような日本人の姿はSNSを通して拡散され、さらに各国のメディアも報道し、日本人が世界中から称賛を浴びたことは記憶に新しい。そして、日本を訪れる外国人観光客たちは口々に「日本の街は美しい」と言う。実際に日本の道路にごみや煙草の吸殻が落ちていることは、諸外国と比べて少ないかもしれない。だがそれは、日本というのは「周囲の目」を気にしている人間が暮らしている国だからこそ、街が清潔に保たれていると考えることもできる。事実、他者と共有する場において、しかも他人が見ている前で堂々とごみを捨てる日本人はほぼいないと言える。一方、人が滅多に訪れないような山奥には、粗大ごみや不当投棄された家電などが山積みになっていることもある。また日本国内で定期的に行われているプロ野球の試合後やアイドルのコンサートの後に、前述のサッカー・ワールド杯の時のように、ごみ拾いをしている人々の姿を見ることはほとんどない。サッカー・ワールド杯の日本人サポーターたちは世界から注目されたり称賛されることを期待して清掃活動をしたわけではないだろう。だが日本において、「他者や周囲が見ているかどうか」ということは非常に重要なことであると同時に、そのことを意識した上で行動を起こしている者も多いのではないだろうか。日本では、「世間に顔向けができない」、「世間体を気にする」などの言葉をよく使う。サッカー・ワールド杯での日本人の行動は、日本人としての「型」にはまりつつ、かつ、「世間」に対して立派に顔向けできる行動だったからこそ、映像を通しそのような姿を見ていた日本人は、世界から称賛を浴びる日本人選手やサポーターの姿をより誇らしく感じたのではないだろうか。

また日本で開催された 2019 年ラグビー・ワールド杯の際には、台風の影響で試合が中止になったカナダチームが、開催地の岩手県釜石市で土砂や泥を撤去するなどのボランティア活動を行っていた姿が報道された。そのようなカナダチームの行動に対して、台風の影響を受けた現地住民だけではなく、全国にいる多くの日本人もまた感謝の意を表す姿が映像に映し出されていた。カナダチームの行動は実に素晴らしいものであったことは言うまでもない。同時にその行動は、日本における「困った時はお互いさま」を体現するような相互依存に基づくものだったとも言える。だからこそ日本社会に、そして世間によって価値あるものと受け止められ、称賛にあたる行動だとして称えられたのではないだろうか。

日本人にとって「型」というのは重要な意味を持つ。型通りの行動が不文律である日本では、規定された一定の型を破ることやそこからみ出すことに対して、人は過敏に反応したり、その相手を激しく非難することがある。そして、恋愛や恋愛関係に関しても同じように「型」が存在する。「ある程度の年齢になったら人は結婚するものだ」、「女性は子供を産むのが当然」、「夫婦は一生添い遂げるもの」など「結婚」や「子供」に関するもの、さらに本研究参加者たちが口にしてきた「外国人との交際経験が多い」、「人とは共有できない独自の恋愛観を持っている」など、社会から「一般的ではない」と見なされる可能性の高い過去の恋愛などもまた、「型」から外れていると考えることができる。だからこそそのような発言をした者たちは、自分の過去の恋愛経験や独自の恋愛観を自分の中で持ち続けるという選択をしていたということも考えられる。日本社会では、個人は周囲と共存し合っているからこそ、そこには社会や世間が生み出した「型」がつくられ、それが個人の恋愛にも関連していると言える。本研究のインタビュー調査において、研究参加者や筆者が「型」という言葉を直接的に使うことはなかったものの、人生経験を重ねてきた 30-40 代の研究参加者たちの中には「型」に関連する経験を口にする者が多かったと同時に、世間に望まれる恋愛の「型」がどのようなものであるかについても理解し、それに沿った考え方をもち行動している者もいた。

現代日本において、恋愛や個人の生き方に関する多様化が進んでいることは事実である。しかし、それと同時にそれらの多様性が社会問題として扱われていることもまた事実である。現代日本において個人の自由や多様であるべきことが、現実には社会問題になっている背景には、それらが少数で日本社会の「型」に入りきれていないからこそ、社会や世間から過度に注目されたり強調される状況を生み出しているのではないだろうか。「生涯未婚でいる」、「結婚しているが子供は持たない」、「還暦を過ぎて結婚した」、

「LGBTQ である」など、これまでの日本ではあまり一般的ではないと認識されている「個」を貫こうとすると、「普通ではない」として人々の視線が集まることは、この現代日本社会において未だ避けられることではないと言える。

本研究の 30-40 代の研究参加者は全員異性愛者だったが、研究対象者の年齢や個人の恋愛対象の違いなどによっても、個人と家族、社会、世間などとの関係性や、個人がどのようなことから影響を受けるかなどは異なると考えられる。そして、恋愛のかたちや個々の多様化が進む中、人々は恋愛においても自分という「個」を持ちながら、周囲、世間、社会とどのように折り合いをつけ、この日本社会で生きていくのかを、ひとりひとりが考える時期を迎えているのではないだろうか。

4. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」と自己観から考察する日本人の恋愛コミュニケーション理論

本研究は、日本人のコミュニケーションを説明する理論構築の一端を担う貢献をすることに主眼を置き、アメリカ人研究者によって構築された概念である「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009) を日本人に当てはめ、日本文化や社会において適用できる部分とできない部分をあぶり出そうとした。それによって導かれた独自の恋愛観やコミュニケーションを、自己観や人間関係のあり方、そして本研究を通して得た知見などに関連付けながら、「日本人のコミュニケーションを説明する理論とはどのようなものか」について以下考察を行う。

4-1. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に対する日本人独自の認識

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」とは、恋愛関係を始めること、そして関係を維持することを難しくさせると考えられる個人的な特質や個人がこれまでの人生で手にしてきたものなどを指す。そして Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) や Frisby ら (2015) によると、荷物を所有しているのはその荷物の原因をつくった人間であるとされていた。自己を周囲から切り離す傾向が強いとされている欧米では (Markus & Kitayama, 1991)、荷物の所有権はその荷物をつくり出した人間に帰属するという点について、疑問を持つ者はいないのかもしれない。だからこそ、「相手が荷物を持っていると分かると、ほとんどの人はその相手と交際を始めようとはしない」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009) という点につながるのだろう。だが、これらは日本において必ずしも当てはまるわけではないということが、本研究から明らかになった。

研究参加者の中で、「荷物を持っていた相手」と交際をしていた全員が、「相手に荷物がある」と知りながら相手との関係を始めていた。それは今回の研究参加者たちの、「人間は過去の経験でできている」、「相手も関係も変えられない。変えられるのは自分だけ」などの発言に関連していると言える。好きになった相手が荷物を持っていたとしても、それはその相手の過去の経験のひとつであり、これまでの人生の一部である。しかも相手が持っている荷物そのものを変えることはできない。変えられるものがあるとするれば、荷物に対する自分の認識や態度しかない。過去から持ち込まれた荷物の存在そのものやその中身が変わることはないが、自分自身の認識に加え、二人のコミュニケーションによって生み出される関係性によっても、「荷物のあり方」や「荷物の意味」が変化することが本研究参加者を通して明らかになった。

離婚経験のある33歳独身男性(m-8)は、恋人とのコミュニケーションを繰り返すことで、「荷物のあり方」や「荷物の意味」が変わりつつあることを、現在経験している最中である。この男性は現時点において、自身の「離婚経験」は「望まない荷物」であると考えている。だが元々、離婚はこの男性にとって望まない荷物ではなかった。今から数年前、彼が既婚者だった頃、妻との関係がうまくいけなくなり、関係を修復しようと試みたがそれもうまくいかなかった。最終的に互いが納得して、それぞれの未来のために離婚を決断した。その当時、この男性と妻の間にあった離婚は、「二人が望むこと」であった。そして彼は、その「望む荷物」と共に婚姻生活を後にし、離婚という彼にとって「望む荷物」を自分と周囲の間に置いた。しかし、彼自身が納得し望んだ離婚であっても、世間では「離婚は良いものではない」と考えられており、さらに周囲の人々が、自分の離婚に理解を示さないという現実をこの男性は目の当たりにしていた。彼は、彼と妻の二人の未来のために行った離婚という「望む荷物」を手にしたつもりだったが、離婚後に感じた周囲からの反応によって、その荷物は「望まない荷物」へと変化した。さらに、「恋愛は楽しむもの」、「人生を楽しみたいから恋愛をする」という彼が持っていた恋愛観もまた、「恋愛は楽しいだけではない」、「もう失敗できない」に変わっていった。

そして現在、この男性には付き合ってから1年になる恋人がいる。離婚後の周囲の反応から、彼は自らの離婚を「望まない荷物」だと認識しており、現在の恋人との交際を考えていた1年前を振り返り、相手に離婚について打ち明けることは簡単ではなかったと話していた。そして現在、二人の関係は順調だということだが、過去の離婚経験が原因で彼自身、恋愛に対して今もなおかなり慎重になっている状態であり、以前のように恋愛

にのめり込むこともなく、恋人とは敢えて距離を取りながら付き合うようにしている。だがその一方、彼は今の恋人と一緒にいると居心地が良いため、「また結婚してもいいかな」と徐々に思えるようになってきたという。彼は、「望まない荷物」である過去の離婚について、未だ世間や社会との折り合いがつけられないながらも、新しい恋人との関係を大切にしている。この男性が現在の恋人との関係に持ち込んだ「離婚」という「望まない荷物」であるが、その恋人は離婚の事実を知った上で彼と交際を始めた。この女性からすると、「彼が離婚をしたからこそ、今こうやって彼と付き合っている」という解釈をしているかもしれない。そうすると彼の離婚はこの女性にとって、「望む荷物」でありさらには「ギフト」であるとも言える。そして「荷物」がどのようなものであるかの認識を左右するのは、両者の間で行われているコミュニケーションであるということ、この二人は体現していると言えるのではないだろうか。コミュニケーションによって関係性は変化する（Baxter & Montgomery, 1996）ということからも、この1年の間に恋人とこの男性の間で行われたコミュニケーションにより、関係性は変化したと考えられる。実際にこの男性は「また結婚してもいいかな」という心境に変化しつつある。これは少なくとも、交際を始めた1年前にはなかった感情であろう。そしてこの二人にとって、彼が離婚をしたからこそ二人は出会い、親密になることができたという見方もできる。そうすると、このまま二人の交際が順調に進んだ場合、彼にとっても過去の「離婚」は再び「望む荷物」に変わる可能性もある。これは、元々持っていた「離婚＝荷物」を二人の間に置いたからこそ起こったことであり、アメリカでの先行研究のように、荷物の持ち主を固定し、「片方の荷物」としていたら、現在の二人の間で起こっているような変化や関係性は築けなかったと言える。この二人は Baxter & Montgomery (1996) が主張するように、両者がそれぞれの異なる要求を満足させるように相互作用した結果、互いが納得できる最善の立場や状況をつくりあげていく、ということを具現化している過程にあると言えるだろう。

4-2. 「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」と自己観から考察する日本人の「個」

日本における恋愛関係とは、二人が恋愛をしていたとしても、それは「自分」対「相手」という二人だけの関係ではないということが、本研究のインタビュー調査を通して明らかになった。「離婚は世間的にはいいものだと思われていない」、「結婚する時は、父が相手を気に入らないと無理だと思う」、「自分が、妻が、どうしたいかではなく全体

的にうまくやることが周りの幸せ」、「恋人に対する親からの評価は気になる」などの言葉は、自分と恋人との関係にも、二人以外の関係という要素が介入していることを示していた。そしてこれと似たような結果を自己観の調査からも得た。本研究での4つの自己観に関する調査において、研究参加者たちはそれぞれ異なる自己観の特徴を持ちながらも、「自らと周囲を切り離すことはできない」という共通した考えに基づいたコミュニケーションや人間関係の構築、維持などを行っていた。本研究は、「日本人とは、人と人との間柄や個と全体との関係を重視する人間観を持つ」（浜口、1982）、「自己と周囲の人間との境界が曖昧で、自分の存在を周囲の人間関係の一部であると捉える傾向が強い」（Markus & Kitayama, 1991）などのこれまでの日本人観を支持する結果を導いたと言える。

また関係における「個」に関して、日本にはこれまでの欧米での先行研究とは異なる捉え方が存在することが浮き彫りになった。本研究ではアメリカで構築された概念である「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」（Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009）を研究参加者に当てはめたことに加え、「Relational dialectics theory/動的な人間関係」（Baxter & Montgomery, 1996）、「Relational turbulence model /関係乱気流モデル」（Solomon, Weber, & Steuber, 2010）などを例に取りながら研究参加者のコミュニケーションを説明した。例えば、「相手が過去の荷物を関係に持ち込む」、「どちらかに新しい変化が起こる」、「それぞれが相反する状態にいる」など、コンテキストはすべて異なっていたが、それぞれのコンテキストで起こる出来事や現象の「主語」が明確に存在していた点は共通していたと言える。例えば、「過去から続く『あなた』の浮気癖」、「『私』が目標を達成しようとしていることを『あなた』が邪魔をする」、「不確実な関係の話をするを『私』が避ける」など、誰がコミュニケーションの主体であるかがはっきりしていた。つまり、「『個』が周囲から切り離されている」という前提に基づき、人々のコミュニケーションを説明しているのが「欧米の理論」が持つひとつの特徴と言えるのではないだろうか。

一方、本研究参加者が持っていた荷物を例にとると、全員が「相手」に荷物があると知りながら交際を始めており、しかも「私なら彼の浮気やギャンブル癖を何とかできると思った」、「彼に浪費癖があってもそれでも好きだった」など、相手の荷物を自分も背負うことになることさえ厭わないという旨の発言をし、荷物を持つのが「相手」または「自分」なのかに関して、明確に線を引いていなかった。これは日本における「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の捉え方がアメリカとは異なることを表しており、日本では元々「相手」の荷物であったとしても、その荷物は「個」の枠を超え「共有」の荷

物になる可能性があることを示していた。日本における「人間関係」がそこに「ある」もの、そしてなるように「なる」と捉えられているように（宮原、2000）、荷物とは人が積極的に働き掛けたり、変化させようとする対象なのではないのだろう。つまり、荷物というのは二人の間に「ある」ものであり、二人の荷物に「なる」ものなのかもしれない。

このような人間関係の考え方や荷物に対する独自の認識が示すように、日本では自分と他者、そして世間や社会から自らを切り離して捉えることはしないため、自分という「個」と「周囲」との境界線はぼやけている。だからこそ、日本人を説明する理論にはこの「曖昧な『個』」や「はっきり線を引けない『関係性』」という視点が必要である。さらにこのことは、本研究参加者たちに行った自己観の調査結果にも表れていた。独立的自己観の傾向が強い者を例にとると、彼女/彼らは、他の自己観を持つ者に比べ自分の考えや強い意思を持ち、目標達成のために行動を起こしたり、自己を貫こうという姿勢が強く見られた。それと同時に、自分のパートナーや親など、周囲とのかかわりも大切にしながら日々のコミュニケーションを行っていた。例えば、「恋愛ではどれほど自分が相手に夢中になれるか、自分が相手を追いかけていたいと思うかが重要」と考えている者がその一方で、「人間関係には臆病だから、いつも相手のことを考えながら話すようにしている」という発言をしていた。また別の者は「プラスの効果がない恋愛はしたくない」とする一方、「恋人のことで私が我慢することもあるし、恋人にも私のことで我慢してもらうことがある」と話していた。これらの発言が示すように、日本社会において独立的自己観の傾向が強いとしても、「自己と周囲を切り離さない」ということは、彼女/彼らのコミュニケーションからも明らかであった。そして、同じ「独立的自己観」であっても、それが「日本社会」の中の「独立的自己観を持つ人」なのか、それとも「欧米社会」の中の「独立的自己観を持つ人」なのかにより、その両者の考え方やコミュニケーションは異なるであろう。なぜなら、それぞれの「個」が生きている社会、そして文化そのものが異なるからである。

そして、恋愛関係には本人同士以外にも、家族、周囲の人々、世間、社会など、さまざまな人や事柄が関与している日本では、人は恋愛関係を維持しながら、それと同時に多種多様な複数の関係性を保持し、さらにその複数の関係性からも自らの恋愛関係を切り離さない。恋愛関係やその関係を構成する「個」と「周囲の存在」は相互依存の状態である。さらにその周囲の存在は、恋愛関係における「個のあり方」、そして「個の人生」を変えることさえあり得る。

昨今の日本社会において、有名人たちの「不倫」に関する報道が途絶えることはない。関係についてどのように考えているのか、今後どうしたいと思っているのかなどについては、当事者である二人にしか分からない。一方、当事者でもその配偶者でもない言わばその不倫とは全く関係がない、そして精神的苦痛などを受けることのない周囲の人々や世間が、不倫という日本社会では背徳的とされている行為に対して過敏に反応する。そしてその反応や世論によって、不倫の当事者たちのその後の行動や身の振り方、時には人生までが左右されることがあるが、そこには当事者たちの「個」は存在しないに等しい。それは以前、ヨーロッパの一国の主が不倫をしていた時とは全く違う。大統領の不倫に対する民意の多くは、「不倫は個人的なこと。政治とは関係ない」というものであった。政治家としての職務さえしっかり行っているのなら、それ以外の所で妻を裏切ろうが、若い女性と恋愛をしようが、政治にも国民にも関係がないというように、「個」と「周囲」には明確に「線」が引かれていた。

このように、文化や社会によって「個」と「周囲」との関連性やそのあり方は異なる。少なくとも日本では、「個」と「周囲」は明確に切り離されていない。そしてその両者が相互作用する過程において、それらがくっついたり一緒になったりすることもある。このことは、Markus & Kitayama (1991) や浜口 (1982) が主張したことでもあり、現代日本における「個のあり方」は数十年前から大きく変化していないと言える。だからこそ、「個」と「周囲」を切り離していることが前提とされている欧米文化の中で構築された「人間同士のコミュニケーションを説明する理論」が、日本人のみならず、現代の日本社会においてそのままのかたちで適用することはできないと言える理由がここにある。

日本人を対象とした本研究において、過去そして現在にわたり日本人の「個」と「周囲」の境界線は曖昧であり、加えて「個」は、周囲、社会、他者などからさまざまな影響を受けながら形成されている。さらに個人が持つ「恋愛観」も、育った環境や親の存在、日本社会における役割、そして社会でつくられてきた型などによって形成されていることも分かった。一方、日本における個、関係、そして性のあり方や人々の持つ認識などは変化し続けている。例えば、“LGBTQ”に代表されるような新しい、もしくは新たに認識された性のあり方、そしてこれまで存在しなかった関係性や個に対する考え方が今後さらに出現することが予想される。だからこそ、コミュニケーションに影響を与えると考えられる新たな要因などを指摘しながら、それぞれの文化や社会のあり方、そして時代に即した「人間のコミュニケーション」を説明することのできる理論を構築する

ことは重要なことであると言える。さらに、構築された理論が実社会に生きる人々の人間関係や人生に「どのように貢献できるのか」という点に対しても、コミュニケーション研究者は引き続き向き合う必要があると言えるだろう。

第7章 研究課題と今後の展望

1. 研究課題

これまで欧米を中心として発展してきたコミュニケーション研究だが、日本人を説明するための理論構築はほとんど行われていない。このことを受け、本研究では日本人の人間関係やコミュニケーションを説明するための理論構築の一端を担う貢献をすべく、コミュニケーション学視点から「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観に関する先行研究調査、インタビュー調査、質問票調査、データ分類・分析および考察を行った。だが、本研究において改善すべき点や課題も見つかった。

本研究では先行研究を読み進めながら、個人の「過去の経験」を核として位置付け、ある程度の人生経験を重ね、かつ、今後も恋愛をする可能性のある年代と考えられる30-40代の男女を研究対象者として集めた。最終的に女性13名、男性13名、合計26名が研究に参加し、それぞれの平均年齢はほぼ同じだったが、男性は既婚者が多く、女性は未婚者が多かった。現時点の日本人男女の平均初婚年齢が30歳である中、本研究参加者の平均年齢は37.6歳であり、さらに日本では恋愛と結婚が密接に関連していることなどを考慮し、今後は婚姻状況を視野に入れた上で研究参加者を選定すべきであると考えている。

そして、研究参加者を募るにあたり、筆者および筆者の知人のネットワークを使用したため、研究参加者の中には筆者と初対面の者もいたが、筆者の知人も含まれていた。筆者と知人の親密度はさまざまだったが、筆者だったからこそ、恋愛や過去という個人的なトピックについて包み隠さず話してくれた者もいたと考えられる。一方、筆者が知人だったため、インタビューの場で多くを話すことを躊躇した者がいた可能性もある。今後は研究参加者の選別基準やリクルーティング方法などをより詳細に、かつ、明確に設定する必要があると考えている。

加えて本研究参加者の人数は26名であり、客観的データを示すには十分な数であったとは言い切れない。そのような中、本研究では客観性の高い結果を導くため、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を軸とした研究方法および分析方法を採用し、

一定の客観性を担保したと考えている。だが今後の課題として、研究内容と研究参加者の人数に応じた適切、かつ、信憑性の高い研究・分析方法を選定することが重要であると考えている。

さらに、「日本」対「アメリカ」という構図を基に、またはアメリカを中心とした欧米諸国を比較対象として論じることが本研究の真の目的ではないとしつつも、本研究のテーマである恋愛コミュニケーションに関する先行研究の多くが欧米で行われており、その知見を欧米の先行研究に求めざるを得なかった。従って、本研究ではアメリカをはじめとする欧米のコミュニケーション理論や概念を引用した。その中で、文化・社会に関係なく適用できると考えられるもの、欧米の文化背景を持つ人々にだけに適用できると考えられるもの、そして日本人を説明できないと考えられるものなどについて、その都度説明を加えるなどしたが、足りなかった部分があったことも否めない。今後、理論や概念を参照および引用する際、研究対象に対して特定の理論・概念のどのような部分が適用できるのか、もしくは適用できないのであればその理由について、より詳細に記す必要があると考えている。

また本研究の中でも特に重要な視点のひとつに位置づけていた「文化」に関連し、馬淵仁氏は多文化共生の視点から、文化を一括りにすることに對し警鐘を鳴らしている。馬淵（2010）によると、「アメリカ文化は」、「日本文化は」、「中国の人たちは」というように、知見を提供する側もそれを受ける側も、頻繁に登場する国名を冠に付けた言葉を繰り返し用いて文化を一般化している。本研究では、同一文化に属していたとしても、その中の「個」はそれぞれ異なるという「個人的」レベルからの考察も「文化的」レベルと同様に行ったことで、文化と個人の両方の視点に基づき、研究参加者のコミュニケーションの追究ができたと考えている。さらに馬淵（2010）が指摘しているように、本研究においても、「日本」、「アメリカ人」などの言葉を多用したが、それらは国家、国、国籍などを意味したのではなく、「特定の文化や社会、そしてその影響を受けている集団や人々」を示す意図に基づいていたことを付け加えておく。

そして、コミュニケーション学はアメリカを中心に発展してきた背景があるが、日本においても独自の自己観、慣習、規範、ジェンダー・ロールなどに関する「日本人論」が存在する。それら日本人論の多くは日本人研究者によって追究されたものである。日本人コミュニケーション研究者である板場良久氏は、文化におけるコミュニケーション、そして人間関係のあり方について次のように述べている。板場（2011、p.117）によると、「どのような行動を『（良い）コミュニケーション』と呼び、なぜそれが望まれている

のか。こうした問いへの応答に向けた語りの中で、『文化』がその根拠としてしばしば用いられる。つまり、われわれに望まれている『コミュニケーション』とは、われわれの『文化』がそう望んでいるからであり、それは昔から伝統的にそうだったからである、という論法である。しかし、『文化』が何であるかを知れば知るほど、人間関係のあり方を含めた生き方もますます管理されていく」。本研究もまた、いくつかの日本人論の視点から研究参加者たちのコミュニケーション、人間関係、そして価値観などを追究したが、筆者も日本文化の中で生き、その影響を強く受けている人間のひとりである。日本文化が自文化であるからこそ、「日本文化を知っている」という視点に基づくことは、板場（2011）が指摘しているように、人間関係のあり方やそこで行われているコミュニケーションを固定し、そして管理することにもなりかねない。本研究は、これまでコミュニケーション研究が欧米中心で行われてきたこと、そして日本における独自のコミュニケーション研究における知見の蓄積が十分でないという事実に対して、自文化視点で研究が行われることの重要性について繰り返し述べてきた。しかし、自文化研究を行うということは、それが「自文化」だからこそ「知っている」という思い込みや先入観を持つ危険もはらんでいる。文化そしてコミュニケーションを追究する際、研究者としてどのような視点を持ち、どのような立場から研究を行うのか、という点を改めて確認した上で、研究に向き合う必要があると考えている。

以上が本研究における改善点と課題とする点である。

2. 今後の展望

昨今の日本において未婚化、晩婚化、若者の恋愛離れなどが社会問題化している。そしてストーキング、リベンジポルノ、デートDVなどの犯罪の多くは「恋愛」に端を発していると考えられる。さらに現代日本において、これまで「当たり前」とされてきたものとは異なる恋愛形態や恋愛が注目されるようになってきた。だが社会が求める、または社会に理想としているような一定の恋愛の「型」に入りきれなかった、またはその「型」から外れてしまった人々が、「普通ではない人」、「問題がある人」として扱われていることも事実である。時代が変わりゆく中、「個」もまた変化し続けている。だからこそ私たちひとりひとりもまた、変わりゆく自分自身という「個」、そして相手の「個」を尊重しながら、人間関係を築き維持することは、それぞれの人生において大きな意味を持つと同時に、人生をより豊かなものにすると言えるだろう。個と個が生み出す人間関係の重要性について、史上最長の75年に渡る研究がそれを証明している。

75 年間の追跡調査を通じて、人々の幸福と健康に何が必要であるのかを明らかにした研究がある。「ハーバード成人発達研究」の 4 代目の責任者である Waldinger (2015) をはじめとする研究者たちは、75 年にわたりさまざまな境遇にいた 10 代から 80 代までの男性（現在は女性も含む）の追跡調査を行い、一生を通じ個人の幸福と健康のために何が必要であるかを明らかにした。さまざまな年齢層がいた中で、若年層にとっての人生のゴールとは、富を蓄えることであり有名になることであった。一方、80 代まで生きてきた者が、自分が 50 歳だった頃を振り返り、その当時、人間関係に満足していた者だけが、80 代になった時に幸せを感じていたことが明らかになった。この 75 年の調査を通じて得られた知見とは、人を健康にそして幸福にするために必要なことはただひとつ、「満足した人間関係を保つこと」だったのである。

Waldinger (2015) をはじめとした研究者たちが 75 年を掛けて見出した、人が健康にそして幸福になるために必要な「満足した人間関係」であるが、関係を維持する、しかも満足した状態で維持し続けることは簡単なことではない。本研究でも述べてきた通り、「動的」である人間関係は (Baxter & Montgomery, 1996; 2000)、何もせずに維持できるわけではない (宮原、2000)。従って、満足した人間関係を保つためには、人は自分たちの関係に向き合わなければならない。言い換えると、普段はあまり意識することのない、そして当たり前のように存在している目の前の相手に向き合い、コミュニケーションを行った者だけが、その結果として満足できる人間関係を手に入れることができるだろう。本研究参加者を例にとると、自分とパートナーの関係に対して、それを意図的に操作したり、変化させようとする者はいなかった。しかし、相手や状況と向き合い、そして繰り返しコミュニケーションを行った者だけが、相手との独自の関係を手にし、そしてそれがより強固になっていくプロセスを経験していた。彼女/彼らは、少なくとも今の時点で Waldinger (2015) が人間の幸福に必要だと主張する「満足した人間関係」を手にし、維持していると言える。また、「幸福」という概念自体、文化や社会によりその解釈や意味するものは異なるにせよ (Oishi & Diener, 2001; Uchida et al., 2004)、自分が大切に思う相手と築き、維持している「関係」は、誰にとっても価値があるということも普遍的な事実であると言えるだろう。さらに、その相手との関係が個人の「幸福」に結びついていることは、Waldinger (2015) の研究対象であったアメリカ社会に限らず、ここ日本においても共通すると言える。そして、人間に健康そして幸福をもたらす唯一のものが「満足した人間関係」であるなら、それを手にするために唯一必要なのは「コミュニケーション」だということも、Waldinger (2015) の研究に付け加えることができ

るだろう。人間関係とはコミュニケーションなしには存在しないということは、これまでのコミュニケーション研究領域において研究者たちが主張しつづけてきたことであり、数々の研究がそれを証明してきた。

そして現在、日本では「人生 100 年時代」と言われている。人生を 100 年とするなら、本研究参加者たちの年齢はまだその半分にも達していない。これまでの 30-40 年という時間は彼女/彼らにとってそれぞれ異なるものであったと考えられるが、その時間の中で、そしてこの日本社会の中で、彼女/彼らが「人間関係」を重要なものであると捉え、「人間関係」自体に重きを置いてきたということは共通していたと言えるだろう。そして、この日本における独自の人間関係のあり方というものの自体、私たちにとってかけがえのない、そして素晴らしい「荷物」であると言えるのかもしれない。この「荷物」は本研究参加者を含めた日本人たちが「過去」から「現在」に持ち込み、共に過ごしてきただけでなく、この先の「未来」においてもそれぞれが一緒に過ごすことになるものではないだろうか。

本研究は、日本人について注目し、「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観をコミュニケーション学視点から追究してきた。本研究で得た知見が、日本的コミュニケーション理論を構築する一端の貢献を担い、さらにこの日本社会で生きる人々の人間関係をより豊かにすることに貢献できることを願っている。

引用文献

- Agnew, C. R., Van Lange, P. A. M., Rusbult, C. E., & Langston, C. A. (1998). Cognitive interdependence: Commitment and the mental representation of close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 939-954.
- Altman, I. & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin, 117*, 497-529.
- Baxter, L. A. & Montgomery, B.M. (1996). *Relating: Dialogues and dialectics*. New York: The Guilford Press.
- Baxter, L. A. & Montgomery, B. M. (2000). Rethinking communication in personal relationships form a dialectical perspective. In Dindia, K. & Duck, S. W. (Eds.), *Communication and personal relationships* (pp.31-54). Chichester: Wiley.
- Berger, C. R. & Calabrese, R. J. (1975). Some exploration in initial interaction and beyond: Toward a developmental theory of communication. *Human Communication Research, 1*, 99-112.
- Bratslavsky, E., Baumeister, R. F., & Sommer, K. L. (1998). To love or be loved in vain: The trials and tribulations of unrequited love. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The dark side of close relationships* (pp.307-326). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Buss, D. M. & Barnes, M. (1986). Preferences in human mate selection. *Journal of Personality and Social Psychology, 50*, 559-570.
- Canary, D. J. & Stafford, L. (1994). Maintaining relationships through strategic and routine interaction. In Canary, D. J. & Stafford, L. (Eds.), *Communication and relational maintenance* (pp.3-22). San Diego, CA: Academic Press.
- Carpenter, C. J. (2017). A relative commitment approach to understanding power in romantic relationships. *Communication Studies, 68*, 115-130.
- Cavallo, J. V., Murray, S. L., & Holmes, J. G. (2013). Regulating interpersonal risk. In Simpson, J. A. & Campbell, L. (Eds.), *The oxford handbook of close relationships* (pp.116-134). New York, Oxford: Oxford University Press.
- Choo, P., Levine, T. & Hatfield, E. (1996). Gender, love schemas, and reactions to romantic break-ups. *Journal of Social Behavior and Personality, 11*, 143-160.

- Derlega, V. J., Winstead, B. A., Mathews, A., & Braitman, A. L. (2008). Why does someone reveal highly personal information? Attributions for and against self-disclosure in close relationships. *Communication Research Reports, 25*, 115-130.
- Diener, E. & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology, 68*, 653-663.
- Duck, S. (1988). *Relating to others*. Milton Keynes: Open University Press.
- Duck, S. (2007). *Human relationships*. Los Angeles, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Duck, S. & Sants, H. (1983). On the origin of the specious: Are personal relationships really interpersonal states? *Journal of Social and Clinical Psychology, 1*, 27-41.
- Fletcher, G. & Kerr, P. (2013). Love, reality, and illusion in intimate relationships. In Simpson, J. A. & Campbell, L. (Eds.), *The oxford handbook of close relationships* (pp. 306-320). New York, Oxford: Oxford University Press.
- Frisby, B. N., Sidelinger, R. J., & Booth-Butterfield, M. (2015). No harm, no foul: A social exchange perspective on individual and relational outcomes associated with relational baggage. *Western Journal of Communication, 79*, 555-572.
- Gardner, J. & Oswald, A. (2006). Do divorcing couples become happier by breaking up? *Royal Statistical Society, Series A, 2*, 319-336.
- Goldsmith, D. (1990). A dialectics perspective on the expression of autonomy and connection in romantic relationships. *Western Journal of Speech Communication, 54*, 537-556.
- Griffin, E. (2009). Relationship development. *A first look at communication theory* (pp.110-111). New York: McGraw-Hill Companies.
- Heine, S. J. (2003). An exploration of cultural variation in self-enhancing and self-improving motivations. *Nebraska Symposium on Motivation, 49*, 101-128.
- Hill, C. T., Rubin, Z., & Peplau, L. A. (1976). Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues, 32*, 147-168.
- Jackl, J. A. (2018). Do you understand why I don't share that?: Exploring tellability within untellable romantic relationship origin tales. *Western Journal of Communication, 82*, 315-335.
- Jochen, B. & Lerner, R. (1999). *Action and self-development theory and research thorough life-span*. Thousand Oaks, CA: SAGE.
- Kenrick, D. T., Sadalla, E. K., Groth, G., & Trost, M. R. (1990). Evolution, traits, and the stages of human courtship: Qualifying the parental investment model. *Journal of Personality, 58*, 97-116.

- Kim, M. S. (2002). *Non-western perspectives on human communication*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Kim, M. S., Hunter, J. E., Miyahara, A., Horvath, A., Bresnahan, M., & Yoon, H. (1996). Individual-vs. culture-level dimensions of individualism and collectivism: Effects on preferred conversational styles. *Communication Monographs*, 63, 29-49.
- Kitayama, S. (2000). Collective construction of the self and social relationships: A rejoinder and some expectations. *Child Development*, 71, 1143-1146.
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: Good feelings in Japan and the United States. *Cognition and Emotion*, 14, 93-124.
- Knee, C. R., Patrick, H., & Lonsbary, C. (2003). Implicit theories of relationships: Orientations toward evaluation and cultivation. *Personality and Social Psychology Review*, 7, 41-55.
- Labelle, S. & Myers, S. A. (2016). The use of relational maintenance behaviors in sustained adult friendships. *Communication Research Reports*, 33, 310-316.
- Lindlof, T. & Taylor, B. (2019). *Qualitative communication research methods*. Thousand Oaks, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Littlejohn, S. W. & Foss, K. A. (2008). *Theories of human communication*. Belmont, CA: Thomson Wadsworth.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matsumoto, D. (1999). Culture and self: An empirical assessment of Markus and Kitayama's theory of independence and interdependence self-construal. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 289-310.
- McDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, 131, 202-223.
- Merolla, A. J. (2017). Further testing hope's role in constructive conflict communication. *Communication Quarterly*, 65, 481-501.
- Merolla, A. J., Weber, K. D., Myers, S. A., & Booth-Butterfield, M. (2004). The impact of past dating relationship solidarity on commitment, satisfaction, and investment in current relationships. *Communication Quarterly*, 52, 251-264.
- Mills, J. & Clark, M. S. (2001). Maintaining and enhancing a relationship by attending to it. In Harvey, J. H. & Wenzel, A. (Eds.), *Close romantic relationships: Maintenance and enhancement* (pp.13-25). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associate.
- Miyahara, A. & Imahori, T. T. (1999). Japanese facework in problematic communication. *The Annual Conference of the International Communication Association*. San Francisco, CA.

- Moore, J., Kienzle, J., & Flood-Grady, E. (2015). Discursive struggles of tradition and non-tradition in the retrospective accounts of married couples who cohabited before engagement. *Journal of Family Communication, 14*, 95-112.
- Morling, B., Kitayama, S., & Miyamoto, Y. (2002). Cultural practices emphasize influence in the United States and adjustment in Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28*, 311-323.
- OECD (2005). Social isolation. *Society at a glance: OECD social indicators 2005*. https://www.oecd-ilibrary.org/social-issues-migration-health/society-at-a-glance-2005_soc_glance-2005-en (December 9, 2019).
- Oishi, S. & Diener, E. (2001). Goals, culture, and subjective well-being. *Society for Personality and Social Psychology, 27*, 1674-1682.
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H, Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development, 71*, 1121-1142.
- Sagrestano, L. M., Heavey, C.L., & Christensen, A. (2006). Individual differences versus social structural approaches to explaining demand-withdraw and social influence behaviors. In Dindia, K. & Canary, D. J. (Eds.), *Sex differences and similarities in communication* (pp.379-395). New York: Lawrence Erlbaum Associate.
- Sidelinger, R. J. & Booth-Butterfield, M. (2009). Starting off on the wrong foot: An analysis of mate value, commitment and partner "baggage" in romantic relationships. *Human Communication, 12*, 403-419.
- Silverman, D. & Marvasti, A. (2008). *Doing qualitative research*. Thousand Oaks, Los Angeles, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Simpson, J. A. (1987). The dissolution of romantic relationships: Factors involved in relationship stability and emotional distress. *Journal of Personality and Social Psychology, 53*, 683-692.
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin, 20*, 580-591.
- Slotter, E.B., Gardner, W. L., & Finkel, E. J. (2010). Who am I without you? Influence of romantic breakup on the self-concept. *Personality and Social Psychology Bulletin, 36*, 147-160.
- Solomon, D. H. (2016). Relational turbulence model. In Berger, C. R. & Roloff, M. E. (Eds.), *The international encyclopedia of interpersonal communication, vol. 3* (pp.1460-1468). NY: John Wiley & Sons, Inc.

- Solomon, D. H., Knobloch, J. A., & McLaren R. M. (2016). Relational turbulence theory: Explaining variation in subjective experiences and communication within romantic relationships. *Human Communication Research, 42*, 507-532.
- Solomon, D. H., Weber, K. M., & Steuber, K. R. (2010). Turbulence in relational transitions. In Smith, S. W. & Wilson, S. R. (Eds.), *New directions in interpersonal communication research* (pp.115-134). Thousand Oak, CA: Sage.
- Sorenson, K. A., Russell S. M., Harkness, D. J., & Harvey, J. H. (1993). Account-making, confiding, and coping with the ending of a close relationship. *Journal of Social Behavior and Personality, 8*, 73-86.
- Stafford, L. & Canary, D. J. (1991). Maintenance strategies and romantic relationship type, gender and relational characteristics. *Journal of Social and Personal Relationships, 8*, 217-242.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review, 93*, 119-135.
- Strauss, A. & Corbin, J. (1998). *Basic qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Sutton, J. (1991). *Sunk costs and market structure: Price competition, advertising, and the evolution*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Theiss, J. A. & Nagy, M. E. (2012). A cross-cultural test of the relational turbulence model: Relationship characteristics that predict turmoil and topic avoidance for Koreans and Americans. *Journal of Social and Personal Relationships, 29*, 545-565.
- Theiss, J. A. & Nagy, M. E. (2013). A relational turbulence model of partner responsiveness and relationship talk across cultures. *Western Journal of Communication, 77*, 186-209.
- Thibaut, J. W. & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups*. NY: Wiley.
- Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Kitayama, S. (2004). Cultural constructions of happiness: Theory and empirical evidence. *Child Development Journal of Happiness Studies, 5*, 223-239.
- Vander Voort, L. & Duck, S. (2000). Talking about "Relationships": Variation on a theme. In Dindia, K. & Duck, S. (Eds.), *Communication and personal relationships*. NY: John Wiley & Sons, Inc.
- Vangelisti, A. L. (2011). Interpersonal processes in romantic relationships. In Knapp, M. L. & Daly, J. A. (Eds.), *Handbook of interpersonal communication* (pp.597-631). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Waldinger, R. (2015). What makes a good life? Lesson form the longest study on happiness. *TED talks*. https://www.ted.com/talks/robert_waldinger_what_makes_a_good_life_lessons_from_the_longest_study_on_happiness#t-2891 (February 15, 2019).

- Weber, A. L. (1998). Losing, leaving, and letting go: Coping with nonmarital breakups. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The dark side of close relationships* (pp.267-306). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Weigel, D. J., Lalasz, C. B., & Weiser, D. A. (2016). Maintaining relationships: The role of implicit relationship theories and partner fit. *Communication Reports*, 29, 23-34.
- Wilder, S. E. (2012). A dialectical examination of remarriage dyadic communication and communication with social networks. *Qualitative Research Report in Communication*, 13, 63-70.
- Yamaguchi, A., Kim, M. S., Oshio, A., & Akatsu, S. (2016). Relationship between bicultural identity and psychological well-being among American and Japanese older adults. *Health Psychology Open*. January-June 2016, 1-12.
- 朝日新聞 (2019) 『退職代行サービス業者 vs. 弁護士』 (発行日: 2019年5月20日 夕刊)。
- 朝日新聞デジタル (2014) 『女性都議へのヤジ問題』 <https://www.asahi.com/topics/word> 女性都議へのヤジ問題.html (閲覧日: 2019年12月9日、記事掲載日: 2014年7月8日)。
- 朝日新聞デジタル (2015) 『戦後70周年 ビジュアル年表 浅間山荘事件』 <http://www.asahi.com/special/sengo/visual/page43.html> (閲覧日: 2019年12月9日、記事掲載日: 2015年12月25日)。
- 朝日新聞デジタル (2017) 『ツイッターにリベンジポルノ投稿か 学生が名誉毀損容疑』 <http://www.asahi.com/articles/ASK3M6WRGK3MTIPE016.html> (閲覧日: 2019年12月4日、記事掲載日: 2017年3月20日)。
- 朝日新聞デジタル (2018) 『待機問題見える化プロジェクト』 http://www.asahi.com/special/taikijido/?iref=pc_extlink (閲覧日: 2019年12月9日、記事掲載日: 2018年1月19日)。
- 阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会 貧困・格差と社会的包摂』 講談社。
- 荒川和久 (2017) 『超ソロ社会』 PHP 新書。
- 池田理知子・クレマー, E. M. (2000) 『異文化コミュニケーション・入門』 有斐閣アルマ。
- 石本奈都美・今川民雄 (2001) 「青年期における失恋後の立ち直り過程」『対人社会心理学研究』 1, 119-132。

- 石本奈都美・今川民雄（2003）「青年期における恋愛関係崩壊による心理的变化に影響する要因について」『対人社会学研究』第3号, 39-45。
- 板場良久（著）（2011）「第2章 コミュニケーションと文化」日本コミュニケーション学会（編著）『日本コミュニケーション学会40周年記念 現代日本のコミュニケーション研究－日本コミュニケーション学の足跡と展望－』（pp.111-118）三修社。
- 大阪市 市民局ダイバーシティ推進室人権企画課（2018）『多様な性のあり方を理解し認め合うためのガイドブック ～誰もが自分らしく生きることのできる社会をめざして～ ver.1.0』<https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/cmsfiles/contents/0000397/397620/pgaidev1.0.pdf>（閲覧日：2019年10月15日）。
- 抱井尚子（著）（2011）「科学的・社会的営為としての研究」末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子（編）『コミュニケーション研究法』（pp.18-27）ナカニシヤ出版。
- 警視庁（2019）『特殊詐欺対策』https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki31/1_hurikome.htm（閲覧日：2019年12月9日）。
- 高坂康雅（2016）「日本における心理学的恋愛研究の動向と展望」『和光大学現代人間学部紀要』第9号, 5-17。
- 厚生労働省（2012）『従業員数が100人以下の事業主の皆様 改正育児・介護休業法が全面施行されます！』<https://www.mhlw.go.jp/seisaku/2012/03/02.html>（閲覧日：2019年12月9日）。
- 厚生労働省（2016）『平成28年版厚生労働白書－人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える－』<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/>（閲覧日：2019年10月15日）。
- 厚生労働省（2019）『職場における妊娠・出産・育児休業・介護休業等に関するハラスメントについて』https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/seisaku06/index.html（閲覧日：2019年12月9日）。
- 厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当）（2018）『平成30年我が国の人口動態』<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>（閲覧日：2019年9月15日）。
- 小坂貴志（2017）『異文化コミュニケーションのA to Z』研究社。
- コトバンク（2018）『金婚式・銀婚式』<https://kotobank.jp/word/金婚式%2F銀婚式-897395>（閲覧日：2018年12月30日）。

- コトバンク (2019) 『マタニティハラスメント』 <https://kotobank.jp/word/マタニティハラスメント-1750067> (閲覧日: 2019年12月9日)。
- ゴードン, R. M. (著) (2017) 「愛のピラミッド」 ボルマンス, L. (編) 鈴木晶 (訳) 『世界の学者が語る 愛』 (pp.75-80) 西村書店。
- 戈木クレイグヒル滋子 (2008) 『質的研究方法ゼミナール』 医学書院。
- 戈木クレイグヒル滋子 (2009) 「実践しながら学ぶグラウンデッド・セオリー・アプローチ: 現象を捉えるステップ データの読み込み・プロパティとディメンション・ラベル名」 『インターナショナル ナーシング レビュー』 第32巻第1号, 46-56。
- 戈木クレイグヒル滋子 (2014) 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論」 『Keio SFC Journal (慶應義塾大学湘南藤沢学会)』 第14巻, 30-43。
- 佐藤直樹 (2017) 『目くじら社会の人間関係』 講談社。
- 猿橋順子 (著) (2011) 「インタビュー法」 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (編) 『コミュニケーション研究法』 (pp.142-155) ナカニシヤ出版。
- 産経ニュース (2016) 『独身男性市長に早く結婚を 社民女性市議を戒告 秋田・大館市議会』 <https://www.sankei.com/politics/news/160301/pl1603010043-n1.html> (閲覧日: 2019年12月9日、記事掲載日: 2016年3月2日)。
- 産経ニュース (2019) 『長男が家庭内暴力 逮捕の元農水事務次官』 <https://www.sankei.com/affairs/news/190602/afr1906020009-n1.html> (閲覧日: 2019年12月9日、記事掲載日: 2019年6月2日)。
- 下重暁子 (2016) 『家族という病 2』 幻冬舎。
- ジョブ レインボー マガジン (2019) 『用語解説』 https://jobrainbow.jp/magazine/category/lgbt_glossary (閲覧日: 2019年12月9日)。
- 鈴木伸元 (2010) 『加害者家族』 幻冬舎。
- スタンバーグ, R. J.・ヴァイス, K. (著) (2009) 和田実・増田匡裕 (訳) 『愛の心理学』 北大路書房。
- ストラウス, A.・コービン, J. (著) (2009) 操華子・森岡崇 (訳) 『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』 医学書院。
- 多川則子・吉田俊和 (2006) 「日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響」 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科 社会心理学研究』 第22巻第2号, 126-138。
- 竹内一郎 (2014) 『なぜ私たちは他人の目を気にしてしまうのか』 三笠書房。

- ダック, S. (著) (2000) 和田実 (訳) 『コミュニケーションと人間関係』ナカニシヤ出版。
- 立脇洋介・松井豊・比嘉さやか (2005) 「日本における恋愛研究の動向」『筑波大学心理学研究』第 29 卷, 71-87。
- 土居健郎 (1971) 『甘えの構造』弘文堂。
- 内閣府・男女共同参画局 (2018) 『男女共同参画白書 令和元年版』 http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/pdf/r01_genjo.pdf (閲覧日: 2019 年 12 月 9 日)。
- 中西絵里 (参議院常任委員会調査室 特別調査室) (著) (2017) 「LGBT の現状と課題—性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き—」『立法と調査』No. 394. https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2017pdf/20171109003.pdf (閲覧日: 2019 年 10 月 15 日)。
- 中西雅之 (著) (2011) 「第 1 章 対人コミュニケーションの特徴と研究概要」日本コミュニケーション学会 (編著) 『日本コミュニケーション学会 40 周年記念 現代日本のコミュニケーション研究—日本コミュニケーション学の足跡と展望—』(pp.18-24) 三修社。
- 中根千枝 (2019) 『タテ社会と現代日本』講談社。
- 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津 (2014) 「質的研究方法について考える—グランデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として—」『異文化コミュニケーション論集』第 12 卷, 67-84。
- 日本経済新聞 電子版 (2014) 『女性蔑視許されない 国会ヤジを与野党が批判』 https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0401L_U4A700C1CC0000/ (閲覧日: 2019 年 12 月 9 日、記事掲載日: 2014 年 7 月 4 日)。
- 日本経済新聞 電子版 (2016) 『電通女性社員の自殺は労災 三田労基署、残業倍増を認定』 https://r.nikkei.com/article/DGXLASDG07H9P_X01C16A0CR8000?s=5 (閲覧日: 2019 年 12 月 9 日、記事掲載日: 2016 年 10 月 7 日)。
- 日本放送協会 (2018) 『第 10 回 日本人の意識調査』 https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190107_1.pdf (閲覧日: 2019 年 9 月 15 日)。
- ハットフィールド, E. ・フォーブス, M. (著) (2017) 「恋愛は永遠？」ボルマンズ, L. (編) 鈴木晶 (訳) 『世界の学者が語る 愛』(pp.14-18) 西村書店。
- 浜口恵俊 (1982) 『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社。

- 浜口恵俊 (1996) 『日本型信頼社会の復権』 東洋経済新報社。
- 羽山博 (2018) 『やさしく学ぶデータ分析に必要な統計の教科書』 インプレス。
- 原聰 (2012) 『日本人の価値観－異文化理解の基礎を築く－』 かまくら春秋社。
- パンチ, K. F. (著) (2005) 川合隆男 (監訳) 『社会調査入門 量的調査と質的調査の活用』 慶応義塾大学出版会。
- 平山修平 (著) (2011) 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (編) 『コミュニケーション研究法』 (pp.184-195) ナカニシヤ出版。
- フリック, U. (著) (2011) 小田博志 (監訳) 山本則子・春日常・宮崎尚子 (訳) 『新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』 春秋社。
- ヘンドリック, S.・ヘンドリック, C. (著) (1998) 齊藤勇 (監訳) 上村仁司・上村真代 (訳) 『恋愛・性・結婚の人間関係学』 川島書店。
- ヘンドリック, S.・ヘンドリック, C. (著) (2000) 齊藤勇 (監訳) 奥田大三 (訳) 『恋愛学講義』 金子書房。
- ホフステード, H. (著) (1995) 岩井紀子・岩井八郎 (訳) 『多文化世界』 有斐閣。
- 牧野幸志 (2013) 「関係崩壊における対処方略とその効果 (1) - 親密な人間関係の崩壊時における対処方略の探索 -」 『経営情報研究』 第 21 巻第 1 号, 19-33。
- 馬淵仁 (2010) 『クリティーク 多文化、異文化－文化の捉え方を超克する』 東信堂。
- 宮原哲 (2000) 『コミュニケーション最前線』 松柏社。
- 宮原哲 (2006) 『入門コミュニケーション論』 松柏社。
- ミューレン, P. E.・パーセル, R.・パテ, M. (著) (2003) 詫間武俊 (監訳) 安岡真 (訳) 『ストーカーの心理－治療と問題の解決に向けて』 サイエンス社。
- 村上千鶴子 (2009) 『ストーカー』 駿河台出版社。
- 和田実 (2000) 「大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応－性差と恋愛関係進展度からの検討－」 『実験社会心理学研究』 第 40 巻第 1 巻, 38-49。
- 和田実・増田匡裕・柏尾眞津子 (2015) 『対人関係の心理学』 北大路書房。
- 渡辺真由子 (2015) 『リベンジポルノ－性を拡散される若者たち』 弘文堂。